

シンボルマークは、秋田県北秋田市(旧森吉町)に所在する
白坂(しろざか)遺跡出土の「岩偶」です。
縄文時代晩期初頭、1992年8月発見、高さ7cm。凝灰岩。

ふ　か　　わたり

深　渡　A　遺　跡

—森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XVII—

2006・3

秋田県教育委員会



1 遺跡全景（東→）



2 遺跡全景（北東→）



1 S I 29 壓穴住居跡 確認（南東→）



2 S I 29 壓穴住居跡 現況（南東→）

序

本県には、これまでに発見された約4,600か所の遺跡に加え、先人の遺産である埋蔵文化財が数多く残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、これまで大きな洪水や渇水の被害に見舞われてきた米代川や阿仁川の流域では、自然災害の脅威や不安を解消するためのダム建設が長く望まれ、洪水被害の軽減、灌漑用水・水道用水の供給、水辺環境の保全などを目的とする森吉山ダムの建設事業が行われてきました。

このことをうけ秋田県教育委員会では地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに取り組んできました。

本報告書は、森吉山ダム建設に先立って、平成15・16年度の2か年に北秋田市において実施した深渡A遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。調査の結果、縄文時代中期の竪穴住居跡や晩期のプラスコ状土坑、近世の掘立柱建物跡等が検出され、当時の人々の生活の一端が明らかになりました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました国土交通省東北地方整備局森吉山ダム工事事務所、北秋田市、北秋田市教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成18年3月

秋田県教育委員会

教育長 小野寺 清

例　　言

1. 本報告書は、森吉山ダム建設事業に係る、秋田県北秋田市（旧北秋田郡森吉町）森吉字深渡家ノ前45外に所在する深渡A遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、第1次調査を2003（平成15）年9月17日から11月7日にかけて、第2次調査を2004（平成16）年5月11日から7月9日にかけてそれぞれ実施した。
3. 深渡A遺跡の調査結果については、平成15・16年度刊行の『深渡A遺跡発掘調査資料』、同『秋田県埋蔵文化財センター年報』等において、整理作業途上の所見を元にその概要を報告している。本報告書の記載と上記資料とで相違がある部分は、本報告書をもって訂正したものとする。
4. 本報告書第1図・第2図は、国土地理院発行1/50,000地形図「米内沢」・「大葛」を複製して作成した。また、第3図は森吉山ダム工事事務所提供の1/2,500「森吉山ダム貯水池平面図」等をもとに作成した。
5. 土層断面図等の土色の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財團法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に掲った。
6. 発掘調査における以下の作業を下記の業者に委託した。
水準測量および方眼杭設置：有限会社上津野アイタム（第1次調査）
　　有限会社ダイワ技術（第2次調査）
遺跡空中写真撮影：有限会社デジタルビジネス秋田（第1次調査）
　　株式会社シン技術コンサル（第2次調査）
7. 以下の自然科学的分析は下記の業者に委託した。なお、本報告書では本文中（第5章）に引用・編集するにとどめた。
放射性炭素年代測定・樹種同定：パリノ・サーヴェイ株式会社（第1次調査）
　　株式会社古環境研究所（第2次調査）
8. 整理作業における製図・実測等の一部作業は、下記の業者に委託した。
石器実測・製図：株式会社アルカ
9. 本報告書の執筆は、第1章～第3章を三浦俊成・石川和良、第4章を首原一彦・三浦俊成・石川和良、第6章を小林克・石川和良が分担して行った。また、編集は石川和良が行った。

凡　　例

1. 本報告書に掲載した平面図の方位は、日本測地系平面直角座標第X系座標北である。原点（IA 50）における座標北と磁北との偏角は、西に $8^{\circ} 10'$ である。本文および巻末の報告書抄録記載の経緯度は世界測地系に基づく。

2. 各遺構に付している略記号は以下の通りである。

S I : 堅穴住居跡	S K F : フラスコ状土坑	S K : 土坑
S B : 掘立柱建物跡	S N : 焼土遺構	S E : 井戸跡
SW : 炭窯	S D : 溝跡	S A : 柱穴列
S X : 性格不明遺構	S K P : 柱穴様ピット	

3. 遺構実測図は、原則として1/40を基本とし、適宜1/20・1/60・1/80・1/120の縮尺で掲載した。挿図には、それぞれスケールを付している。

4. 遺物実測図は、原則として1/3を基本とし、適宜2/3の縮尺で掲載した。挿図には、それぞれスケールを付している。

5. 遺構内の遺物出土状況は、実測図を掲載する以外に、場合により土器は●、石器は▲で表記した。
また、挿図中に使用した略記号は以下の通りである。

S : 碑

6. 挿図中の焼土範囲・炭化材集中範囲等は、グレースケールの濃淡をもって表した。

目 次

巻頭図版

序
例言
凡例
目次
挿図目次
表目次
図版目次

第1章 はじめに.....	1
第1節 調査に至る経過.....	1
第2節 調査要項.....	2
第2章 遺跡の環境.....	3
第1節 遺跡の位置と立地.....	3
第2節 歴史的環境.....	4
第3章 調査の概要.....	12
第1節 遺跡の概観.....	12
第2節 調査の方法.....	12
1 発掘調査.....	12
2 室内整理.....	13
第3節 調査の経過.....	13
第4章 調査の記録.....	15
第1節 基本層序.....	15
第2節 檜出遺構と出土遺物.....	15
1 概要.....	15
2 銚文時代.....	20
(1) 竪穴住居跡.....	20
(2) フラスコ状土坑.....	21
(3) 土坑.....	30
3 近世.....	31
(1) 柱穴列.....	31
(2) 掘立柱建物跡.....	31
(3) 井戸跡.....	33
(4) 燃上遺構.....	33
(5) 墓窯.....	34
4 時代不明.....	35
(1) 柱穴列.....	35
(2) 掘立柱建物跡.....	36
(3) 溝跡.....	36
(4) 燃上遺構.....	37
(5) 土坑.....	37
(6) 性格不明遺構.....	44
第3節 遺構外出土遺物.....	45
第5章 自然科学的分析.....	90
第1節 第1次調査分.....	90
第2節 第2次調査分.....	92
第6章 まとめ.....	97

図版

報告書抄録

挿図目次

第1図 遺跡位置図	3	第24図 S E139戸門跡	67
第2図 周辺遺跡分布図	11	第25図 S N18・19焼土遺構 SW255灰室	68
第3図 遺跡周辺地形図・基本土層断面位置図	17	第26図 S A291・292柱穴列	69
第4図 基本土層柱状図	18	第27図 S B275掘立柱建物跡	70
第5図 遺構配置図	19	第28図 S B276掘立柱建物跡	71
第6図 遺構配置図(縄文時代)	48	第29図 S D153溝跡 S N230焼土遺構	72
第7図 S I 29堅穴住居跡(1)	49	第30図 S K20・24・106・111・112土坑	73
第8図 S I 29堅穴住居跡(2)	50	第31図 S K25土坑	74
第9図 S I 29堅穴住居跡(3)	51	第32図 S K136・151・152・204土坑	75
第10図 S I 29堅穴住居跡(4)	52	第33図 S K209・210・218土坑	76
第11図 SKF23フ拉斯コ状土坑	53	第34図 S K220・221・222・232土坑	77
第12図 SKF22・80・149フ拉斯コ状土坑	54	第35図 S X126・134・150性格不明遺構	78
第13図 SKF154・205・208フ拉斯コ状土坑	55	第36図 遺構内出土土器(1)	79
第14図 SKF206・207フ拉斯コ状土坑	56	第37図 遺構内出土土器(2)	80
第15図 SKF211・215フ拉斯コ状土坑	57	第38図 遺構内出土石器(1)	81
第16図 SKF219・231フ拉斯コ状土坑	58	第39図 遺構内出土石器(2)	82
第17図 SKF233・261フ拉斯コ状土坑 S K87土坑	59	第40図 遺構内出土石器(3)	83
第18図 SKF274フ拉斯コ状土坑 S K28土坑	60	第41図 遺構外出土土器	84
第19図 遺構配置図(近世)	61	第42図 遺構外出土石器(1)	85
第20図 S B35掘立柱建物跡 S A156柱穴列	62	第43図 遺構外出土石器(2)	86
第21図 S B30掘立柱建物跡	64	第44図 遺構外出土石器(3)	87
第22図 S B30掘立柱建物跡柱穴	65	第45図 遺構外出土石器(4)	88
第23図 S B32掘立柱建物跡	66	第46図 遺構外出土石器(5)	89

表目次

第1表 周辺の遺跡一覧(1)	9	第8表 遺構外出土石器類一覧表	47
第2表 周辺の遺跡一覧(2)	10	第9表 第1次調査分	
第3表 調査経過(第1次:平成15年度)	13	放射性炭素年代測定および樹種同定結果表	91
第4表 調査経過(第2次:平成16年度)	14	第10表 第1次調査分 历年校正結果表	92
第5表 遺構内出土土器類一覧表	46	第11表 第2次調査分	
第6表 遺構外出土土器類一覧表	46	放射性炭素年代測定および历年校正結果表	93
第7表 遺構内出土石器類一覧表	47		

図版目次

- 巻頭図版 1 1 道跡全景（東→）
2 道跡全景（北東→）
- 巻頭図版 2 1 S I 29堅穴住居跡 確認（南東→）
2 S I 29堅穴住居跡 現況（南東→）
- 図版 1 1 道跡全景（東→）
2 道跡全景（南→）
- 図版 2 1 S I 29堅穴住居跡 現況（南西→）
2 S I 29堅穴住居跡 複式炉・石組 現況（北東→）
- 図版 3 1 S I 29堅穴住居跡 断面（南西→）
2 S I 29堅穴住居跡 現況（南東→）
3 S I 29堅穴住居跡 完掘（南東→）
- 図版 4 1 調査区中央部
SKFプラスコ状土坑群 完掘（南東→）
2 SKF22プラスコ状土坑 断面（西→）
3 SKF22プラスコ状土坑 完掘（西→）
4 SKF23プラスコ状土坑 断面（北西→）
5 SKF23プラスコ状土坑 完掘（北西→）
- 図版 5 1 SKF23プラスコ状土坑 遺物出土状況（北西→）
2 SKF80プラスコ状土坑 断面（南東→）
3 SKF80プラスコ状土坑 完掘（南東→）
4 SKF149プラスコ状土坑 断面（南東→）
5 SKF149プラスコ状土坑 完掘（南東→）
6 SKF154プラスコ状土坑 断面（北西→）
7 SKF154プラスコ状土坑 完掘（北西→）
8 SKF205プラスコ状土坑 断面（南→）
- 図版 6 1 SKF205プラスコ状土坑 完掘（北西→）
2 SKF206プラスコ状土坑 断面（南→）
3 SKF206プラスコ状土坑 現況（南→）
4 SKF206プラスコ状土坑 完掘（南→）
5 SKF207プラスコ状土坑 断面（南→）
6 SKF207プラスコ状土坑 完掘（南→）
7 SKF208プラスコ状土坑 断面（南西→）
8 SKF208プラスコ状土坑 完掘（南西→）
- 図版 7 1 SKF211プラスコ状土坑 断面（南→）
2 SKF211プラスコ状土坑 完掘（南→）
3 SKF215プラスコ状土坑 断面（北→）
4 SKF215プラスコ状土坑 完掘（北→）
- 図版 8 1 SKF233プラスコ状土坑 断面（南東→）
2 SKF233プラスコ状土坑 完掘（南東→）
3 SKF261プラスコ状土坑 断面（南西→）
4 SKF261プラスコ状土坑 完掘（南西→）
5 SKF274プラスコ状土坑 断面（北東→）
6 SKF274プラスコ状土坑 完掘（北東→）
7 SK87土坑 断面（北東→）
8 SK87土坑 完掘（北東→）
- 図版 9 1 調査区南東部全景（南西→）
2 SB35掘立柱建物跡・SA156柱穴列 完掘（南西→）
- 図版 10 1 SB35掘立柱建物跡・SA156柱穴列 完掘（南東→）
2 SB30掘立柱建物跡 完掘（北東→）
3 SB32掘立柱建物跡 完掘（南東→）
4 SN18燒土遺構 断面（南西→）
5 SK24土坑 断面（北西→）
6 SK24土坑 完掘（北西→）
7 SK209土坑 断面（西→）
8 SK209土坑 完掘（西→）
- 図版 11 1 SK232土坑 断面（西→）
2 SK232土坑 完掘（西→）
3 SE139井戸跡 確認（西→）
4 SE139井戸跡 断面（西→）
5 SE139井戸跡 完掘（西→）
6 SE139井戸跡 現況（西→）
7 SW255灰窯 確認（北西→）
8 SW255灰窯 断面（南西→）
- 図版 12 遺構内出土土器（1）
- 図版 13 遺構内出土土器（2）
- 図版 14 遺構内出土石器
- 図版 15 遺構外出土土器
- 図版 16 遺構外出土石器

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過

秋田・岩手の県境付近の中岳に源流をもち、秋田県北部を貫流する米代川の流域では、過去、幾多の洪水による被害を受けてきた。

なかでも、昭和47年7月、梅雨前線の停滞による大洪水は既往最大規模のもので、米代川上流地域の無堤部では氾濫、堤防は決壊するなどして旧能代市や旧二ツ井町の市街地などが浸水し、甚大な被害を受けた。この大洪水を契機に「米代川工事実施基本計画」が改訂され、洪水調節を目的とする米代川上流ダム群の一つとして、阿仁川支流の小又川に阿仁川ダムが建設されることになった。のちに森吉山ダムと改称されるこのダムは、水量調節のほか、灌漑用水・水道用水の供給、水力発電等を目的とする多目的ダムである。

森吉山ダム建設に伴い、事業本体である建設省（現国土交通省）東北地方建設局森吉山ダム工事事務所は、文化財保護法に基づき、秋田県教育委員会に対し貯水池流域面積248.0km²の遺跡分布調査を依頼した。これを受け、秋田県教育委員会は、遺跡分布調査を平成4・5年の2か年にわたって実施し、その結果、桐内遺跡、二重鳥遺跡、漆下遺跡、棚岱遺跡、碎渕遺跡、丹瀬口遺跡の新発見の6遺跡が開発区域に係わることを確認した。この結果に基づき、森吉山ダム工事事務所と秋田県教育委員会は協議を重ね、平成3年発行の『秋田県遺跡地図（県北版）』に記された「周知の遺跡」、および遺跡分布調査で発見された「新発見の遺跡」の双方についての遺跡範囲確認調査を秋田県教育委員会が実施し、遺構・遺物の広がりを把握していくことを申し合わせた。

秋田県教育委員会では、平成6年度より遺跡範囲確認調査を実施し、平成10年にすべての遺跡範囲確認調査を終了し、60の遺跡を確認した。

森吉山ダム関連の工事は、平成6年の下流工事用道路から開始され、翌年には事業地内の上流迂回路に移った。一方、平成10年の第12回日本ジャンボリーの開催に伴い、森吉町教育委員会によって、平成7年に日廻岱A遺跡・碎渕遺跡、平成8年に上戸戸D遺跡、深渡遺跡・地蔵岱遺跡・森吉家ノ前B遺跡・天津場C遺跡のアクセス道路部分の発掘調査が実施され、記録保存が図られている。森吉山ダム建設事業に係る発掘調査については、遺跡範囲確認調査を行った遺跡のなかから、記録保存の必要なものについて、工事工程に合わせて発掘調査を実施する合意が国土交通省東北地方整備局森吉山ダム工事事務所と秋田県教育委員会の間でなされている。本遺跡の遺跡範囲確認調査は、平成9年、深渡遺跡とともに実施した。秋田県教育委員会では、平成9年から平成17年の9年間で、姫ヶ岱C・同D遺跡・桐内A～D遺跡・桐内沢遺跡・日廻岱A・同B遺跡・向様田A～F遺跡・碎渕遺跡・漆下遺跡・森吉家ノ前A遺跡・同C遺跡・深渡遺跡（平成9年、平成15年）・深渡A遺跡・地蔵岱遺跡の発掘調査を実施している（一部未調査区域もあり）。

深渡A遺跡の発掘調査は2か年にわたって行い、遺跡総面積9,700m²のうち、平成15年度（9月16日～11月7日）に5,000m²を、平成16年度（5月11日～7月9日）に4,700m²の調査を実施した。

第2節 調査要項

遺跡名	深渡A遺跡(略号2 FW-A)
所 在 地	秋田県北秋田市(旧北秋田郡森吉町) 森吉字深渡家ノ前45外
調査期間	第1次:平成15年9月16日~11月7日 第2次:平成16年5月11日~7月9日
調査目的	森吉山ダム建設事業に係る発掘調査
調査面積	9,700m ² (第1次:5,000m ² 第2次:4,700m ²)
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	
[平成15年度]	菅原一彦(秋田県埋蔵文化財センター 学芸主事) 河田弘幸(秋田県埋蔵文化財センター 学芸主事) 山本起嗣(秋田県埋蔵文化財センター 学芸主事) 石川和良(秋田県埋蔵文化財センター 学芸主事) 鈴木健一(秋田県埋蔵文化財センター 調査・研究員) 藤田大誠(秋田県埋蔵文化財センター 調査・研究員) 松尾睦子(秋田県埋蔵文化財センター 調査・研究員) 山田宗(秋田県埋蔵文化財センター 調査・研究員)
[平成16年度]	菅原一彦(秋田県埋蔵文化財センター 学芸主事) 三浦俊成(秋田県埋蔵文化財センター 学芸主事) 藤田大誠(秋田県埋蔵文化財センター 調査・研究員) 山田宗(秋田県埋蔵文化財センター 調査・研究員)
総務担当者	
[平成15年度]	金義晃(秋田県埋蔵文化財センター 総務課長) 池端徹(秋田県埋蔵文化財センター 副主幹) 高橋修(秋田県埋蔵文化財センター 主任) 田口旭(秋田県埋蔵文化財センター 主事)
[平成16年度]	渡辺憲(秋田県埋蔵文化財センター 総務課長) 池端徹(秋田県埋蔵文化財センター 副主幹) 高橋修(秋田県埋蔵文化財センター 主任) 田口旭(秋田県埋蔵文化財センター 主事) ※職名は調査年度当時のもの
調査協力機関	国土交通省東北地方整備局森吉山ダム工事事務所 北秋田市(旧森吉町)・北秋田市(旧森吉町)教育委員会

(第1章 参考文献)

建設省東北地方建設局能代工事事務所 「能代工事事務所60年のあゆみ」 1997(平成9)年

川村公一 「子孫に残す歴史の記録 森吉路 過去から未来へ」 モリトビア選書2

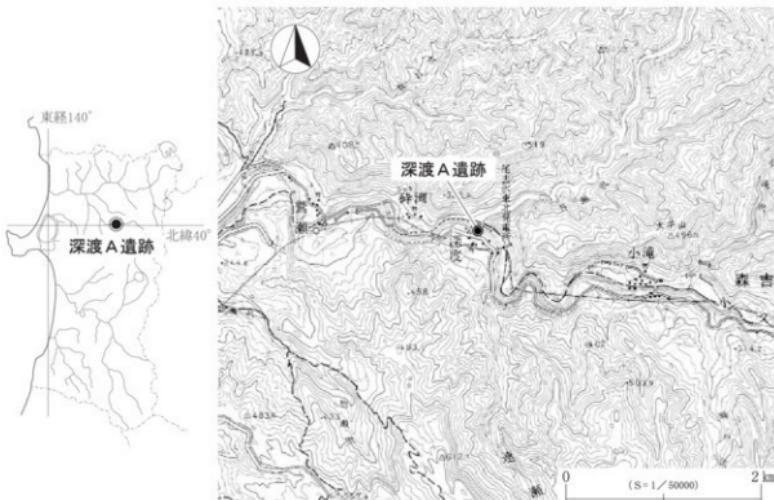
建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所 1993(平成5)年

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置と立地

深渡A遺跡は、秋田県北秋田市（旧森吉町）に所在し、北緯 $40^{\circ} 02' 48''$ 、東経 $140^{\circ} 31' 25''$ （世界測地系）に位置する。秋田内陸縦貫鉄道阿仁前田駅の東方約9km、森吉山の北麓を西に流れる小又川左岸の段丘上に立地し、遺跡の東側約300m下流側には繩文時代中期後葉の住居跡等を検出した深渡遺跡がある。遺跡の所在する旧森吉町は秋田県の内陸北部に位置し、町西部を北流する阿仁川と鹿角市境から流れ出て阿仁川に合流する小又川の流域からなる。東は鹿角市・旧仙北郡田沢湖町、北は旧北秋田郡比内町・鷹巣町・合川町、西は北秋田郡上小阿仁村と接する。南の旧北秋田郡阿仁町との境に、町名の由来となった標高1,454mのアスピーテ・トロイテ複式火山である森吉山があり、その東側一帯は森吉山県立自然公園となっている。森吉山の北側には、谷底平野である小又川低地を挟んで、北北東に小聚森（標高1,010m）、北に高鳥帽子（標高764m）、北西に源五郎岳（標高559m）などが東西に連なっており、森吉山頂上からの距離は、いずれも約10~11kmである。これらの山地は分水嶺をなし、行政区区分上も旧鷹巣町や旧比内町との境界をなしている。

本遺跡近くを流れる小又川は、旧北秋田郡・旧仙北郡・鹿角市の境界をなす三ツ又森（標高1,119m）、柴倉岳（標高1,178m）に源を発し、六郎沢・粒様沢・ノロ川・速瀬沢などの支流を合わせ、森吉山北麓を蛇行しながら西流し、阿仁前田地内で阿仁川と合流する。



第1図 遺跡位置図

小又川沿いには集落や耕作地が分布する段丘面が認められ、中流域では洪積段丘を含め最大6段の段丘面が確認される。平坦地は、広いところで南北約500m、狭いところで約20m、南北両側より山が迫ってきており、概ね小又川右岸側にあたる北側山地の山腹斜面の方が急勾配である。山麓の平地縁辺部は、集村形態をとる集落の居住地として利用され、平坦部の多くは畑地や水田として利用されていた。昭和40年代以降、畑地から水田への転換が急速に進むとともに場整備事業が行われた。

深渡A遺跡の表層地層は、第四紀更新世における段丘堆積物層に属し、基本的には砾・砂を主とした泥を含む段丘構成層であり、小又川流域の低地には完新世の沖積層が分布する。本遺跡の周辺は、先第三系の古期堆積岩類を基盤とし、第四系柴倉火山噴出物、森吉火山噴出物が不整合に被覆する。また、北西—南東系の断層およびこれに斜交する北—南系あるいは北東—南西系の断層が発達している。これにより、遺跡周囲には断層に沿う粗粒玄武岩が比較的大きな岩脈あるいは岩床として、北部には流紋岩を主とした小規模な岩脈も分布している。

周囲の地質を見ると、森吉沢層に見られる玄武岩質凝灰岩（Mt）が小又川の山地を構成している。青緑色を示し玄武岩を本質礫とするほか、変質安山岩などの異質礫岩も含み、凝灰質砂岩およびレンズ状の砾岩を挟在する。また、数枚の黒色～暗緑色の自破構造あるいは柱状節理の発達する玄武岩からなり、同質の火碎岩を伴う層（Mb）が挟在する。南側は、緑色の安山岩質軽石凝灰岩を主とし、火山礫凝灰岩、凝灰角砾岩を伴う地層（Ot）となっている。

第2節 歴史的環境

『秋田県遺跡地図（県北版）』（平成3年発行）によると、旧森吉町には58か所の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が周知されており、これらのほとんどは阿仁川の河岸段丘上に立地する。その後、秋田県教育委員会による、平成4年～平成5年の2か年にかけて実施された森吉山ダム建設事業に係る分布調査と、平成6年からの同事業に係る遺跡範囲確認調査によって、合計60遺跡が小又川流域の根森田・森吉両地区で新しく発見され、旧森吉町の遺跡分布図は大幅に塗り替えられた。ここでは、これまでの発掘調査が行われた森吉山ダム建設地内の遺跡を中心とした歴史的環境を概観する。

旧石器時代の遺跡は、平成15年発掘調査が行われた二重鳥A遺跡（第2図44、以下第2図は省略）がある。後期旧石器時代のナイフ形石器、搔器、石刃、剥片など約330点が出土している。また、平成6年からの遺跡範囲確認調査により二重鳥B遺跡（45）よりナイフ形石器1点、ネネム沢A遺跡（63）より旧石器時代の遺物が報告されている。遺跡例が僅少であるため、当該期の遺跡分布等の詳細は判然としない。

縄文時代においては、草創期の遺跡は確認されていない。

早期の遺跡には、桐内A遺跡（23）、同C遺跡（25）、同D遺跡（26）、姫ヶ岱C遺跡（30）、同D遺跡（31）、向様田B遺跡（54）、地蔵岱遺跡（71）がある。早期後半に位置づけられる貝殻腹縁圧痕文・貝殻条痕文の土器片が姫ヶ岱C遺跡で、貝殻腹縁圧痕文の土器片が地蔵岱遺跡で出土している。姫ヶ岱D遺跡では、赤御堂式と考えられる縄文尖底系土器が、桐内D遺跡では胎土に織維混入の認められる平底の土器が出土している。また、早期後葉から前期初頭に位置づけられる縄文尖底系の土器

が桐内A遺跡・同C遺跡・姫ヶ岱C遺跡・同D遺跡・向様田B遺跡で出土している。なお、桐内C遺跡・姫ヶ岱C遺跡・地蔵岱遺跡では、この時期に特有のトランシェ様石器が伴出している。いずれの遺跡においても遺構は確認されておらず、遺物が断片的に出土しているのみである。よって、当該期における遺跡分布等の具体的な様相は不明である。

前期の堅穴住居跡が検出されるのは円筒下層a式期以降となり、桂の沢遺跡(17)1軒、日廻岱B遺跡(33)2軒、二重鳥C遺跡(46)3軒、森吉家ノ前A遺跡(66)1軒、深渡遺跡(76)7軒の5遺跡だけである。平面形は円形または梢円形を基調としており、住居内に地床炉をもつ。住居の規模は、遺跡間でやや相違があり、森吉家ノ前A遺跡では大型住居跡、二重鳥C遺跡では小型の住居跡が多いといった特徴が見られる。いずれも小規模な集落であり、この頃からこの地域において徐々に定住化が進み、各地に小集落が点在していたと考えられる。

中期になると、遺跡数が増加する。それに伴って堅穴住居跡の検出例も増加する。前葉では、桐内沢遺跡(27)で明瞭な貼り床や立石を有する1軒、また漆下遺跡(43)で1軒検出している。他に、二重鳥C遺跡(46)では、円筒上層b式期およびc式期にはそれぞれ1軒ずつが営まれていた可能性がある。中葉以降では、桐内A遺跡(23)で1軒、桐内C遺跡(25)で円筒上層e式・大木8b式期の住居跡1軒、二重鳥D遺跡(47)で1軒、水上ミ遺跡(52)で大木8b式期の1軒が検出され、二重鳥C遺跡ではダム工事区域内で、この時期最多の11軒が検出されている。二重鳥C遺跡検出住居の炉は、大半が地床炉であったが、石開土器埋設炉が1基検出された。同形態の炉は、旧阿仁町の上岱I遺跡(84)でも円筒上層b式期と大木10式期でそれぞれ1軒ずつ検出されている。後葉・末葉では、姫ヶ岱C遺跡(30)で3軒、二重鳥C遺跡(46)で大木8b式期の住居跡2軒、大木9式期の住居跡2軒、大木10式期の住居跡1軒が検出されている。大木9式期の1軒は、複式炉を持つ住居で炉埋設土器内に上器を塞ぐ様に角柱状の石1個が立て納められていた。住居廃棄に伴う行為(儀式)の痕跡と思われる。中期では、二重鳥C遺跡・桂の沢遺跡を除くと各遺跡とも検出された住居跡は1~数軒で、前期同様に小規模な集落を形成していたことが分かる。また、その数も後期に近づくにつれ増え、生活の場が広範囲に分散化している状況がうかがえる。住居の平面形は前期同様に円形または梢円形を基調としており、住居跡の規模も各遺跡ごとや各時期ごとに特徴的な差異は見られない。後葉になると、住居に伴う炉は複式炉が圧倒的に多くなり、その形態も様々なものが検出されている。姫ヶ岱D遺跡(31)ではプランが確認できなかったが、大木8b~10式期の複式炉3基が検出されている。この他、複式炉を有する堅穴住居跡が、桐内D遺跡(26)2軒、姫ヶ岱C遺跡1軒、二重鳥D遺跡2軒、同E遺跡(48)1軒、向様田A遺跡(53)1軒、同D遺跡(56)1軒、森吉家ノ前A遺跡(66)6軒、砂渕遺跡(75)1軒、深渡遺跡(76)2軒、深渡A遺跡(77)1軒検出されている。後葉には、中期の中でも最も堅穴住居跡の検出例が多くなり、当該期においては全般的に集落形成が頻繁に行われ、徐々に居住範囲が広まっていったことが、これまでの発掘調査で判明している。

また今回の調査により、本遺跡とともに隣接する深渡遺跡で注目すべき住居跡がそれぞれ1軒検出された。本遺跡の住居跡は径約3mの楕円形を、深渡遺跡は3.9×3.3mの梢円形を呈し、どちらも複式炉を伴っている。本遺跡の住居跡は、30~50cm程の大きい円礫を壁際に埋め込んだ状態で検出された。調査より、壁際に配された礫は住居構築時に伴うものではなく、住居廃絶時に壁際に礫を配し、意図的に火を放って埋め戻したと考えられる。深渡遺跡検出の住居跡にも、形態上の同質性は見

て取れる。このように礫を配する廃絶儀礼を行った住居跡は他の遺跡では検出されておらず、一般的な住居というより祭祀関連施設だったのかもしれない。この2軒の住居跡は共伴した土器から中期末大木10式の所産であり、漆下遺跡（43）で多数検出している後期前葉に構築される配石遺構の祖形と見ることができるかもしれない。

後期の堅穴住居跡は、姫ヶ岱C遺跡（30）で初頭の住居跡2軒、姫ヶ岱D遺跡（31）で初頭の住居跡1軒、二重鳥C遺跡（46）で十腰内I式期の住居跡1軒が検出されている。また、日廻岱B遺跡（33）でこれまで当該地域で検出例のなかった前葉前後の住居跡がまとまって検出され、これらの住居跡が環状集落を形成していることが判明した。ダム建設地内でこれほどの規模の集落跡が検出されたのは初例であり、拠点集落を形成していることが判明した。また、日廻岱B遺跡に近接した位置にはほぼ同時期の集落跡、祭祀跡である漆下遺跡があり、居住域、墓域、捨て場等が区別して形成されている。これにより、遅くとも当該時期には、当該地域において居住域、墓域、捨て場等が明確に区別されていたと推定できる。後葉では、姫ヶ岱D遺跡で1軒、十腰内IV・V式期では、二重鳥D遺跡（47）で7軒、ほぼ同時期とみられる住居跡5軒、二重鳥E遺跡（48）で6軒、桐内A遺跡（23）では十腰内V式期の住居跡5軒、この他、時期は詳細にできないが、桐内C遺跡（25）で4軒、深渡遺跡（76）で1軒検出されている。このように、後葉期にかけて小規模な集落が点在していたことが遺跡の分布状況から分かる。

晩期になると、堅穴住居跡の検出例は少なくなる。前葉では、姫ヶ岱D遺跡で2軒、二重鳥E遺跡で3軒、向様田F遺跡（58）では後期後葉～晩期初頭と考えられる住居跡2軒が検出されている。この調査結果から、小規模な集落が分散して存在した状況は分かること、晩期全体の遺跡立地については判然としない点が多い。しかし、向様田A遺跡（53）において、晩期前半期の環状配石遺構と土坑墓群を検出し、それとともに、隣接する向様田D遺跡（56）でも当該期の大量な遺物を伴う盛土が形成されていたことが報告されている。付近では大規模な集落跡が見つかっていないため、独立した祭祀域と考えられている。中葉では、深渡遺跡で住居跡1軒が検出されている。後葉では、水上ミ遺跡（52）において住居跡が検出され、多量の遺物が出土している。また、末葉の住居跡が二重鳥E遺跡で1軒検出されている。周辺地域において当該期の堅穴住居跡の検出例は乏しく、注目される。

弥生時代の遺跡では、桐内A遺跡（23）、二重鳥E遺跡・二重鳥F遺跡（49）、水上ミ遺跡などで遺物が出土している。水上ミ遺跡では、弥生時代初頭～前葉の土器、二重鳥F遺跡では、弥生時代前期と思われるフ拉斯コ状土坑4基、土坑1基などが確認されている。

古代の遺跡では、地蔵岱遺跡（71）で製鉄関連遺構が確認されており、向様田E遺跡（57）、惣瀬遺跡（59）、天津場A遺跡（60）、ネネム沢A遺跡（63）、森吉家ノ前A遺跡（66）でも古代の遺構・遺物が確認されている。向様田E遺跡では、標高156m程の丘陵地で古代の堅穴住居跡3軒が検出されており、小規模な防御性集落が形成されていた可能性が報告されている。

中世の遺跡では、いわゆる中世城館が町全域で10箇所確認されている。阿仁前田地区には、高館（2）、前田館（4）、花館（15）、天館（16）、伸ノ又館（18）があり、伸ノ又館には空堀や見張り台跡がある。森吉山ダム建設区域では、中世の城館跡は確認されていないが、森吉家ノ前A遺跡・同C遺跡（68）で中世の掘立柱建物跡を検出している。特に、森吉家ノ前A遺跡の検出数が多く、大規模な集落の存在が想定される。両遺跡に隣接する森吉家ノ前B遺跡（67）では、室町時代に属すると思

われる珠洲系陶器が出土している。また、漆下遺跡（43）では、掘立柱建物跡や堅穴状遺構の他に、造成したゆるやかな斜面に方形の石組炉を2基検出した。2基の石組炉は、形態的には向様田E遺跡（57）で検出した炉と類似し、生産関連の遺構と考えられ、周辺地域の中世の様相を示す数少ない資料となっている。

近世の遺跡では、日廻岱A遺跡（32）で掘立柱建物跡2棟、日廻岱B遺跡（33）で掘立柱建物跡7棟、森吉家ノ前C遺跡（68）で掘立柱建物跡4棟がそれぞれ検出されている。また、本遺跡においても上層クラス居住と思われる大規模な掘立柱建物跡1棟を検出した。小又川流域での掘立柱建物跡の報告は僅少であることから、建造物としての構造や、近世の集落の様相等を考察する数少ない資料となっている。

上述したように、本遺跡を含むこの地域一帯は、遙くとも縄文時代前期以降から小規模な集落が断続的に営まれて近代に至ったという経緯がうかがえる。本遺跡に限って言えば、縄文時代中期末葉には生活空間として機能していたことは確実であり、縄文時代晚期初頭・近世前期にも明らかな生活痕跡が確認できる。幾度かの断続と変容を経て、近代に至ったと言えよう。

《第2章 参考文献》

- 川村公一 「子孫に残す歴史の記録 森吉路 過去から未来へ」 モリトビア選書2
 建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所 1993(平成5)年
- 秋田県農政部農村振興課 「土地分類基本調査 大萬」 1995(平成7)年
- 第1・2表 (P 9・10) 文献 (表中の番号は文献番号に対応する。)
- 1 秋田県 「秋田県史考古編」 1960(昭和35)年
 - 2 沼館愛三 「出羽諸城の研究」 1980(昭和55)年
 - 3 秋田県教育委員会 「秋田県の中世城館」 秋田県文化財調査報告書第86集 1981(昭和56)年
 - 4 秋田県教育委員会 「上岱I遺跡発掘調査報告書 一国道105号改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査ー」 秋田県文化財調査報告書第184集 1989(平成元)年
 - 5 秋田県教育委員会 「秋田県遺跡地図(県北版)」 1991(平成3)年
 - 6 秋田県教育委員会 「遺跡詳細分布調査報告書」 秋田県文化財調査報告書第226集 1992(平成4)年
 - 7 秋田県教育委員会 「遺跡詳細分布調査報告書」 秋田県文化財調査報告書第251集 1994(平成6)年
 - 8 秋田県教育委員会 「桂の沢遺跡発掘調査報告書 一小浦阿仁前田停車場線地方道改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査ー」 秋田県文化財調査報告書第247集 1994(平成6)年
 - 9 秋田県教育委員会 「遺跡詳細分布調査報告書」 秋田県文化財調査報告書第259集 1995(平成7)年
 - 10 秋田県教育委員会 「遺跡詳細分布調査報告書」 秋田県文化財調査報告書第267集 1996(平成8)年
 - 11 森吉町教育委員会 「平成7年度 埋蔵文化財発掘調査報告書 ~森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査~」 1996(平成8)年
 - 12 秋田県教育委員会 「遺跡詳細分布調査報告書」 秋田県文化財調査報告書第270集 1997(平成9)年
 - 13 森吉町教育委員会 「平成8年度 埋蔵文化財発掘調査報告書 ~森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査~」 1997(平成9)年
 - 14 森吉町教育委員会 「上恩戸D遺跡発掘調査報告書 ~北内森吉線地方道改良工事に係る発掘調査~」 1997(平成9)年
 - 15 秋田県教育委員会 「遺跡詳細分布調査報告書」 秋田県文化財調査報告書第281集 1998(平成10)年

- 16 森吉町教育委員会 「平成9年度 理蔵文化財発掘調査報告書 上戸A遺跡
～森吉山ダム建設事業に係る理蔵文化財発掘調査～」 1998(平成10)年
- 17 秋田県教育委員会 「遺跡詳細分布調査報告書」 秋田県文化財調査報告書第291集 1999(平成11)年
- 18 森吉町教育委員会 「平成10年度 理蔵文化財発掘調査報告書 上戸B・C遺跡 姫ヶ岱A・B・C遺跡
～森吉山ダム建設事業に係る理蔵文化財発掘調査～」 1999(平成11)年
- 19 秋田県教育委員会 「深渡遺跡 一森吉山ダム建設事業に係る理蔵文化財発掘調査報告書I-」
秋田県文化財調査報告書第286集 1999(平成11)年
- 20 秋田県教育委員会 「姫ヶ岱C遺跡 一森吉山ダム建設事業に係る理蔵文化財発掘調査報告書II-」
秋田県文化財調査報告書第287集 1999(平成11)年
- 21 秋田県教育委員会 「桐内C遺跡 一森吉山ダム建設事業に係る理蔵文化財発掘調査報告書III-」
秋田県文化財調査報告書第299集 2000(平成12)年
- 22 秋田県教育委員会 「姫ヶ岱D遺跡 一森吉山ダム建設事業に係る理蔵文化財発掘調査報告書IV-」
秋田県文化財調査報告書第300集 2000(平成12)年
- 23 秋田県教育委員会 「桐内B遺跡・桐内D遺跡 一森吉山ダム建設事業に係る理蔵文化財発掘調査報告書V-」
秋田県文化財調査報告書第318集 2001(平成13)年
- 24 森吉町教育委員会 「平成12年度 理蔵文化財発掘調査報告書 二重鳥D・E・F遺跡
～森吉山ダム建設事業に係る理蔵文化財発掘調査～」 2002(平成14)年
- 25 秋田県教育委員会 「桐内A遺跡 一森吉山ダム建設事業に係る理蔵文化財発掘調査報告書VI-」
秋田県文化財調査報告書第334集 2002(平成14)年
- 26 秋田県教育委員会 「桐内浜遺跡・日越岱A遺跡 一森吉山ダム建設事業に係る理蔵文化財発掘調査報告書VII-」
秋田県文化財調査報告書第335集 2002(平成14)年
- 27 森吉町教育委員会 「平成13年度 理蔵文化財発掘調査報告書 二重鳥C・G遺跡
～森吉山ダム建設事業に係る理蔵文化財発掘調査～」 2003(平成15)年
- 28 秋田県教育委員会 「向様田A遺跡 遺構篇 一森吉山ダム建設事業に係る理蔵文化財発掘調査報告書VIII-」
秋田県文化財調査報告書第346集 2003(平成15)年
- 29 秋田県教育委員会 「向様田B遺跡・向様田C遺跡・向様田E遺跡 一森吉山ダム建設事業に係る理蔵文化財発掘調査報告書IX-」
秋田県文化財調査報告書第347集 2003(平成15)年
- 30 秋田県教育委員会 「向様田F遺跡 一森吉山ダム建設事業に係る理蔵文化財発掘調査報告書X-」
秋田県文化財調査報告書第348集 2003(平成15)年
- 31 秋田県教育委員会 「砂洞遺跡 一森吉山ダム建設事業に係る理蔵文化財発掘調査報告書XI-」
秋田県文化財調査報告書第349集 2003(平成15)年
- 32 秋田県教育委員会 「向様田A遺跡 遺物篇 一森吉山ダム建設事業に係る理蔵文化財発掘調査報告書XII-」
秋田県文化財調査報告書第370集 2004(平成16)年
- 33 秋田県教育委員会 「向様田D遺跡 一森吉山ダム建設事業に係る理蔵文化財発掘調査報告書XIII-」
秋田県文化財調査報告書第392集 2005(平成17)年
- 34 秋田県教育委員会 「森吉家ノ前C遺跡 一森吉山ダム建設事業に係る理蔵文化財発掘調査報告書XIV-」
秋田県文化財調査報告書第393集 2005(平成17)年
- 35 秋田県教育委員会 「日越岱B遺跡 一森吉山ダム建設事業に係る理蔵文化財発掘調査報告書XV-」
秋田県文化財調査報告書第394集 2005(平成17)年

第1表 周辺の遺跡一覧（1）

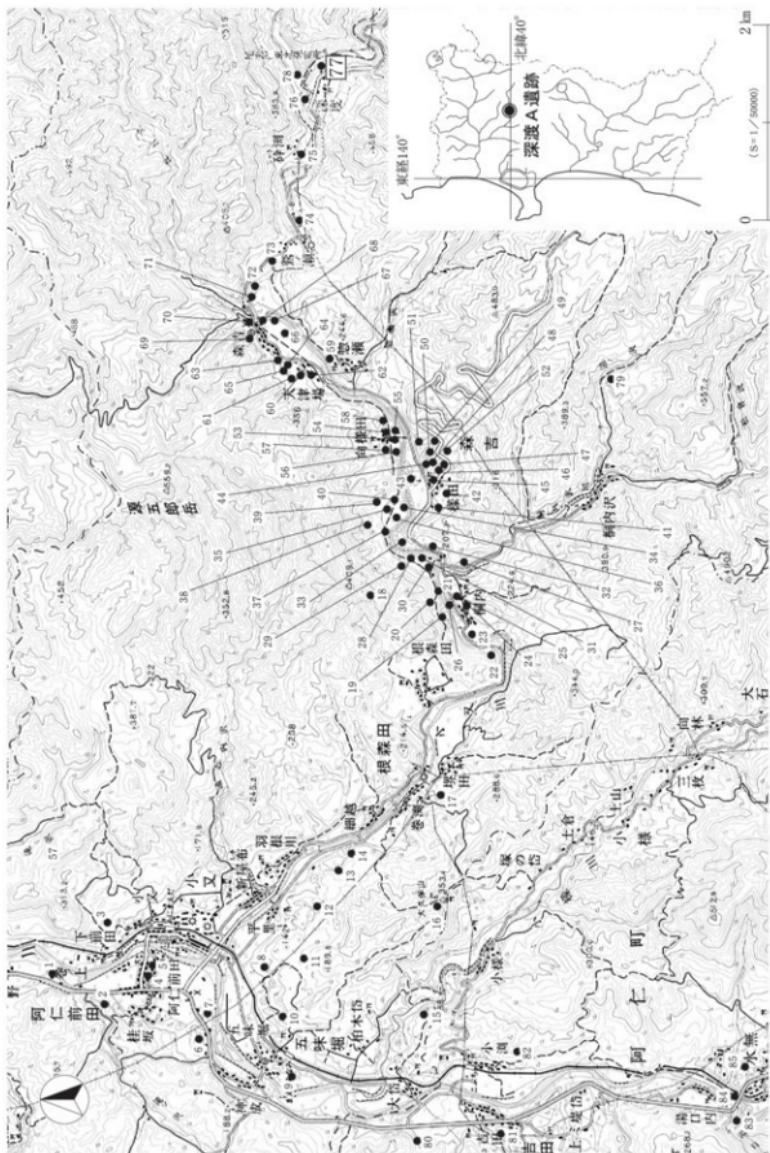
※便宜上、遺跡所在地は合併前の状態で記載した。

地図番号	遺跡名	遺跡所在地	主な時代	遺構・遺物	文獻
1	下野上野岱	森吉町阿仁前田字下野上野岱345	縄文	縄文土器片	5
2	高館	森吉町阿仁前田字下野118	中世	空瓶	3-5
3	下前田下山根	森吉町阿仁前田字下前田下山根36	縄文	縄文土器片,石器	5
4	前田断	森吉町阿仁前田字八幡森1-1	中世	削跡	2-3-5
5	八幡森	森吉町阿仁前田字八幡森1-1	縄文	縄文土器片(痕跡・中間),石器	5
6	陣場岱日	森吉町阿仁前田字陣場岱15,石岱/87	縄文	縄文土器片	5
7	陣場岱日	森吉町阿仁前田字陣場岱140-1	縄文	縄文土器片(痕跡・中間),石器,石路,石槽	5
8	五味湖高尾原	森吉町森吉字五味湖字下大久保174	縄文	縄文土器片	5
9	五味湖	森吉町森吉字五味湖字五味湖1	縄文	縄文土器片,石器	5
10	ボサツ堂	森吉町五味湖字堂宇/前45-46	縄文	縄文土器片(痕跡)	1-5
11	五味湖大久保岱	森吉町小文字字下大久保20	縄文	縄文土器片(痕跡),柱础石	5
12	小又小平型人	森吉町小文字字坪74	縄文	縄文土器片(石器),石器	5
13	小又小平型人	森吉町小文字字疊8	縄文	縄文土器片(痕跡),石器	5
14	平型人	森吉町森吉字平井平隣3	縄文	縄文土器片(痕跡),石器	5
15	花館	森吉町五味湖字野崎1-82	中世	空瓶	3-5
16	天館	森吉町五味湖字野崎101	中世	削跡	3-5
17	桂の沢	森吉町板森田字桂ノ沢19-28	縄文	縄文土器片(痕跡～地盤),堅穴住居跡,土坑,配石遺構,後土遺構,土器埋設遺構,埴状遺構,捨て塗土製品,石器	3-6-8
18	仲ノ又船	森吉町板森田字仲ノ又75	中世	空瓶	3-5
19	上恩戸A	森吉町板森田字上恩戸4-1	縄文	縄文土器片(痕跡),土坑,石器	12-16
20	上恩戸B	森吉町板森田字上恩戸8-12	弥生	弥生土器片,土坑,石器	12-18
21	上恩戸C	森吉町板森田字上恩戸7-7	縄文	縄文土器片(痕跡),土坑,溝跡,柱穴様ピット,石器	12-18
22	上恩戸D	森吉町板森田字上恩戸34-33	縄文	縄文土器片(痕跡～幾箇),堅穴住居跡,堅穴状遺構,土坑,石洞炉,柱穴様ピット,石器,土器製品	12-14
23	桶内A	森吉町森吉字桶内前5-1	縄文・弥生・近世	縄文土器片(早期～後期),堅穴住居跡,土坑,土器埋設遺構,後土遺構,柱穴様ピット,石器,土坑,溝跡,堅穴,柱穴様ピット,土製品,石製品,弥生土器,陶器器	12-25
24	桶内B	森吉町森吉字桶内A/下6	縄文	縄文土器片(痕跡～後期),土器埋設遺構,石器	12-23
25	桶内C	森吉町森吉字桶内家ノ上21号11号	縄文	縄文土器片(痕跡～地盤),堅穴住居跡,土坑,石洞炉,土器埋設遺構,後土遺構,柱穴様ピット,石器,土器製品,石製品,トランシュー様石器	9-21
26	桶内D	森吉町森吉字桶内A/上川反19号	縄文	縄文土器片(早期～後期),堅穴住居跡,土坑,土器埋設遺構,溝跡,柱穴様ピット,石器製品,石器	9-23
27	桶内沢	森吉町森吉字桶内沢下103	縄文	縄文土器片(痕跡～後期),堅穴住居跡,土器,土器埋設遺構,溝跡,柱穴様ピット,石器製品,石器	9-26
28	堀ヶ岱A	森吉町板森田字堀ヶ岱8号	縄文	縄文土器片(痕跡),土坑,柱穴様ピット,石器	12-18
29	堀ヶ岱B	森吉町板森田字堀ヶ岱14-10号	縄文	縄文土器片(痕跡),土坑,柱穴様ピット,石器	12-18
30	堀ヶ岱C	森吉町板森田字堀ヶ岱12-2号	縄文	縄文土器片(痕跡～地盤),堅穴住居跡,土坑,石洞炉,配石遺構,土器埋設遺構,後土遺構,柱穴様ピット,石器	12-18-20
31	堀ヶ岱D	森吉町板森田字堀ヶ岱12-31号	縄文	縄文土器片(中間～地盤),堅穴住居跡,土坑,配石遺構,土器埋設遺構,後土遺構,柱穴様ピット,石器	12-22
32	日堀岱A	森吉町森吉字日堀岱65号	縄文・近世	縄文土器片(痕跡～地盤),土坑,後土遺構,擬立柱建物跡(近世),溝跡,柱穴様ピット,石器,土器製品,陶器製品,灰瓦	10-11-26
33	日堀岱B	森吉町森吉字日堀岱86号	縄文・近世	縄文土器片(早期～後期),堅穴住居跡,堅穴状遺構,配石遺構,後土遺構,土器埋設遺構	10-35
34	機場岱A	森吉町森吉字機場岱48号	縄文	縄文土器片(中間～後期),堅穴住居跡,土坑,石器	12
35	機場岱B	森吉町森吉字機場岱69号	縄文	縄文土器片(痕跡～地盤),土坑,溝跡,石器	12
36	機場岱C	森吉町森吉字機場岱42号	縄文	縄文土器片(痕跡～地盤),配石遺構,土坑,石器	12
37	機場岱D	森吉町森吉字機場岱10-1	縄文	縄文土器片(痕跡),堅穴住居跡,配石遺構,土坑,溝跡,石器	12
38	機場岱E	森吉町森吉字機場岱109	縄文	縄文土器片,堅穴住居跡,堅穴状遺構,配石遺構,土坑,石器	12
39	機場岱F	森吉町森吉字機場岱101号	縄文	縄文土器片(痕跡),土坑,石器	12
40	機場岱G	森吉町森吉字機場岱1-2号	縄文	縄文土器片(痕跡),石器	12
41	上八岱A	森吉町森吉字上八岱102号	縄文	縄文土器片(中間～後期),堅穴住居跡,土坑,石器	10
42	上八岱B	森吉町森吉字上八岱70号	旧石器・縄文	縄文土器片(痕跡～後期),堅穴住居跡,土坑,捨て塙,石器帶	10
43	糠下	森吉町森吉字糠下2-1号	縄文・中世	縄文土器片(痕跡～後期),堅穴住居跡,土坑,柱穴様ピット,土坑,石組炉(中世),捨て塙,ラフスコ状土坑,土器埋設遺構,石器,土器製品,石器	10

第2表 周辺の遺跡一覧（2）

※便宜上、遺跡所在地は合併前の状態で記載した。

場所番号	遺跡名	遺跡所在場	主な時代	遺構・遺物	文献
44	二重島A	森吉町森吉字二重島31~1号	旧石器・縄文	旧石器、眞文土器片(前期~後期)、堅穴住居跡、ラフスコ状土坑、土坑、土器埋設跡 土器埋設跡、板立柱建物跡、窓跡、熊土遺構、柱穴柱ビット、石器、土製品、石製品	10
45	二重島B	森吉町森吉字二重島11号	旧石器・縄文	旧石器、眞文土器片(前期~後期)、堅穴住居跡、他土遺構、土坑、石器、石器	10
46	二重島C	森吉町森吉字二重島93号	縄文	眞文土器片(前期~後期)、堅穴住居跡、板立柱建物跡、ラフスコ状土坑、土坑、土器埋設跡 土器埋設跡、他土遺構、柱穴柱ビット、石器、土製品、石製品、土質	10-27
47	二重島D	森吉町森吉字二重島39	縄文	眞文土器片(後期)、堅穴住居跡、土坑、土器埋設遺構、他土遺構、石器、土製品、石製品	10-24
48	二重島E	森吉町森吉字二重島65号	縄文・弥生	眞文土器片(前期~後期)、堅穴住居跡、他土遺構、ラフスコ状土坑、土坑、土器埋設遺構、他土遺構 石器、土製品、石製品、弥生・土器	10-24
49	二重島F	森吉町森吉字二重島124~1号	縄文・弥生	眞文土器片、ラフスコ状土坑、土坑、柱穴柱ビット、石器、弥生・土器	10-24
50	二重島G	森吉町森吉字二重島80号	縄文・近世以降	眞文土器片(中期~中期・後期)、堅穴住居跡、板立柱建物跡(眞文~近世以降)、土坑 土器埋設跡、他土遺構、柱穴柱ビット、石器、石器、他遺物	10-27
51	二重島H	森吉町森吉字二重島6号	縄文	眞文土器片(後期)、堅穴住居跡、土坑、石器	10
52	水上3	森吉町森吉字水上3号~1号	縄文	眞文土器片(中期~後期)、堅穴住居跡、土坑、石器、石器、他土器	10
53	向様田A	森吉町森吉字向様家ノ下モ56号	縄文	眞文土器片(後期)、土坑、陶状配石遺構、土器埋設遺構、他土遺構、柱穴柱ビット、堅穴住居跡 石器、石器、土製品、石製品	12-28-32
54	向様田B	森吉町森吉字向様田67~1号	縄文	眞文土器片(前期~後期)、堅穴住居跡、他土遺構、石器、土製品	12-29
55	向様田C	森吉町森吉字向様田76号	縄文	眞文土器片(後期~後期)、堅穴住居跡、配石遺構、土坑、土製品、石製品	12-29
56	向様田D	森吉町森吉字向様家ノ下モ14~1号	縄文	眞文土器片(中期~後期)、堅穴住居跡、配石遺構、他土遺構、土器埋設跡、柱穴柱ビット、土坑 土坑、柱穴、石器、土製品、石製品	12-33
57	向様田E	森吉町森吉字向様家ノ下モ36号	縄文・古代・中世	眞文土器片(後期~後期)、堅穴住居跡(古代)、板立柱建物跡(中世)、土坑、土器埋設遺構 他土遺構、柱穴柱ビット、土器、土器(中世)、土製品、石器、土器、他器、他製品	12-29
58	向様田F	森吉町森吉字向様田57号	縄文	眞文土器片(後期~後期)、堅穴住居跡、土坑、柱穴柱ビット、土壤、石器	12-30
59	惣郷	森吉町森吉字惣郷66号	縄文・古代	眞文土器片(後期)、堅穴住居跡、土坑、石器、他器	15
60	天津塙A	森吉町森吉字天津塙15~3	縄文・古代	眞文土器片(後期)、堅穴住居跡、土坑、石器	10
61	天津塙B	森吉町森吉字天津塙16~1号	縄文	眞文土器片(後期)、堅穴住居跡、土坑、石器	10
62	天津塙C	森吉町森吉字天津塙87~1号	縄文	眞文土器片(中期~後期)、土坑、石器	10-13
63	木木木沢A	森吉町森吉字木木沢26号	昭和・眞文・古代	昭和、眞文土器片(後期)、土器(古代)、堅穴住居跡、他土遺構、土坑	10
64	木木木沢B	森吉町森吉字木木沢17号	縄文	眞文土器片(後期)、堅穴住居跡、石器	10
65	木木木沢C	森吉町森吉字木木沢3号~1号	縄文	眞文土器片(後期)、土坑、石器	10
66	森吉家/前A	森吉町森吉字森吉家/前50号	眞文・古代・中世	眞文土器片(前中期~後期)、堅穴住居跡、土器埋設遺構、他土遺構、柱穴柱ビット、石器、土解け、他器 板立柱建物跡(中世)、柱穴柱ビット、土器、土解け、他器	10
67	森吉家/前B	森吉町森吉字森吉家/前138号	縄文・中世	眞文土器片(後期)、堅穴住居跡(中世)、土坑、他土遺構、配石遺構、石器、石器、木器、中世陶器、器物	10-13
68	森吉家/前C	森吉町森吉字森吉家/前114号	中世・近世	眞文土器片(中期~後期)、堅穴住居跡(中世)、土坑、他土遺構、配石遺構、石器、石器、他器 板立柱建物跡(中世~近世)、堅穴柱柱跡、他土遺構、他器	10-34
69	森吉A	森吉町森吉字森吉95号	縄文	眞文土器片(後期)、土坑、石器、火葬墓、石器	10
70	森吉B	森吉町森吉字森吉69号	縄文	眞文土器片(後期)、石器	10
71	地藏岱	森吉町森吉字地藏岱74号	眞文・古代・中世	眞文土器片(前中期~後期)、堅穴住居跡、土器埋設遺構、他土遺構、柱穴柱柱跡、土坑、土壤 鐵冶跡、灰窯、灰坑、灰堆、甕下穴遺構、板立柱建物跡、瓮上遺構、灰坑、他土遺構、灰坑、灰堆、灰土 土解け、他器、灰坑、灰堆、甕下穴遺構、灰坑、他土遺構、灰坑、灰堆、灰土、土壤、石器、他器	13-15
72	地藏岱A	森吉町森吉字地藏岱124号	眞文・古代・中世	眞文土器片(前中期~後期)、堅穴住居跡、土坑、ラフスコ状土坑、板立柱建物跡、他土遺構、鐵冶跡、灰窯 灰窯、甕下穴遺構、土坑、ラフスコ状土坑、板立柱建物跡、他土遺構、鐵冶跡、灰窯	15
73	竪ノ原	森吉町森吉字竪ノ原80号	縄文	眞文土器片(後期)、堅穴住居跡、土器、土壤	5-15-17
74	棚原	森吉町森吉字棚原74号	縄文	眞文土器片(後期)、堅穴住居跡、土坑、土壤	7
75	砂洞	森吉町森吉字砂洞124号	縄文	眞文土器片(中期~後期)、堅穴住居跡、土器埋設遺構、他土遺構、配石遺構、灰坑遺跡、柱穴柱ビット、石器 ラフスコ状土坑、土製品(眞文・近世)、石器、土製品、陶器(近世)	7-11-31
76	深渡	森吉町森吉字深渡家/前104~1号	縄文	眞文土器片(前中期~後期)、堅穴住居跡、土坑、ラフスコ状土坑、他土遺構、灰坑、灰堆 土器埋設跡、板立柱建物跡(近世)、柱穴柱ビット、石器、トランジション石器、陶器(近世)	13-15-19
77	深渡A	森吉町森吉字深渡家/前45号	眞文・近世	眞文土器片(前中期~後期)、堅穴住居跡、土坑、ラフスコ状土坑、他土遺構、柱穴柱ビット、石器、土器 板立柱建物跡(近世)、柱穴柱ビット、石器、トランジション石器、陶器(近世)	15-本報告書
78	丹瀬口	森吉町森吉字丹瀬2~1号	縄文	眞文土器片(後期)	7
79	鶴内沢済良斎	森吉町森吉字鶴内沢済良斎4号	縄文	眞文土器片(後期~後期)	5
80	風城岱	阿仁町水野字田守屋1~7号	中世	空冢、井戸跡	5
81	家の上	阿仁町吉田字家の上	縄文	眞文土器片、石器	5
82	高岡城	阿仁町小鹿字山内65~32号	中世	空冢	5
83	鷹堂	阿仁町水無字山内451~1号	縄文	眞文土器片(中期)、石器	5
84	上島I	阿仁町水無字上島104~2号	縄文	眞文土器片(後期~後期)、堅穴住居跡、土坑、石器	4-5
85	上島II	阿仁町水無字上島35~2号	縄文	眞文土器片(中期)	5



第2図 周辺遺跡分布図

第3章 調査の概要

第1節 遺跡の概観

深渡A遺跡は、小又川左岸の段丘上に立地し、遺跡のある段丘は上下2段からなる。南東側の高位段丘面が標高約189～191mと高く、北西側の低位段丘面が標高約187mと低くなっている。また、各段丘面は南東から北西に向かって緩やかに傾斜しており、南北幅約180m、東西幅約160mの範囲である。かつて、水田として利用され、現状は雑草や柳の木が生い茂る荒蕪地となってしまっている。また、一部に旧畠地や旧宅地を含んでおり、コンクリートの土台が所々に認められる。

第2節 調査の方法

1 発掘調査

調査はグリッド法で行った。対象面積全域にグリッド打設するため、森吉山ダム建設事務所（現森吉山ダム工事事務所）が昭和62年に打設した3級基準点No. 31をグリッド原点（IA50）とした。このIA50（日本測地系X=5023.181 Y=-26670.965）を基準とし、日本測地系平面直角座標第X系の南北方向に南北基線、これに直交するラインを東西基線とし、両基線を延長して当該区内に4m×4mメッシュの方眼を設定した。方眼の原点を通る南北線をIA、同じく東西線を50とし、南北線はアルファベットの符号を西に向かって昇順となるよう、東西線は数字の符号を北に向かって昇順となるよう、それぞれ付した。なお、南北線に付した2文字のアルファベットはA～Tまでの20文字の繰り返しがなっている。この方眼によって画する4m四方の区画は、その南東隅を通る南北線の符号と東西線の符号とを組み合わせて、IA50区のように呼ぶこととした。

遺構は、01からの通し番号を付し、調査の結果、遺構でないと判断した場合は欠番とした。調査は、原則として半戻または十字に土層断面用のベルトを残して、2分割法または4分割法による精査を行った。

遺物は、グリッド単位に取り上げ、出土した層位、グリッド名または遺構名、年月日を記入した耐久性荷札を添付した。

平面図および断面図は、原則として1/20の縮尺で作成し、細部状況を表すために適宜1/10の拡大図も作成した。作図にあたってはグリッド杭を基準とする簡易造り方測量によつたが、調査範囲やセンター図はトータルステーションによる機械測量を行つた。発掘調査における写真撮影は、遺構・遺物を対象とする地上撮影を行い、規模の大きな遺構および遺跡の部分的な全景撮影の際にはローリングタワーを使用した。また、発掘終了の際には全景撮影のためにアドバルーン、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行つた。

写真は、35mmカメラにモノクロ、カラーリバーサル（スライド用）、カラーネガフィルムを装着して撮影を行つた。ただし、平成16年度の調査ではデジタルカメラをカラーリバーサルの代わりに使用した。

2 室内整理

各遺構は、現場で作成した図を第1原図とし、これを基に平面図と断面図の組み合わせた図を第2原図とした。第2原図をスキャニングし、Adobe社「Photoshop CS」・Adobe社「Illustrator CS」を使用し、トレイス・レイアウトまでの作業を行った。

遺物は、洗浄・注記後、報告書に記載する遺物の選別を行い、その後基本的に1／1で実測図を作成し、報告書に記載するにあたっては適宜縮尺を変えトレイスした。図にはスケールを入れて示している。また、土器片などは拓影図の作成を合わせて行い、これらの作業後、デジタル一眼レフカメラによる写真撮影を行った。

第3節 調査の経過

調査は平成15年9月16日から11月7日、および平成16年5月11日から7月9日まで実施した。以下、調査経過の概要は第3表、第4表に示す。

第3表 調査経過（第1次：平成15年度）

	作業状況	特記事項
9月	16) 調査開始 現場・事務所周辺の条件整備を行う ○調査区を北東側調査区・南側調査区・西側調査区の3区に分け、粗掘を開始 ○基本上層ベルトを設定し、写真撮影と土層断面の実測図を作成 ○南側調査区で時代不明の柱穴様ピット数基を確認 ○北東側調査区で検出した配石遺構S Q29は、北東側で円を描くように石組部が2重に配置されていることが判明	17) 河田学芸主事津下遺跡養生（作業員10名派遣） 22) 森吉家ノ前A道跡の調査が終了し、作業員38名合流 26) 杉沢北調査課長来跡 24～26・29～10, 3) 河田学芸主事地蔵岱遺跡確認調査トレンチ精査（作業員10名派遣）
10月	○10月2週で今年度調査区の粗掘を終了し、一部来年度調査区の粗掘を進める ○3調査区に獨立柱建物跡各1棟ずつ確認、精査を開始 ○独立柱建物跡はいずれも主軸が北西方向で同一、西側調査区のS B35が近世期所産と考えられ、他の2棟もほぼ同時期の所産と考えられる（西側調査区） ○土坑・焼土遺構・井戸跡・性格不明遺構等を精査 ○土坑S K23から繩文時代後期末～晚期初頭の所産と考えられる遺物が多数出土（北東側調査区） ○配石遺構S Q29は住居跡S I 29に変更し、土層観察用ベルトを残しながらサブトレンチを設定し、精査進行	1) 産業医による健康指導 6) 杉沢北調査課長来跡 7) 文化財保護室藤澤・磯村学芸主事来跡 8) 河田・石川学芸主事地蔵岱遺跡表土除去現地協議 9) 武田副所長来跡 10) 元秋田県立博物館富樫氏来跡 16～17) 石川学芸主事地蔵岱遺跡表土除去立ち会い 17) 杉沢北調査課長・石田・鍛田研修員来跡 23) 文化財保護室武藤学芸主事、杉沢北調査課長来跡 24) 青森市教育委員会児玉文化財主事来跡 30) 杉沢北調査課長来跡 31) 杉沢北調査課長来跡、空中写真撮影
11月	○堅穴住居跡S I 29で、灰を残した住居跡全体の完掘状況および別の写真撮影、実測図作成 ○井戸跡S E139で、底面を確認し碑の積み上げ状況の写真撮影および現状での断面の実測図作成 7) 発掘機材とリース機材を整理し、発掘調査を終了	4～6) 石川学芸主事地蔵岱遺跡表土除去立ち会い 6) 國學院大學小林達雄教授、元秋田県立博物館長富樫氏、歴史環境計画研究所秋山所長、文化財保護室武藤学芸主事、旧鷹巣町教委榎本主事、杉沢北調査課長来跡 7) 武田副所長・杉沢北調査課長来跡

第4表 調査経過（第2次：平成16年度）

	作業状況	特記事項
5月	11) 調査開始 NE区とSW区に分かれて調査 現場事務所周辺の条件整備を行う 13) ベルトコンベアー設置 ○昨年度調査区から続く高位段丘面で土坑數十基を検出 ○低位段丘面で炭窯を確認し、精査を開始 ○拡張範囲表土除去開始	11・14・18) 小林北調査課長米跡 19) 榎主任学芸主事来跡 21) 拡張範囲部分の表土除去打ち合わせ 森吉山ダム工事事務所工事課金沢氏・池田建設池田氏他1名来跡 25) 小林北調査課長米跡 26) 榎主任学芸主事来跡 27) 森吉山ダム工事事務所笠木専門職、小林北調査課長米跡
6月	○高位段丘面で検出した土坑群には、プラスコ状土坑があり、その中の1基から縄文時代後期中葉と思われる土器片出土・後期中葉～晚期前葉の貯蔵穴と推定 ○炭窯SW255・SW256に十字にトレーンを設定し、掘り下げる。精査により新旧関係ではなく、長軸約4.5m、短軸約2.5mの長楕円形、浅いすり鉢状1基と判明 ○炭窯の炭の下は数十個の礫が土とともに散がれていることを確認・底は炭窯内部に置かれた大きな礫がすっぽり入る大きさであり、掘り上げたものと推定 ○拡張範囲で1間×1間、1間×2間の掘立柱建物跡2棟を確認し、精査を進める ○ローリングタワーから高位段丘面のプラスコ状土坑群完掘状況を写真撮影し、精査を終了	1) 小林北調査課長、シン技術コンサル中西氏来跡（トータルステーション指導）・作業員8名増員 2～4) グリッド杭打設 8) 小林北調査課長米跡 9) 大野所長、渡辺總務課長、小林北調査課長来跡 10) ダイワ技術来跡（水準成果品納入） 11) 小林北調査課長米跡 14) 作業員健康診断 15) 小林北調査課長米跡 22) 台風6号接近により現場作業休止 24) 比内養護学校たかのす分校生徒1名一日発掘実習（引率教師1名）、小林北調査課長米跡 29) 小林北調査課長米跡
7月	○高位段丘面～低位段丘面を縱断するトレンチ掘削（段丘礫層の確認） 9) 発掘機材とリース機材を整理し、発掘調査を終了	1) コンテナハウス等の撤収および地蔵岱の追加設置打ち合わせ・幸和リース佐藤課長、明和ハウス黒沢部長米跡 5) 空中写真撮影 7) 道跡引き渡しのため、森吉山ダム工事事務所笠木専門職、文化財保護室磯村学芸主事来跡、首原学芸主事鷺ノ瀬遺跡表土除去のための現地協議 9) 小林北調査課長米跡

第4章 調査の記録

第1節 基本層序 (P17・18／第3・4図)

遺跡内は南北2段の段丘面に大きく分かれる。遺跡の南側が標高191m前後の高位段丘面で、小又川に沿った北側が標高187m前後の低位段丘面となり、比高は約4mである。本遺跡一帯は、かつて水田として利用されており、昭和50年前後のは場整備の際にほぼ全域において削平されている。

調査区北西側（第4図基本土層①）と南東南西側（第4図基本土層②）に設定した基本土層の層序は以下のとおりである。I層は旧水田耕作後の造成による盛土であり、最大層厚は1.2mである。IIa層は昭和50年前後のは場整備後の旧水田耕作土であり、層厚は40～60cm前後である。IIb層は、昭和50年前後のは場整備以前の旧水田耕作土であり、層厚は10～20cmである。III層は、地山漸移層上に堆積する黒褐色土であり、層厚は10～30cmである。この層からは、調査区南東部（第3図G地点）において繩文時代後期末～晩期初頭の土器小破片を少量含んだSK28土坑を検出していることから、当該期の表土層と考えられる。しかし、調査区南西部（第3図B地点）・南東部（第3図G地点）および調査区東部の高位段丘面から低位段丘面への斜面（第3図K地点）において、層厚が10～20cm程度を確認できるだけで、ほとんどがは場整備の際に削平されたものと判断できる。IV層が地山漸移層、V層が地山である。なお、調査区北西部（第3図C・D地点）では段丘礫層まで削平されている。よって、遺跡内のほぼ全域が地山あるいは段丘礫層まで削平されている。

今回の発掘調査では、大半の遺構が地山上面での確認となった。

第2節 検出遺構と出土遺物

1 概要

【検出遺構】

堅穴住居跡	1軒	S I 29
フ拉斯コ状土坑	16基	SKF22 SKF23 SKF80 SKF149 SKF154 SKF205 SKF206 SKF207 SKF208 SKF211 SKF215 SKF219 SKF231 SKF233 SKF261 SKF274
土坑	19基	SK20 SK24 SK25 SK28 SK87 SK106 SK111 SK112 SK136 SK151 SK152 SK204 SK209 SK210 SK218 SK220 SK221 SK222 SK232
掘立柱建物跡	5棟	SB30 SB32 SB35 SB275 SB276
柱穴列	3列	SA156 SA291 SA292

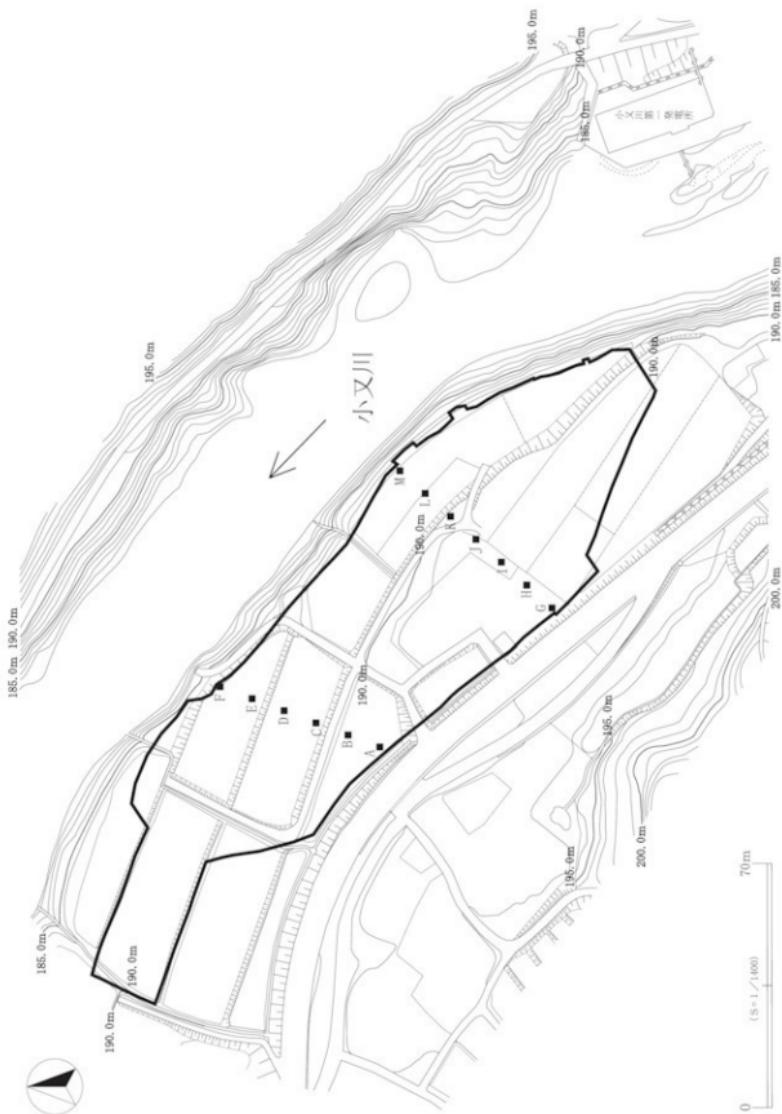
焼土遺構	3基	SN18	SN19	SN230
井戸跡	1基	SE139		
炭窯	1基	SW255		
溝跡	1条	SD153		
性格不明遺構	3基	SX126	SX134	SX150

今回の調査で検出した遺構は上記のとおりである（位置はP19／第5回参照）。また、昭和50年前後の場整備による遺跡全体の削平の影響で、出土遺物は極少数である。時代的に最も古いものでは、縄文時代前期前葉と思われる土器片が出土している。縄文時代前期の円筒下層式土器片や中期～晚期の土器片も出土しているが、いずれも断片的なものにとどまる。同じく縄文時代所産の石器も極少数の出土量である。また、近世銭貨（寛永通宝）や陶磁器が出土している。出土遺物から主要性格も含んだ本遺跡の概要を推定することは困難であり、ここでは検出遺構の形態等から抽出できる本遺跡の主な概要を記述する。

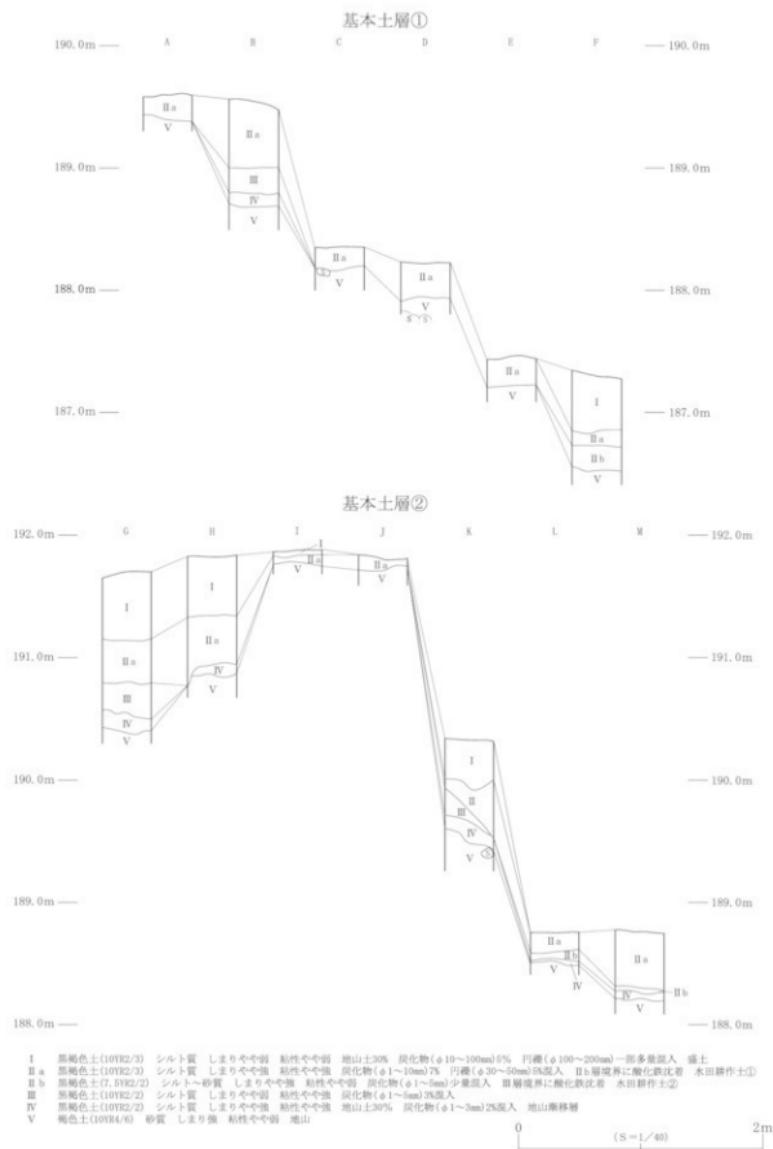
堅穴住居跡1軒（S129）は、調査区東側の低位段丘面で小又川への段丘崖際に隣接して立地する。出土土器から、縄文時代中期末葉前後の所産と考えられる。他に堅穴住居跡は確認していない。また、南東側から北西側に緩やかに傾斜する高位段丘面縁辺部でフ拉斯コ状土坑16基を検出した。出土遺物が僅少で、明確な時期は断定できないものの、周辺遺構の検出状況から縄文時代晚期前葉前後の所産と考えられる。これらは短期間に食糧貯蔵穴として利用された貯蔵穴群と想定される。高位段丘面の平坦なほぼ中央部では、近世前期所産と思われる掘立柱建物跡1棟（SB35）とそれに付随する柱穴列1列（SA156）を検出した。掘立柱建物跡は梁行3間×桁行9間であり、当時としては比較的規模の大きな建物である。石組円筒形を呈する井戸跡（SE139）は当該建物跡に関連する可能性が高い。また、SN18・19は、当該建物跡内の炉としての使用が考えられる。さらに、掘立柱建物跡2棟（SB30・32）も、当該期付近所産と思われる。上記以外の遺構に関しては、立地状況の共通性や時期を決定づけるような出土遺物がなく、詳細な性格や時期は不明である。

上述から、本遺跡は縄文時代中期末葉頃から生活空間として使用された痕跡が認められる。当該期所産と思われる堅穴住居跡1軒（S129）は、複数回の住居としての利用を経て、その廃絶時に礫を縁辺部に運らせた特殊な形態を呈する住居跡である。住居跡は1軒のみの検出であり、当該期の本遺跡周辺は小規模の集落であったと推測される。この後、縄文時代晚期前葉頃には高位段丘面北側縁辺部に土坑を構築し、食糧貯蔵穴群として利用したことが明瞭であり、一部の土坑は墓坑に転用されたことが確認できる。そして、縄文時代晚期前葉以降の明瞭な生活痕跡は、時期的に大きく離れた近世前期まで下る。当該期所産と思われる掘立柱建物跡（SB35）は、本遺跡周辺地域を統括する上層～特權層クラスの人が居住した建物跡と考えられる。柱穴列（SA156）は当該建物跡に付随すると判断する。また、井戸跡（SE139）も関連するものである可能性が高い。

以上より、本遺跡の明らかな生活痕跡は、主として縄文時代中期末葉頃（小規模の集落跡）・縄文時代晚期前葉頃（食料貯蔵域および墓域）・近世前期頃（上層～特權層クラスの建物跡を中心とする集落跡）の3期に認められる。各期の間には長期に及ぶ断続期間があることが明白であり、本遺跡周辺の生活空間としての使用頻度は、近代に至るまで低いままであったと推測されよう。



第3図 遺跡周辺地形図・基本土層断面位置図



第4図 基本土層柱状図

2 縄文時代

(1) 壊穴住居跡

S 129 壊穴住居跡【第7~10図 (P49~52) / 卷頭図版2 / 図版2・3・9・12】

《位置・確認》 調査区東側の低位段丘面で、小又川への段丘崖際に隣接して立地し、HF42、HG41・42区に位置する。地山上面で地山土を多く含んだ黒褐色の隅丸方形プランの北東側に、径20~50cm前後の円礫を中心に弧状に立て並べられた遺構を確認した。さらにこの北東側にも二重に弧状になるように同様の円礫が立て並べられていた。確認段階から掘り込みの存在は予測していたが、当初は配石遺構とした。精査の途中で、壊穴掘り込みと複式炉を確認し、壊穴住居跡であることを認めた。

《重複》 なし。

《規模と平面形》 壊穴掘り込みの平面形は、径3m前後のやや不整な隅丸方形である。北東側の壁際には、円を描くように扁平な礫を立て並べた配石が巡る。南西側の壁際にも、北東側の配石に続くように礫が抜けた跡を確認し、それらには旧耕作土が入り込んでいる。また、本住居跡の北東側にも、弧状に扁平な礫を立て並べた配石が巡る。北東側は小又川との段丘崖であり、比高は約7mである。

《壁》 遺存部分は30cm前後で、やや急傾斜に立ち上がる。

《床面》 不整な床面で、かなり凹凸がある。貼り床は確認しなかった。

《炉》 北東側に方形に礫を組んだ石組複式炉（石組部+前庭部）を検出した。この炉を構成する礫には被熱痕が認められるが、炉内で確認した焼土は極少量であった。この炉の南西側で、住居跡中央部にわずかに被熱による地山硬化面を確認した。これは、複式炉を構築する以前に、壊穴住居跡の地床炉として使用した痕跡と考えられる。

《柱穴》 検出しなかった。

《覆土》 壁際に堆積する5層土は地山土由来の褐色土で、住居廃絶時に壁際を埋め戻して河原石を立て並べた時点での人為堆積と判断できる。周堤とした土を埋め戻したことも想定できよう。3・4層土は炭化材と炭化物をやや多く含み、そのほとんどが覆土の上位に堆積し、住居を廃絶する際に意図的に火を放った痕跡と思われる。また、地山土塊や暗褐色土を含むことから、壁際に礫を配したのちに上屋に火をかけ、その後に埋め戻された人為堆積の可能性が考えられる。2層土は、3・4層土埋め戻し後に一定期間経過した後のくぼみに堆積した表土の流入土と考えられる。1層土には一部耕作土が混入し、現代の水田整備時に、礫が抜き取られた後に攪乱により流入したものと考えられる。

《出土遺物》 縄文土器片26点、剥片7点が出土した。覆土上位からは縄文時代前期土器破片【第36図4・5 (P79)】が出土しているが、これらは住居廃絶後に流れ込んだものと考えられる。出土土器の主体をなすのは、縄文時代中期末葉の大木10式のもの【第36図1~3 (P79)】である。

- 《時 期》 出土土器から、本住居跡は縄文時代中期末葉前後に営まれたものと考えられる。また、放射性炭素年代測定では、時期的には整合性の取れる測定結果が出ている（第5章参照）。
- 《所 見》 本住居跡は、大きく住居として機能した段階と住居廃絶後に配石を巡らした段階の二段階に分けられ、前段の住居としての段階は、炉の変遷によってさらに二段階に分けられる。I a段階は、地床炉を伴う竪穴住居跡の段階である。住居中央部にわずかに被熱による地山硬化面が認められる。I b段階は、炉を石組複式炉（石組部+前庭部）に作り替えた段階である。この炉内からは、焼土がほとんど確認されなかった。何らかの理由で、焼土が残されたものと思われる。また、複式炉のすぐ北側には、扁平な碟を左右両脇につき立てる並列させ、その中央に扁平な碟を一つ横に置いている石組を検出した。東北地方北部で類例がある碟を用いた入口部施設、もしくは碟を組み合わせた石壇（祭壇）のような住居内特殊施設の可能性も考えられるが、その詳細は判然としない。II段階は、住居を廃棄する時点で、壁際を埋め戻して碟を巡らせ、さらに北東側外側にも碟を弧状に巡らせた段階である。この段階において上屋に火を放っており、明瞭な廃絶儀礼の痕跡を見なせよう。なお、本住居跡と同様に複式炉を持つ住居から碟を巡らした配石遺構へと変化した類例に、近接する深渡遺跡S12001竪穴住居跡がある。

（2） フラスコ状土坑

S K F22フラスコ状土坑【第12図（P54）／図版4】

- 《位置・確認》 HS42区に位置する。地山面上を精査中、明瞭なプランを確認した。
- 《重 複》 なし。
- 《規模と平面形》 開口部は長軸1.5m、短軸1.4mの略円形で、確認面からの深さは60cmである。底面はほぼ平坦で、長軸約1.6m、短軸約1.45mの不整な円形平面をなす。開口部の主軸方向はN-6°-Wである。
- 《 壁 》 北側は垂直に近く立ち上がり、南側は内側に入り込む。
- 《覆 土》 4層に分けられ、随所に地山土の混入が見られることから、埋め戻しによる人為堆積と思われる。2層土は壁の崩壊土かもしれない。
- 《出 土 遺 物》 縄文時代晚期前葉頃と思われる深鉢形土器小破片3点、また剥片石器4点が出土した。
- 《時 期》 出土土器から、縄文時代晚期前葉の所産と思われる。
- 《所 見》 短期間に使用された食料貯蔵穴と考えられる。

S K F 23 フラスコ状土坑【第11図（P53）／図版4・5・12・13・14】

《位置・確認》 H S 42区に位置する。地山面直上を精査中、明瞭なプランを確認した。

《重複》 なし。

《規模と平面形》 開口部は長軸1.55m、短軸1.41mの不整な略円形で、確認面からの深さは62cmである。底面はほぼ平坦で、長軸約1.55m、短軸約1.45mの円形平面をなす。開口部の主軸方向はN-50°-Eである。

《壁》 北東側はやや内側に入り込み、南西側はやや外に開きながら立ち上がる。

《覆土》 6層に分けられ、随所に地山土の混入が見られることから、埋め戻しによる人為堆積と思われる。2・4層土は壁の崩壊土であろう。

《出土遺物》 繩文土器片102点、石器9点【第38図3・4（P81）】が出土し、その多くが1層に集中する。出土土器の主体をなすのは、繩文時代晩期初頭～前葉期のもの【第36図6（P79）、第37図1（P80）】である。

《時期》 出土土器から、繩文時代晩期初頭の所産と思われる。

《所見》 繩文時代晩期初頭の土坑墓の可能性が高い。フラスコ状を呈する形態と、近辺に貯蔵穴群があることを考慮すれば、その役割は貯蔵穴から墓坑へ転用されたものとも考えられる。そうであるとすれば、貯蔵穴として利用された時期は、土坑墓構築時直前と考えられる。朱漆塗りの土器片は同一個体であり、埋め戻す際に副葬品として供えられたものと見なせる。

S K F 80 フラスコ状土坑【第12図（P54）／図版5・14】

《位置・確認》 H T 42区に位置する。地山面直上を精査中、明瞭なプランを確認した。

《重複》 なし。

《規模と平面形》 開口部は長軸1.3m、短軸1.16mの梢円形で、確認面からの深さは58cmである。底面は中央付近がややくぼみ、長軸約1.35m、短軸約1.25mの不整形平面をなす。開口部の主軸方向はN-77°-Wである。

《壁》 南西側は内側に入り込み、北東側は垂直に近く立ち上がる。

《覆土》 5層に分けられ、随所に地山土の混入が見られることから、埋め戻しによる人為堆積と思われる。

《出土遺物》 石核1点【第38図6（P81）】が出土した。

《時期》 規模・形態および周辺遺構・遺物の検出状況より、繩文時代晩期前葉頃の所産と思われる。

《所見》 短期間に使用された食料貯蔵穴と考えられる。

SKF149 フラスコ状土坑【第12図 (P54) / 図版5】

- 《位置・確認》 HR40区に位置する。地山上面で地山土(塊)を含む黒褐色の楕円形プランを確認した。
- 《重複》 なし。
- 《規模と平面形》 開口部は長軸1.05m、短軸0.85mの不整な楕円形で、確認面からの深さは82cmである。底面はほぼ平坦で、長軸約1.1m、短軸約0.9mの不整な円形平面をなす。開口部の主軸方向はN-41°-Eである。
- 《壁》 全体的にオーバーハングし、底面と壁面は丸みを持ってつながる。底面から中位まではほぼ垂直に立ち上がり、さらに確認面までは途中で内傾してくびれてから外傾する。
- 《覆土》 9・10層土は開口状態での堆積土と考えられる。7・8層土は壁の崩落土と考えられる。1~6層土は地山土の混入が見られ、一連の埋め戻しによる人為堆積と考えられる。
- 《出土遺物》 なし。
- 《時期》 本遺構からの出土遺物はないが、近接するフラスコ状土坑群から僅少量ではあるが縄文時代晚期前葉頃の土器小破片が出土している。そのため、本遺構も同時期の所産と考えられる。
- 《所見》 短期間に使用された食料貯蔵穴と考えられる。

SKF154 フラスコ状土坑【第13図 (P55) / 図版5】

- 《位置・確認》 HT41・42区に位置する。地山上面で地山土(塊)を含む黒褐色の楕円形プランを確認した。
- 《重複》 北東側でSX150性格不明遺構、南西側でSKP146柱穴様ピットと重複する。SX150性格不明遺構とSKP146柱穴様ピットがともに本遺構を掘り込んでおり、本遺構が古い。
- 《規模と平面形》 開口部は長軸0.97m(推定)、短軸0.86mの略円形と思われ、確認面からの深さは44cmである。底面はほぼ平坦で、径0.9m前後の円形平面をなす。開口部の主軸方向はN-44°-Eである。
- 《壁》 残存する壁は中位でオーバーハングし、底面と壁面は丸みを持ってつながる。底面から中位まではわずかに外傾しながら急傾斜に立ち上がり、確認面まではやや内傾する。
- 《覆土》 各層とともに地山土の混入が見られるため、一連の埋め戻しによる人為堆積と考えられる。
- 《出土遺物》 なし。
- 《時期》 本遺構からの出土遺物はないが、近接するフラスコ状土坑群から僅少量ではあるが縄文時代晚期前葉頃の土器小破片が出土している。そのため、本遺構も同時期

の所産と考えられる。

《所見》 短期間に使用された食料貯蔵穴と考えられる。

S K F 205 フラスコ状土坑【第13図 (P 55) / 図版5・6】

《位置・確認》 I A42、I B42区に位置する。地山上面で地山土(塊)を含む黒褐色の梢円形プランを確認した。

《重複》 なし。

《規模と平面形》 開口部は長軸1.05m、短軸0.93mの不整な梢円形で、確認面からの深さは61cmである。底面はほぼ平坦で、径1.2m前後の不整な円形平面をなす。開口部の主軸方向はN-52°-Wである。

《壁》 全体的にオーバーハングし、底面と壁面は丸みを持ってつながる。底面から確認面まで内傾して立ち上がる。

《覆土》 底面付近に堆積する6~9層土は地山土や地山土塊を多く含む覆土であり、堆積状況から壁の崩落土と考えられる。それより上位の1~5層土は黒褐色土を主体とするが、いずれも地山土や地山土塊を多く含んでおり、一連の埋め戻しによる人為堆積と考えられる。

《出土遺物》 なし。

《時期》 本遺構からの出土遺物はないが、近接するフラスコ状土坑群から僅少量ではあるが縄文時代晚期前葉頃の土器小破片が出土している。そのため、本遺構も同時期の所産と考えられる。また、放射性炭素年代測定では、時期的に整合性の取れる測定結果が出ている(第5章参照)。

《所見》 短期間に使用された食料貯蔵穴と考えられる。

S K F 206 フラスコ状土坑【第14図 (P 56) / 図版6・13】

《位置・確認》 I B42区に位置する。地山上面で地山土(塊)を含む黒褐色の梢円形プランを確認した。

《重複》 なし。

《規模と平面形》 開口部は長軸1.01m、短軸0.8mの不整な梢円形で、確認面からの深さは66cmである。底面はほぼ平坦で、径1.25m前後の円形平面をなす。開口部の主軸方向はN-79°-Eである。

《壁》 全体的にオーバーハングし、南東側は底面と壁面は丸みを持ってつながる。西側は急傾斜で立ち上がり、それ以外は中位まで外傾した後に内傾する。

《覆土》 底面直上に堆積する8層土は地山土由来の褐色土であり、壁の崩落土と考えられる。その上位の5~7層土は地山土由来の褐色土であり、別のフラスコ状土坑掘削土を埋め戻した人為堆積の可能性が考えられる。上面の1~4層土はレンズ状

堆積をなし、その上層断面形態から土坑の過半を埋め戻した後のくぼみに流入した自然堆積土と考えられる。

- 《出 土 遺 物》 繩文土器片28点が出土した。出土土器の大半が縄文時代晚期前葉頃と思われ、【第37図2・5・6 (P80)】は晚期前葉の鉢形土器頭～胴部破片である。
- 《時 期》 出土土器から、縄文時代晚期前葉の所産と考えられる。
- 《所 見》 短期間に使用された食料貯蔵穴と考えられる。

S K F 207 フラスコ状土坑 【第14図 (P56) / 図版6・13】

- 《位置・確認》 I A42区に位置する。地山上面で地山土(塊)を含む黒褐色の楕円形プランを確認した。
- 《重 複》 なし。
- 《規格と平面形》 開口部は長軸1.04m、短軸1.0mの不整な楕円形で、確認面からの深さは76cmである。底面はほぼ平坦で、径1.1m前後の円形平面をなす。開口部の主軸方向はN-58°-Eである。
- 《 壁 》 中位でわずかにオーバーハングする。底面から中位まではほぼ垂直に近く立ち上がり、その後確認面まで内傾する。
- 《底 面》 ほぼ平坦で、地山砂質土層を掘り込んでいる。
- 《覆 土》 底面直上に堆積する7～9層土は地山土由来の褐色土を多く含むため、壁の崩落土と考えられる。その上位1～6層土はいずれの層も地山土塊を含んだほぼ同一の色調であることから、一連の埋め戻しによる人為堆積と考えられる。
- 《出 土 遺 物》 繩文土器片2点が出土した。いずれも縄文時代晚期前葉の鉢形土器頭～胴部破片【第37図7 (P80)】である。
- 《時 期》 出土遺物が僅少であるため、時代時期は断定できないが、周辺の遺構検出状況から縄文時代晚期前葉の所産と考えられる。
- 《所 見》 短期間に使用された食料貯蔵穴と考えられる。

S K F 208 フラスコ状土坑 【第13図 (P55) / 図版6】

- 《位置・確認》 I C43区に位置する。地山上面で地山土(塊)を含む黒褐色の楕円形プランを確認した。
- 《重 複》 なし。
- 《規格と平面形》 開口部は長軸1.3m、短軸1.15mの不整な略円形で、確認面からの深さは58cmである。底面は東側から西側に向かって緩やかに傾斜し、径1.3m前後の不整な円形平面をなす。開口部の主軸方向はN-59°-Eである。
- 《 壁 》 壁は全体的にオーバーハングし、底面と壁面は丸みを持ってつながる。底面から中位まではほぼ垂直に立ち上がり、さらに確認面までは途中で内傾してくびれて

から外傾する。

- 《覆 土》 底面直上で壁際に堆積する6・7層土は土層断面形態から壁の崩落土と考えられる。1~4層土はレンズ状堆積をなし、埋没段階で周辺からの表土が流入した自然堆積と考えられる。
- 《出 土 遺 物》 なし。
- 《時 期》 本遺構からの出土遺物はないが、近接するフラスコ状土坑群から僅少量ではあるが縄文時代晚期前葉頃の土器小破片が出土している。そのため、本遺構も同時期の所産と考えられる。
- 《所 見》 短期間に使用された食料貯蔵穴と考えられる。

SKF211フラスコ状土坑【第15図（P57）／図版7】

- 《位置・確認》 I B41・42区に位置する。地山上面で地山土（塊）を含む黒褐色の楕円形プランを確認した。
- 《重 複》 なし。
- 《規模と平面形》 開口部は長軸1.3m、短軸1.08mの不整な楕円形で、確認面からの深さは72cmである。底面はほぼ平坦で、径1.3m前後の不整な円形平面をなす。開口部の主軸方向はN-57°-Eである。
- 《 壁 》 中位でわずかにオーバーハングする。底面と壁面はわずかに丸みを持ってつながる。
- 《覆 土》 底面付近に堆積する7・9層土は壁の崩落土と考えられる。その上位の覆土は地山土あるいは地山土塊を多く含むため、人為堆積と考えられる。
- 《出 土 遺 物》 剥片1点が出土した。
- 《時 期》 本遺構からは時代時期を断定できるような出土遺物はないが、近接するフラスコ状土坑群から僅少量ではあるが、縄文時代晚期前葉頃の土器小破片が出土している。そのため、本遺構も同時期の所産と考えられる。
- 《所 見》 短期間に使用された食料貯蔵穴と考えられる。

SKF215フラスコ状土坑【第15図（P57）／図版7・13・14】

- 《位置・確認》 I B43区に位置する。地山上面で地山土（塊）を含む黒褐色の楕円形プランを確認した。
- 《重 複》 他の遺構との重複はないが、南東側が現代の擾乱により切り取られている。
- 《規模と平面形》 開口部は長軸1.35m、短軸1.05mの不整な楕円形で、確認面からの深さは68cmである。底面はほぼ平坦で、径1.6m前後のほぼ円形平面をなす。開口部の主軸方向はN-42°-Eである。
- 《 壁 》 全体にオーバーハングする。底面と壁面は丸みを持ってつながる。

- 《覆土》 底面直上に堆積する8層土は壁の崩落土と考えられる。その上位の覆土は黒褐色土主体の堆積土であり、土層断面形態から当時の表土由来の流入による自然堆積と考えられる。
- 《出土遺物》 繩文土器片5点【第37図4（P80）】、礫石器2点【第39図2（P82）／第40図1（P83）】が出土した。
- 《時期》 出土土器が少量で断定はできないが、近接するフラスコ状土坑群から僅少量ではあるが、繩文時代晚期前葉頃の土器小破片が出土している。そのため、本遺構も同時期の所産と考えられる。また、放射性炭素年代測定では、時期的に整合性の取れる測定結果が出ている（第5章参照）。
- 《所見》 短期間に使用された食料貯蔵穴と考えられる。

SKF219フラスコ状土坑【第16図（P58）／図版7】

- 《位置・確認》 IC42区に位置する。地山上面で地山土（塊）を含む黒褐色の梢円形プランを確認した。
- 《重複》 なし。
- 《規模と平面形》 開口部は長軸1.2m、短軸1.16mの不整形で、確認面からの深さは1.1mである。底面は段丘礫層を掘り込んでいるため、所々凹凸があり、径1.5m前後の不整形をなす。開口部の主軸方向はN-9°-Eである。
- 《壁》 東側はオーバーハングし、西側はほぼ垂直に近い急傾斜で立ち上がる。
- 《覆土》 底面直上に堆積する9層土は壁の崩落土と考えられる。その上位は黒褐色土主体の地山土あるいは地山土塊を含む覆土であり、不整な断面形態から一連の埋め戻しによる人為堆積と考えられる。
- 《出土遺物》 なし。
- 《時期》 本遺構からの出土遺物はないが、近接するフラスコ状土坑群から僅少量ではあるが繩文時代晚期前葉頃の土器小破片が出土している。そのため、本遺構も同時期の所産と考えられる。また、放射性炭素年代測定では、時期的に整合性の取れない測定結果が出ている（第5章参照）。
- 《所見》 短期間に使用された食料貯蔵穴と考えられる。

SKF231フラスコ状土坑【第16図（P58）／図版7】

- 《位置・確認》 IC42、ID42区に位置する。地山上面で地山土（塊）を含む黒褐色の梢円形プランを確認した。
- 《重複》 南西側でSK218土坑と重複する。SK218土坑が本遺構を掘り込んでおり、本遺構が旧い。また、現代の搅乱により北西側が切り取られている。

- 《規模と平面形》 開口部は長軸1.38m、短軸1.3mの不整形で、確認面からの深さは1.0mである。底面は段丘疊層を掘り込んでいるため、所々凹凸があり、径1.4m前後の不整な円形平面をなす。開口部の主軸方向はN-71°-Wである。
- 《壁》 壁は全体的にオーバーハングする。
- 《覆土》 底面直上に堆積する15層土は壁の崩落土と考えられる。覆土中位には地山土や地山土塊を多く含む層が見られ、他のプラスコ状土坑掘削土の埋め戻しによる人為堆積の可能性が考えられる。また、覆土中には多くの疊を含んでいる。
- 《出土遺物》 なし。
- 《時期》 本遺構からの出土遺物はないが、近接するプラスコ状土坑群から僅少量ではあるが縄文時代晚期前葉頃の土器小破片が出土している。そのため、本遺構も同時期の所産と考えられる。また、放射性炭素年代測定では、時期的に整合性の取れない測定結果が出ている（第5章参照）。
- 《所見》 短期間に使用された食料貯蔵穴と考えられる。覆土中に地山土および地山土塊が多く見られることや疊が多く出土していることから、隣接するSKF219プラスコ状土坑の掘削土および段丘疊を埋めた可能性が高い。

SKF233プラスコ状土坑【第17図（P59）／図版8・13】

- 《位置・確認》 1B41、1C41区に位置する。地山上面で地山土（塊）を含む黒褐色の楕円形プランを確認した。
- 《重複》 なし。
- 《規模と平面形》 開口部は長軸1.03m、短軸0.97m（推定）の不整な楕円形と思われ、確認面からの深さは48cmである。底面は西側から東側に向かってわずかに傾斜し、長軸約0.85m、短軸約0.7mの楕円形平面をなす。開口部の主軸方向はN-51°-Wである。
- 《壁》 急傾斜で立ち上がり、顕著なオーバーハングは見られないが、中位でわずかに広がる。
- 《覆土》 暗褐色～褐色土を主体とする覆土で、中位には地山土由来の褐色土が堆積することから、一連の埋め戻しによる人為堆積と考えられる。
- 《出土遺物》 縄文土器小破片2点【第37図9・10（P80）】が出土した。
- 《時期》 本遺構の出土土器からは時代時期が断定できないが、近接するプラスコ状土坑群から僅少量ではあるが縄文時代晚期前葉頃の土器小破片が出土している。そのため、本遺構も同時期の所産と考えられる。
- 《所見》 短期間に使用された食料貯蔵穴と考えられる。

SKF261 フラスコ状土坑【第17図 (P59) / 図版8・13】

- 《位置・確認》 IA44、IB44区に位置する。地山上面で地山土(塊)を含む黒褐色の梢円形プランを確認した。
- 《重複》 他遺構との重複はないが、北東～南西側を縦断する現代の溝状の擾乱によって上部を切り取られている。また、現代の擾乱によって東側が切り取られている。
- 《規模と平面形》 開口部は長軸1.22m(推定)、短軸1.17mの不整な梢円形と思われ、確認面からの深さは56cmである。底面は壁際から中心部に向かってわずかに傾斜し、長軸約1.35m、短軸約1.2mの不整な梢円形平面をなす。開口部の主軸方向はN-26°-Eである。
- 《壁》 全体にオーバーハングし、底面と壁面は丸みを持ってつながる。
- 《覆土》 底面付近に堆積する6・9層土は壁の崩落土と考えられる。その上位は当時の表土層由来の自然堆積と考えられる。
- 《出土遺物》 繩文土器小破片2点【第37図8 (P80)】が出土した。
- 《時期》 本遺構の出土遺物からは時代時期は断定できないが、近接するフラスコ状土坑群から僅少量ではあるが繩文時代晚期前葉頃の土器小破片が出土している。そのため、本遺構も同時期の所産と考えられる。
- 《所見》 短期間に使用された食料貯蔵穴と考えられる。

SKF274 フラスコ状土坑【第18図 (P60) / 図版8・13・14】

- 《位置・確認》 IA44・45、IB44・45区に位置する。地山上面で地山土(塊)を含む黒褐色の梢円形プランを確認した。
- 《重複》 なし。
- 《規模と平面形》 開口部は長軸1.39m、短軸1.2mの不整な梢円形で、確認面からの深さは52cmである。底面は北西側から南東側に向かってわずかに傾斜し、径1.2m前後のほぼ円形平面をなす。開口部の主軸方向はN-51°-Eである。
- 《壁》 全体にオーバーハングし、底面と壁面は丸みを持ってつながる。
- 《覆土》 底面直上に堆積する5層土は開口時の当時の表土層由来の流入土で、南東側壁際には堆積する4層土は壁の崩落土と考えられる。その上位は、地山土や地山土塊が含まれることから一連の埋め戻しによる人為堆積と考えられる。
- 《出土遺物》 繩文土器片2点【第37図11 (P80)】、礫石器1点【第40図3 (P83)】が出土した。
- 《時期》 出土土器および近接するフラスコ状土坑群の遺物出土状況から、繩文時代晚期前葉の所産と考えられる。
- 《所見》 短期間に使用された食料貯蔵穴と考えられる。

(3) 土坑

S K28土坑【第18図 (P60) / 図版13】

《位置・確認》 HQ32区に位置する。当初、土層観察用畦を残していた当該区で、黒褐色土層上面（基本土層Ⅲ層）で縄文土器小破片が少量出土し、遺構の存在することを予測した。その後、土層観察用畦の断面を精査したところ、その土層断面形態から掘り込みを確認し、土坑とした。

- 《重複》 なし。
- 《規模と平面形》 径1.5~2.0m程度の円形または楕円形と推定される。ただし、重機による表土除去時に北西側がすでに掘削されていたため、詳細は不明である。
- 《壁》 残存する部分では緩やかに立ち上がる。
- 《底面》 ほぼ平坦である。地山付近まで掘り込んでいるため、固くしまっている。
- 《覆土》 覆土は2層に分けた。1・2層上でやや色調の違いは見られるが、地山土の混入が見られるため、一連の埋め戻しによる人為堆積と考えられる。
- 《出土遺物》 縄文土器片9点が出土した。いずれも同一個体で、縄文時代晚期前葉頃と思われる粗製の深鉢形土器である。第37図12 (P80) は口縁部で、第37図13 (P80) は底部である。
- 《時期》 出土土器から、縄文時代晚期前葉の所産と考えられる。
- 《所見》 すでに遺構の一部が掘削されていたこともあり、詳細な性格は不明である。

S K87土坑【第17図 (P59) / 図版8】

《位置・確認》 HS41区に位置する。旧耕作土を掘り下げている際、プラン残存部を確認した。

- 《重複》 なし。
- 《規模と平面形》 長軸1.47m、短軸1.2mの略円形で、確認面からの深さは28cmである。主軸方向はN-45°-Eである。
- 《壁》 ほぼ垂直に立ち上がる。
- 《底面》 北西側がやや高くなっている。
- 《覆土》 2層に分けられ、随所に地山土の混入が見られることから、埋め戻しによる人為堆積と思われる。
- 《出土遺物》 なし。
- 《時期》 規模・形態および周辺遺構・遺物の検出状況より、縄文時代晚期前葉頃の所産と考えられる。
- 《所見》 現状からは、以下の推測を当てはめている。ほ場整備による上部の削平があることと垂直に近い壁の立ち上がりから、フラスコ状土坑の底部が残存している状態と考えられる。さらに、周間に貯蔵穴として利用された縄文時代晚期前葉所産のフラスコ状土坑が複数あるため、当該期の中型貯蔵穴と思われる。

3 近世

(1) 柱穴列

S A156柱穴列【第20図 (P62) / 図版9・10】

- 《位置・確認》 H P36区からH S39区にかけて位置する。S B35掘立柱建物跡の精査中、南西側の一面庇から約2m離れた地点で、北西-南東を軸として並ぶ柱穴群を確認した。
- 《重複》 P 3がSK P36を、P 5がSK P47を切る。
- 《規模》 全長約15.5mで、主軸方向はN-50°-Wである。計10基ある柱穴間の距離にはばらつきがあり、規則性はない。
- 《出土遺物》 なし。
- 《時期》 S B35掘立柱建物跡に伴うものと思われ、近世前期所産と捉えている。
- 《所見》 S B35掘立柱建物跡と軸方向をほぼ同じとする(北西-南東)ため、付随するものであろう。建物に伴う塀である可能性が高いが、S B35南西側の一面庇を拡張し、簡素な上屋を設けた简易的な物置スペースを作ったという想定も考えられる。土間の出入り口部と思われるところまで柱穴が伸びているため、雨避けや積雪対策としての役割も兼ねると推測することができる。

(2) 掘立柱建物跡

S B30掘立柱建物跡【第21・22図 (P64・65) / 図版9・10】

- 《位置・確認》 H F36・37、H G36・37、H H36・37区に位置する。地山上面で数基の柱穴様ピットを検出し、その配置から掘立柱建物跡であることを確認した。
- 《重複》 なし。
- 《規模》 梁行2間×桁行3間の掘立柱建物跡である。柱穴間の距離は梁行5.5~6.5尺、桁行6.0~7.0尺である。建物方位はN-46°-Wである。
- 《柱穴》 S B30を構成する柱穴として、計7基の柱穴を検出した。北東側と南東側の柱穴は削平されたと思われる。
- 《出土遺物》 なし。
- 《時期》 S B35掘立柱建物跡と建物方向がほぼ同方向であるため、近世期の所産であると捉えている。
- 《所見》 S B35掘立柱建物跡と同時期の所産であるとすれば、倉庫等の施設である可能性が考えられる。

S B32掘立柱建物跡【第23図 (P66) / 図版9・10】

- 《位置・確認》 H L31・32、H M31~33、H N32区に位置する。地山面で数基の柱穴様ピットを検出し、その配置から掘立柱建物跡であることを確認した。

- 《重複》 なし。
- 《規模》 梁行1間×桁行3間の掘立柱建物跡である。柱穴間の距離は梁行11.5~12.5尺、桁行6.0~6.5尺である。建物方位はN-52°-Wである。
- 《柱穴》 SB30を構成する柱穴として、計7基の柱穴を検出した。北東側の柱穴は削平されたものと考えられる。
- 《出土遺物》 なし。
- 《時期》 SB35掘立柱建物跡と建物方向がほぼ同方向であるため、近世期の所産であると捉えている。
- 《所見》 SB35掘立柱建物跡と同時期の所産であるとすれば、倉庫等の施設である可能性が考えられる。

S B35掘立柱建物跡【第20図（P62）／図版9・10】

- 《位置・確認》 HQ39、HR39区を中心に位置する。地山面直上を精査中、北西-南東を軸とする規則的な柱穴の並びを確認し、南西側に一面庇が付く梁行3間×桁行7間の掘立柱建物跡とした。その後、北西方向に更なる柱穴配置を確認し、桁行が9間に広がった。
- 《重複》 なし。
- 《規模》 梁行3間×桁行9間の直家である。梁間間尺は8.0尺(2.42m)と、桁間の約2間分の12~13尺(3.64~3.94m)を基本とする。庇の梁間間尺は4.8尺(1.45m)である。桁間間尺は厳密な一定性はないが、約6.4尺(約1.94m)が平均値となるようである。建物の長軸方向は北西-南東を向く。わずかに南西側に張り出す北側スペースが土間、南側スペースが広間になると推測される。南西側に一面庇が付き、縁側となる。土間部分の平面積は約14.5坪(約48m²)、広間部分の平面積は約26坪(約86m²)である。建物方位は、N-52°-Wである。
- 《柱穴》 SB35を構成する柱穴として、計36基の柱穴を検出した。1基(P36)は搅乱によりなくなっているが、推定として掲載している。
- 《出土遺物》 柱穴覆土中より、寛永通宝・石器など計7点が出土した。
- 《時期》 平均約6.4尺(約1.94m)という桁間間尺および間取り形式から、近世前期(17世紀後半~18世紀前半頃)と考えられる。また、放射性炭素年代測定では、時期的にはほぼ整合性の取れる測定結果が出ている(第5章参照)。
- 《所見》 近世前期所産の直家形式を呈する屋敷跡である。柱間間尺および間取り形式より、17世紀後半~18世紀前半頃の築造・運営と思われる。

(3) 井戸跡

S E139井戸跡【第24図 (P67) / 図版9・11】

- 《位置・確認》 HS38、HT38区に位置する。地山上面で不整な黒褐色の略円形プランを検出し、当初土坑としたが、精査中に礫が積み上げられた井戸跡であることを確認した。
- 《重複》 南西側でSK151土坑と重複する。本遺構がSK151土坑を掘り込んでおり、本遺構が新しい。また、北側は一部搅乱により、切り取られている。
- 《規模と平面形》 長軸1.83m(推定)、短軸1.75mの略円形で、確認面からの深さは3.24mである。掘り込みの壁際は径40~50cm前後の円礫が積み上げられている。主軸方向はN-3°-Wである。
- 《覆土》 円礫が出土する地点(深さ1.2m地点)より上位は、10層に分けられる。レンズ状堆積をなし、自然堆積と思われる。円礫より下位は分層が困難であった。
- 《出土遺物》 時代特定につながるものはないが、径50cm前後の円礫が多数出土している。
- 《時期》 近世前期(17世紀後半~18世紀前半頃)所産と思われるSB35掘立柱建物跡に伴うものと思われ、当該期付近と捉えている。また、放射性炭素年代測定では、近世期という測定結果が出ている(第5章参照)。
- 《所見》 石組円筒形と分類される井戸跡であり、この形態は中世後期~近世の検出例が多い。本遺構に近接してSB35掘立柱建物跡が存在する。放射性炭素年代測定の結果からは、SB35掘立柱建物跡と本遺構は近い時期の所産と見なせるため、この建物跡に伴う井戸跡の可能性が高い。

(4) 焼土遺構

S N18焼土遺構【第25図 (P68) / 図版9・10・14】

- 《位置・確認》 HR39区に位置する。地山直上で、梢円形に近い焼土面とその中央部に白色土(灰)の堆積を確認した。
- 《重複》 SKP109・SKP110・SK111・SK112を切る。
- 《規模と平面形》 焼土面は、長軸1.07m、短軸0.7mの不整形、被熱の深さは確認面から16cmである。焼土面中央部の白色土(灰)は、長軸0.55m、短軸0.43mの範囲で焼土面同様に不整形である。主軸方向はN-52°-Eである。
- 《壁》 外に開きながら立ち上がる。
- 《底面》 やや波打っている。
- 《覆土》 2層に分けられる。1層土はプラン中央の上部に堆積する白色土(灰)であり、2層土は被熱の強い焼土層である。
- 《出土遺物》 スクレイバー1点【第38図1 (P81)】が出土した。流入した遺物と思われ、時期的な相関性は極めて薄い。
- 《時期》 近世前期(17世紀後半~18世紀前半頃)所産と思われるSB35掘立柱建物跡に伴うものと思われ、当該期付近と捉えている。また、放射性炭素年代測定では、

上述の推定と時期的には整合性の取れる測定結果がされている（第5章参照）。

《所 見》 S B35掘立柱建物跡のなかに位置している。建物内の広間部分にあり、囲炉裏のような役割を為していた可能性がある。焼土面中央部に薄く堆積している白色土（灰）は、煮炊き用器具を設置した痕跡であると考えられる。複雑に切り合う他の造構との関連は定かではないが、S K P109・110は、その規模・形態から建物跡に伴う柱穴であると思われる。恐らくは、S B35の土間部分が南東側に約2間分広かつたとき（古段階）の柱穴痕跡であろう。

S N19焼土造構【第25図（P68）／図版9】

《位置・確認》 H Q39区に位置する。地山面直上で、円形に近い焼土面を確認した。

《重 複》 なし。

《規模と平面形》 焼土面は、長軸0.72m、短軸0.6mの不整な略円形で、被熱の深さは、確認面から8cmである。主軸方向はN-87°-Wである。

《壁》 外に開きながら立ち上がる。

《底 面》 やや碗型状である。

《覆 土》 焼土のみの單一層である。北半の被熱は弱めで、南半の被熱が強い。

《出 土 遺 物》 なし。

《時 期》 近世前期（17世紀後半～18世紀前半頃）所産と思われるS B35掘立柱建物跡に伴うものと思われ、当該期付近と捉えている。

《所 見》 S B35掘立柱建物跡のなかに位置している。建物内の広間部分にあり、囲炉裏のような役割を為していた可能性がある。S N18焼土造構より南東側に約1間分ずれることから、S B35の土間部分が南東側に広かつたとき（古段階）の囲炉裏痕跡と考えられる。そう捉えるならば、前述通り、S N18焼土造構に切られるS K P109・110が、S B35の土間部分が南東側に約2間分広かつたとき（古段階）の柱穴痕跡であると見なせよう。

(5) 炭窯

SW255炭窯【第25図（P68）／図版11】

《位置・確認》 I C51、I D51・52区で、1.3m×0.7mの礫を内部に置き、上面に炭の堆積層が帯のように広がる長軸約3.3m、短軸約2.0mの長円形のプランを確認した。炭窯内部にある大きな礫は、北東部に向く面に多くの被熱痕を持つ。

《重 複》 なし。

《規模と平面形》 長軸約4.5m、短軸約2.4mの楕円形で、地山面より約70cmの深さがあるすり鉢状になっている。主軸方向はN-30°-Wである。

《壁》 外に開きながら立ち上がる。

- 《底面》 すり鉢状を呈し、段丘礫が多く露出する。中央部付近に一段の落ち込みがある。
- 《覆土》 5層に分かれ、3～5層に地山土と礫が多く含まれ、人為堆積と思われる。2層が層厚約20cmの炭化物層であり、1層は伏せ土と考える。
- 《出土遺物》 なし。
- 《時期》 近世前期（17世紀後半～18世紀前半頃）所産と思われるSB35掘立柱建物跡に伴うものと思われ、当該期付近と捉えている。また、放射性炭素年代測定では、上述の推定と時期的に整合性の取れない測定結果が出ている（第5章参照）。
- 《所見》 底部まで掘り下げるに、中央部付近に一段の落ち込みがある。この落ち込みは、規模・形態から、東側にある大きな礫が元々埋まっていたところと判断する。このことにより、第一段階の操業として、底部中央に大きな礫がある状態で炭窯を操業していたことが考えられる。そして、第二段階の操業が大きな礫を現状の位置に動かした段階である。移動するために、炭窯の南東側を深く掘り込んだことが認められる。礫を移動した理由については判然としないが、操業のための便宜を図ったのだろう。

4 時代不明

（1）柱穴列

S A291柱穴列【第26図（P69）】

- 《位置・確認》 IB50、IC50・51、ID51区に位置する。精査中に地山面で柱穴群を検出し、4基の柱穴が柱列であることを確認した。
- 《重複》 なし。
- 《規模》 全長約9mで、主軸方向はN-54°-Wである。柱穴間の距離は、約3mである。
- 《出土遺物》 なし。
- 《時期》 現状では不明である。
- 《所見》 近・現代の水田施設に関わる可能性が高いと予想するが、出土遺物がなく、断定はできない。

S A292柱穴列【第26図（P69）】

- 《位置・確認》 HT48、HT～IB49区に位置する。精査中に地山面で柱穴群を検出し、3基の柱穴が柱列であることを確認した。
- 《重複》 なし。
- 《規模》 全長約6.4mで、主軸方向はN-55°-Wである。柱穴間の距離は、約3.2mである。
- 《出土遺物》 なし。

- 《時 期》 現状では不明である。
- 《所 見》 近・現代の水田施設に関わる可能性が高いと予想するが、出土遺物がなく、断定はできない。

(2) 挖立柱建物跡

S B275掘立柱建物跡【第27図（P70）】

- 《位置・確認》 I O57・58、I P57・58区に位置する。地山面で柱穴群を検出し、その後6基の柱穴が掘立柱建物跡であることを確認した。
- 《重 複》 S B276と重複するが、新旧関係は不明である。
- 《規 模》 梁行1間×桁行2間の掘立柱建物跡である。柱穴間の距離は梁行10.5尺、桁行7.0~7.5尺である。建物方位はN-15°-Eである。
- 《出 土 遺 物》 なし。
- 《時 期》 現状では不明である。
- 《所 見》 詳細な性格は不明である。

S B276掘立柱建物跡【第28図（P71）】

- 《位置・確認》 I P57、I O~I Q58区に位置する。地山面で柱穴群を検出し、その後4基の柱穴が掘立柱建物跡であることを確認した。
- 《重 複》 S B275と重複するが、新旧関係は不明である。
- 《規 模》 梁行1間×桁行1間の掘立柱建物跡である。柱穴間の距離は梁行8.0尺、桁行17.5尺である。建物方位はN-76°-Wである。
- 《出 土 遺 物》 なし。
- 《時 期》 現状では不明である。
- 《所 見》 詳細な性格は不明である。

(3) 溝跡

S D153溝跡【第29図（P72）】

- 《位置・確認》 H S38、H T38・39区に位置する。地山上面で細長く延びる黒褐色のプランを検出し、その形状から溝跡であることを確認した。
- 《重 複》 南西側でS K P159柱穴様ピットと重複する。S K P159柱穴様ピットが本遺構を掘り込んでおり、本遺構が古い。
- 《規 模と平面形》 南東から北西に直線的に延びる。検出した長さは4.0m、幅0.55mで、確認面からの深さは8cmである。主軸方向はN-43°-Wである。
- 《覆 土》 黒褐色土の單一層で、人為堆積と思われる。

- 《出 土 遺 物》 なし。
- 《時 期》 現状では不明である。
- 《所 見》 詳細な性格は不明である。

(4) 焼土遺構

S N230焼土遺構【第29図（P72）／図版14】

- 《位置・確認》 I K54区に位置する。地山面で焼土の堆積を確認した。
- 《重 複》 なし。
- 《規模と平面形》 平面形は、長軸28cm、短軸20cmの不整な円形で、下部に長軸66cm、短軸56cmの梢円形を呈する掘り込みを有する。地山面より深さ約10cmである。主軸方向はN-36°-Wである。焼土の南東側の径28cmほどの碟には被熱痕が見られた。また、北西側に2ヵ所の不整形な炭化物範囲があり、本遺構使用時の痕跡であろう。
- 《 壁 》 外に開きながら立ち上がる。
- 《底 面》 やや碗型状である。
- 《覆 土》 2層に分層され、1層が厚さ5cmの焼土層である。
- 《出 土 遺 物》 石鏃1点【第38図2（P81）】を2層上面で出土した。流入した遺物と思われ、時期的な相関性は極めて薄い。
- 《時 期》 新しい時期の焼土痕跡と捉えたいが、現状では不明である。また、放射性炭素年代測定では、5～6世紀代という測定結果が出ている（第5章参照）。
- 《所 見》 詳細な性格は不明である。

(5) 土坑

S K20土坑【第30図（P73）】

- 《位置・確認》 H Q33区に位置する。地山面上を精査中、明瞭なプランを確認した。
- 《重 複》 なし。
- 《規模と平面形》 長軸1.25m、短軸1.02mの梢円形で、確認面からの深さは30cmである。主軸方向はN-13°-Eである。
- 《 壁 》 外に開きながら立ち上がる。
- 《底 面》 北側の傾斜がきつく、南側はほぼ平坦である。
- 《覆 土》 単一層で、隨所に地山土や小碟の混入が見られることから、埋め戻しによる人為堆積と思われる。
- 《出 土 遺 物》 なし。
- 《時 期》 現状では不明である。
- 《所 見》 詳細な性格は不明である。

S K24土坑【第30図（P73）／図版10】

《位置・確認》 HR42区に位置する。地山直上を精査中、明瞭なプランを確認した。

《重複》 なし。

《規模と平面形》 長軸1.2m、短軸1.1mの略円形で、確認面からの深さは30cmである。主軸方向はN-69°-Eである。

《壁》 垂直に近く立ち上がる。

《底面》 ほぼ平坦である。

《覆土》 2層に分けられ、随所に地山土の混入が見られることから、埋め戻しによる人為堆積と思われる。

《出土遺物》 なし。

《時期》 現状では不明である。

《所見》 詳細な性格は不明である。

S K25土坑【第31図（P74）／図版14】

《位置・確認》 HP35区を中心位置する。地山直上を精査中、明瞭なプランを確認した。

《重複》 なし。

《規模と平面形》 長軸5.7m、短軸3.8mの略円形で、確認面からの深さは82cmである。主軸方向はN-59°-Eである。

《壁》 南西側に一段の段差を持って、外に開きながら立ち上がる。

《底面》 ほぼ平坦である。

《覆土》 4層に分けられ、随所に地山土の混入が見られることから、埋め戻しによる人為堆積と思われる。

《出土遺物》 スクレイパー【第38図5（P81）】が1点出土した。

《時期》 現状では不明である。

《所見》 詳細な性格は不明である。1層土上位からガラス片が出土したため、近・現代に所属する廐棄坑の可能性もありえる。

S K106土坑【第30図（P73）】

《位置・確認》 HH38区に位置する。地山上面で地山上（塊）を含む黒褐色の不整な梢円形プランを確認した。

《重複》 なし。

《規模と平面形》 長軸1.46m、短軸1.04mの不整な梢円形で、確認面からの深さは50cmである。主軸方向はN-53°-Eである。

《壁》 北側の壁はやや緩やかに立ち上がり、南側の壁は急に立ち上がる。

《底面》 わずかに鍋底状で、不整な梢円形である。

《覆土》 覆土は4層に分けた。2・3層は地山土主体の埋め戻しと判断されるため、人為堆積と考えられる。また、確認面と覆土中から砾が出土している。

《出土遺物》 なし。

《時期》 現状では不明である。

《所見》 詳細な性格は不明である。

SK111土坑【第30図（P73）】

《位置・確認》 HR39区に位置する。SN18焼土遺構周囲を精査中、切り合う本遺構を確認した。

《重複》 SK112・SKP109を切り、SN18に切られる。

《規模と平面形》 長軸1.5m、短軸0.6mの不整な梢円形で、確認面からの深さは56cmである。主軸方向はN-48°-Eである。

《壁》 外に開きながら立ち上がる。

《底面》 ややすり鉢状である。

《覆土》 2層に分けられ、随所に地山土の混入が見られることから、埋め戻しによる人為堆積と思われる。

《出土遺物》 なし。

《時期》 現状では不明である。

《所見》 SN18焼土遺構構築時の掘り込み痕跡の可能性がある。

SK112土坑【第30図（P73）】

《位置・確認》 HR39区に位置する。SN18焼土遺構の周囲を精査中、切り合う本遺構を確認した。

《重複》 SB35P17を切り、SN18・SK111に切られる。

《規模と平面形》 長軸1.4m、短軸1.05mの梢円形で、確認面からの深さは40cmである。主軸方向はN-16°-Wである。

《壁》 垂直に近く立ち上がる。

《底面》 やや波打っている。

《覆土》 3層に分けられ、随所に地山土の混入が見られることから、埋め戻しによる人為堆積と思われる。

《出土遺物》 なし。

《時期》 SB35P17を切ることから、近世前期以降と思われる。

《所見》 SN18焼土遺構築造・運営時に伴う可能性がある。

S K136土坑【第32図（P75）】

- 《位置・確認》 H S 39・40、H T 39・40区に位置する。地山上面で地山土（塊）を含む黒褐色の楕円形プランを確認した。
- 《重複》 北西側でS K158土坑と重複する。S K158土坑が本遺構を掘り込んでおり、本遺構が用いられる。
- 《規模と平面形》 長軸1.26m、短軸1.2mの略円形で、確認面からの深さは48cmである。主軸方向はN-66°-Wである。
- 《壁》 ほぼ垂直に立ち上がる。
- 《底面》 ほぼ平坦な略円形であり、段丘疊層を掘り込んでいる。
- 《覆土》 覆土は2層に分けた。底面上に一部黒褐色土が堆積し、主体となる覆土は暗褐色土である。土層の堆積状況から一気に埋め戻されたものと考えられる。
- 《出土遺物》 覆土中から径10~30cm前後の円礫が多数出土した。
- 《時期》 現状では不明である。
- 《所見》 詳細な性格は不明である。

S K151土坑【第32図（P75）】

- 《位置・確認》 H S 37・38区に位置する。地山上面で径10~20cm前後の礫をまとめて確認し、配石遺構とした。その後、掘り込みを確認したため、土坑に変更をした。
- 《重複》 北西側でS E 139井戸跡と重複する。S E 139井戸跡が本遺構を掘り込んでおり、本遺構が用いられる。
- 《規模と平面形》 現状では、径1.4m程度の円形または楕円形と推定されるが、北西側がS E 139井戸跡に掘り込まれており、詳細は不明である。確認面からの深さは45cmである。
- 《壁》 ほぼ垂直に立ち上がる。
- 《底面》 南西側は中心部に向かって緩やかに傾斜し、それ以外はほぼ平坦である。
- 《覆土》 暗褐色土主体で、土層断面形態から埋め戻しによる人為堆積と考えられる。
- 《出土遺物》 確認面で出土したものと同様の径10~20cm前後の礫が覆土中から多数出土した。
- 《時期》 現状では不明である。
- 《所見》 詳細な性格は不明である。

S K152土坑【第32図（P75）】

- 《位置・確認》 H P 40、H Q 40区に位置する。地山上面で地山土（塊）を含む暗褐色土の不明瞭な楕円形プランを確認した。
- 《重複》 なし。
- 《規模と平面形》 長軸0.9m、短軸0.77mの楕円形で、確認面からの深さは26cmである。主軸方向はN-71°-Wである。

- 《 壁 》 ほぼ垂直に立ち上がる。
- 《 底 面 》 平坦な楕円形である。
- 《 覆 土 》 覆土は2層に分けた。1・2層とともに周辺の地山土に類似する覆土で、一連の埋め戻しと考えられる。
- 《 出 土 遺 物 》 なし。
- 《 時 期 》 現状では不明である。
- 《 所 見 》 詳細な性格は不明である。

SK204土坑【第32図(P75)】

- 《 位 置 ・ 確 認 》 IB41区に位置する。地山上面で地山土(塊)を含む黒褐色の楕円形プランを確認した。
- 《 重 複 》 なし。
- 《 規 模 と 平 面 形 》 長軸0.9m、短軸0.8mの楕円形で、確認面からの深さは28cmである。主軸方向はN-64°-Eである。
- 《 壁 》 南西側はゆるやかに開きながら、北東側はかなり急傾斜で立ち上がる。
- 《 底 面 》 ほぼ平坦で、不整な楕円形である。地山砂質土層を掘り込んでいる。
- 《 覆 土 》 覆土は4層に分けた。土層断面形態からは自然堆積と考えられる。
- 《 出 土 遺 物 》 なし。
- 《 時 期 》 現状では不明である。
- 《 所 見 》 詳細な性格は不明である。

SK209土坑【第33図(P76)／図版10】

- 《 位 置 ・ 確 認 》 IC42・43区に位置する。地山上面で地山土(塊)を含む黒褐色の略円形プランを確認した。
- 《 重 複 》 なし。
- 《 規 模 と 平 面 形 》 長軸1.1m、短軸1.02mの略円形で、確認面からの深さは60cmである。主軸方向はN-2°-Eである。
- 《 壁 》 やや急傾斜に立ち上がる。
- 《 底 面 》 南側に向かってごく緩やかに傾斜し、不整な楕円形である。地山砂質土層を掘り込んでいる。
- 《 覆 土 》 覆土は3層に分けた。2・3層は地山土の混入が見られ、一括埋め戻しによる人為堆積と想定する。1層は埋め戻し後の窪みに流入した後代の表土と考えられる。
- 《 出 土 遺 物 》 磔石器【第39図1(P82)】1点が出土した。
- 《 時 期 》 現状では不明である。
- 《 所 見 》 詳細な性格は不明である。

S K210土坑【第33図（P76）】

- 《位置・確認》 I A41区に位置する。地山上面で地山土塊の混入する暗褐色の楕円形プランを確認した。
- 《重複》 なし。
- 《規模と平面形》 長軸0.9m、短軸0.75mの不整な楕円形で、確認面からの深さは24cmである。主軸方向はN-26°-Eである。
- 《壁》 かなり急傾斜に立ち上がる。
- 《底面》 ほぼ平坦で、不整な楕円形である。地山砂質土層を掘り込んでいる。
- 《覆土》 覆土は2層に分けた。2層は地山土の混入が顕著に見られる暗褐色土主体の堆積層で一括の埋め戻しと考えられる。
- 《出土遺物》 なし。
- 《時期》 現状では不明である。
- 《所見》 詳細な性格は不明である。

S K218土坑【第33図（P76）】

- 《位置・確認》 I C42、I D42区に位置する。地山上面で黒色の楕円形プランを確認した。
- 《重複》 北東側でS K F231プラスコ状土坑と重複する。本遺構がS K F231プラスコ状土坑を掘り込んでおり、本遺構が新しい。
- 《規模と平面形》 長軸1.25m、短軸0.95mの不整な楕円形で、確認面からの深さは27cmである。主軸方向はN-83°-Wである。
- 《壁》 北東側はやや急傾斜に、南西側は緩やかに立ち上がる。
- 《底面》 ほぼ平坦で、方形に近い不整な楕円形である。地山砂質土層を掘り込んでいる。
- 《覆土》 壁際にはわずかに暗褐色土が堆積し、その上位に黒色土が堆積する。1層の黒色土層には、地山土塊が混入するため、埋め戻しによる人為堆積の可能性が考えられる。
- 《出土遺物》 なし。
- 《時期》 現状では不明である。
- 《所見》 詳細な性格は不明である。

S K220土坑【第34図（P77）】

- 《位置・確認》 I M59・60、I N59・60区に位置する。精査中に地山面で黒褐色土の円形プランを確認した。
- 《重複》 なし。
- 《規模と平面形》 径1m前後の略円形で、地山面より深さ40cmの規模である。主軸方向はN-35°-Wである。

- 《 壁 》 やや緩やかに立ち上がる。
- 《底 面》 鍋底状で、堅くしまっている。
- 《覆 土》 レンズ状堆積をなす2層に分けられ、自然堆積土と考えられる。
- 《出 土 遺 物》 繩文土器2点が出土した。
- 《時 期》 出土遺物が僅少であるため、時代時期を決定することは困難である。
- 《所 見》 繩文時代の所産と考えられるが、その詳細な性格・時期は不明である。

S K221土坑【第34図（P77）】

- 《位置・確認》 I N59区に位置する。精査中に地山面で暗褐色土の楕円形プランを確認した。
- 《重 視》 なし。
- 《規模と平面形》 長軸0.8m、短軸0.6mの楕円形を呈する。深さは、地山面より10cmである。主軸方向はN-36°-Eである。
- 《 壁 》 急に立ち上がっており、段丘疊が露出している。
- 《底 面》 平坦で堅くしまっている。段丘疊が露出している。
- 《覆 土》 単一層で、人為堆積と考えられる。
- 《出 土 遺 物》 なし。
- 《時 期》 現状では不明である。
- 《所 見》 詳細な性格は不明である。

S K222土坑【第34図（P77）】

- 《位置・確認》 I O57区に位置する。精査中に地山面で暗褐色土の楕円形プランを確認した。
- 《重 視》 なし。
- 《規模と平面形》 長軸0.8m、短軸0.7mの楕円形を呈する。深さは、地山面より18cmである。主軸方向はN-48°-Wである。
- 《 壁 》 緩やかに立ち上がる。
- 《底 面》 鍋底状で堅くしまっている。段丘疊が多く露出している。
- 《覆 土》 3層に分けられ、全体的にしまりが弱く、人為堆積であると考えられる。
- 《出 土 遺 物》 なし。
- 《時 期》 現状では不明である。
- 《所 見》 詳細な性格は不明である。

S K232土坑【第34図（P77）／図版11】

- 《位置・確認》 I B42・43、I C42・43区に位置する。地山上面で地山土（塊）を含む黒褐色の略円形プランを確認した。

- 《重複》なし。
- 《規模と平面形》長軸1.25m、短軸1.15mの不整な略円形で、確認面からの深さは26cmである。主軸方向はN-69°-Eである。
- 《壁》中位まで緩やかに開き、途中からほぼ垂直に立ち上がる。
- 《底面》北東側から南西側に向かって緩やかに傾斜し、方形に近い不整な梢円形である。地山砂質土層を掘り込んでいる。
- 《覆土》覆土は4層に分けた。上層断面形態から自然堆積と考えられる。
- 《出土遺物》礫石器【第40図2 (P83)】1点が出土した。
- 《時期》現状では不明である。
- 《所見》詳細な性格は不明である。

(6) 性格不明遺構

S X126性格不明遺構【第35図 (P78)】

- 《位置・確認》HN31区に位置する。地山上面で不整な黒褐色プランを確認した。
- 《重複》なし。
- 《規模と平面形》長さ3.0m、最大幅0.85mの不整な溝状で、確認面からの深さは6cmである。主軸方向はN-32°-Wである。
- 《壁》ほとんど遺存しないため、現状では不明である。
- 《覆土》地山土を多く含む黒褐色土の單一層で、埋め戻しによる人為堆積と考えられる。
- 《出土遺物》繩文土器1点と時代不明の陶磁器片11点が出土した。繩文土器は後世の搅乱により流入したものと考えられる。
- 《時期》近世以降の所産と考えられるが、現状では不明である。
- 《所見》S X134性格不明遺構とほぼ同軸方向で覆土も類似することから、関連のある遺構とも考えられる。しかし、調査段階ではその詳細を判断するまでに至らず、現状では不明である。

S X134性格不明遺構【第35図 (P78)】

- 《位置・確認》HR37区に位置する。地山上面で不整な黒褐色プランを確認した。
- 《重複》なし。
- 《規模と平面形》長さ1.97m、最大幅0.85mの不整な溝状で、確認面からの深さは16cmである。主軸方向はN-46°-Wである。
- 《壁》ほとんど遺存しない。
- 《覆土》地山土および地山土塊が混入する黒褐色土主体の覆土で、埋め戻しによる人為堆積の可能性が考えられる。
- 《出土遺物》時代不明の陶磁器片2点が出土した。

《時 期》 近世以降の所産と考えられるが、現状では不明である。

《所 見》 S X 126性格不明遺構とはほぼ同軸方向で覆土も類似することから、関連のある遺構とも考えられる。しかし、調査段階ではその詳細を判断するまでに至らず、現状では不明である。

S X 150性格不明遺構【第35図（P78）】

《位置・確認》 H S 41・42、H T 41・42区に位置する。地山上面で不整で不明瞭な方形プランを確認した。

《重 複》 南西側でSKF 154プラスコ状土坑とSKP 147柱穴様ピットと重複する。本遺構が、SKF 154プラスコ状土坑を掘り込んでおり、本遺構が新しい。また、SKP 147柱穴様ピットが本遺構を掘り込んでおり、本遺構が古い。

《規模と平面形》 長軸3.78m、短軸2.85mの隅丸方形に近い不整形である。主軸方向はN-33°-Eである。

《壁》 全体が緩やかに立ち上がる。

《覆 土》 色調や地山土の混入割合などから2層に分層した。一連の自然堆積と考えられる。

《出 土 遺 物》 繩文土器1点と時代不明の陶磁器片2点が出土した。繩文土器は後世の搅乱により流入したものと考えられる。

《時 期》 近世以降の所産と考えられるが、現状では不明である。

《所 見》 不整な平面形状で、S X 126およびS X 134性格不明遺構と覆土が類似するが、調査段階ではその詳細を判断するまでに至らず、現状では不明である。

第3節 遺構外出土遺物

【第6・8表（P46・47）／第41～46図（P84～89）／図版15・16】

今回の調査における遺構外出土遺物は、繩文土器が中コンテナ（容量18リットル）4箱約200点、石器が中コンテナ2箱約50点、近世の遺物が極少量である。本遺跡は、昭和50年前後の水田造成時に大半が地山あるいは段丘疊層まで削平されており、明瞭な遺物包含層は失われていた。よって、遺物の大半は旧水田耕作土や倒木痕および近・現代の搅乱からの出土である。

なお、選別した遺構外出土遺物については、第6・8表（P46・47）および第41～46図（P84～89）に掲載して報告とする。

第5表 遺構内出土土器類一覧表

相図番号	測定番号	遺構番号	時期(形式)	器種	部位	口部・口縁部	頸部	肩部・胴部	底部	備考
36-1	12	S129	圓文中期末 (大木10式)	深鉢	口縁～ 腹部	口縁葉文帶 沈縫1条 口唇部取り	LR圓文	J字文(3～4等分か?) 内面被熱によるハジケ		内外面環状化物
36-2	12	S129	圓文中期末 (大木10式)	深鉢	口縁～ 腹部	口縁葉文帶 口唇部取り	LR圓文			内外面環状化物
36-3	12	S129	圓文中期末 (大木10式)	深鉢	口縁～ 腹部	口縁葉文帶 口唇部取り	LR圓文			
36-4	12	S129	圓文初期底葉	深鉢	口縁部	RL圓文 折り返し口縁 口唇部取り				外表面環状化物 織維含む
36-5	12	S129	圓文初期底葉	深鉢	口縁部	RL圓文 口唇部取り				織維含む
36-6	12	SKF23	圓文晚期初頭 (大斜B式)	並	口縁～ 底部	LR圓文 口唇部取り	入組三叉文	肩部曲線文(3叉文) 平行沈縫2条 LR圓文		内外面赤色彩
36-7	12	SKF23	圓文晚期末 ～後期初頭	鉢?	口縁部	A字状突起 LR圓文 上層被熱狀縫1条 下部平行沈縫2条 楕の剥離板				内面環状化物
36-8	12	SKF23	圓文後期	深鉢	腹部			捲赤文		外表面環状化物
36-9	12	SKF23	圓文後期末 ～後期初頭	鉢?	腹部 口縁～			上端沈縫1条 LR圓文		
37-1	13	SKF23	圓文後期初頭 (大斜B式)	深鉢	腹部	B字状突起 上層被熱1条 人顎曲線文 口唇部折み目	平行沈縫3条 沈縫開列点文	LR圓文		内外面環状化物
37-2	13	SKF206	圓文後期後段以降?	深鉢	腹部			LR圓文		内外面環状化物
37-3	12	SKF23	圓文後期?	深鉢	口縁部	口唇部取り LR圓文				外表面環状化物
37-4	13	SKF215	圓文晚期底葉	浅鉢?	腹部			上部平行沈縫2条 下部沈縫2条 ミガキによる表面調整		
37-5	13	SKF206	圓文晚期底葉	鉢	照～腹部		平行沈縫2条 沈縫開列点文	LR圓文		内外面環状化物
37-6	13	SKF206	圓文晚期底葉	鉢	腹部			LR圓文		内外面環状化物
37-7	13	SKF207	圓文晚期前葉	鉢	腹部		上部平行沈縫3条 下部沈縫1条			内外面環状化物
37-8	13	SKF261	圓文晚期?	不明	腹部			LR圓文		
37-9	13	SKF233	圓文晚期?	不明	腹部			LR圓文		
37-10	13	SKF233	圓文晚期?	不明	腹部			LR圓文		
37-11	13	SKF274	圓文晚期初頭 (大斜B式)	並	腹部			上端沈縫1条 三叉文		外表面環状化物
37-12	13	SK28	圓文後期末 ～後期初頭	深鉢	口縁部	無文 口縁部ケズリによる調整				外表面被熱により一部赤変 内外面環状化物
37-13	13	SK28	圓文後期末 ～後期初頭	深鉢	照～底部			無文	やや 上げ底	外表面被熱により一部赤変

第6表 遺構外出土土器類一覧表

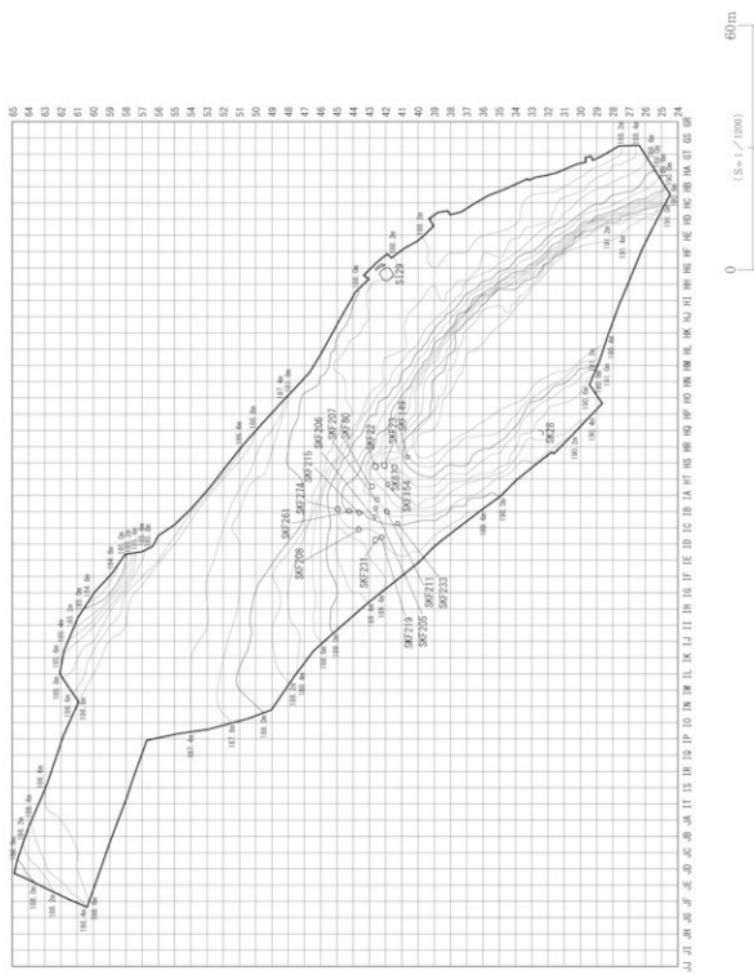
相図番号	測定番号	出土地点	時期(形式)	器種	部位	口部・口縁部	頸部	肩部・胴部	底部	備考
41-1	15	I A55	圓文前期底葉	深鉢	口縁部	波状口縁 2列の刻文 口唇部折み目 織維含む				内外面環状化物
41-2	15	HD37	圓文前期底葉	深鉢	口縁部	波状口縁 O段多条(RJ)				
41-3	15	HE37～38	圓文前期底葉	深鉢	口縁部	波状口縁 O段多条(RJ)				
41-4	15	IK57	圓文前期底葉	深鉢	口縁部	波状口縁 O段多条(RJ) 口唇部折り 織維含む				
41-5	15	I G52	圓文前期底葉	深鉢	腹部		O段多条(RJ)(結末) 織維含む		丸底?	外表面環状化物
41-6	15	I H54	圓文前期底葉 (早田B式?)	深鉢	腹部		押し引き口縁文 (下端波状に施文)			
41-7	15	IR61-62	圓文前期底葉 (円筒下端C式)	深鉢	口縁～ 腹部	波状口縁 短輪條体側面圧痕	発達輪付に側突文			外表面被熱による赤変
41-8	15	IC51	圓文前期底葉 (大木10式)	深鉢	腹部			木口燃焼赤文?		外表面被熱による赤変
41-9	15	HS44	圓文前期底葉	深鉢	腹部		沈縫による直線文 (沈縫開列点) LR圓文			外表面環状化物
41-10	15	IB44	圓文後期後葉?	深鉢	腹部		沈縫による曲線文 LR圓文 下部平行沈縫4条 沈縫開列点文			外表面環状化物
41-11	15	範體	圓文晚期初頭 (大斜B式)	鉢	口縁～ 腹部	B字状突起 上端沈縫文 平行沈縫2条 口唇部折み目	入組三叉文 埴修孔	肩部平行沈縫3条 沈縫開列点文 腹部JR圓文		外表面環状化物
41-12	15	HR48	圓文晚期?	鉢	照～腹部			LR圓文		

第7表 遺構内出土石器類一覧表

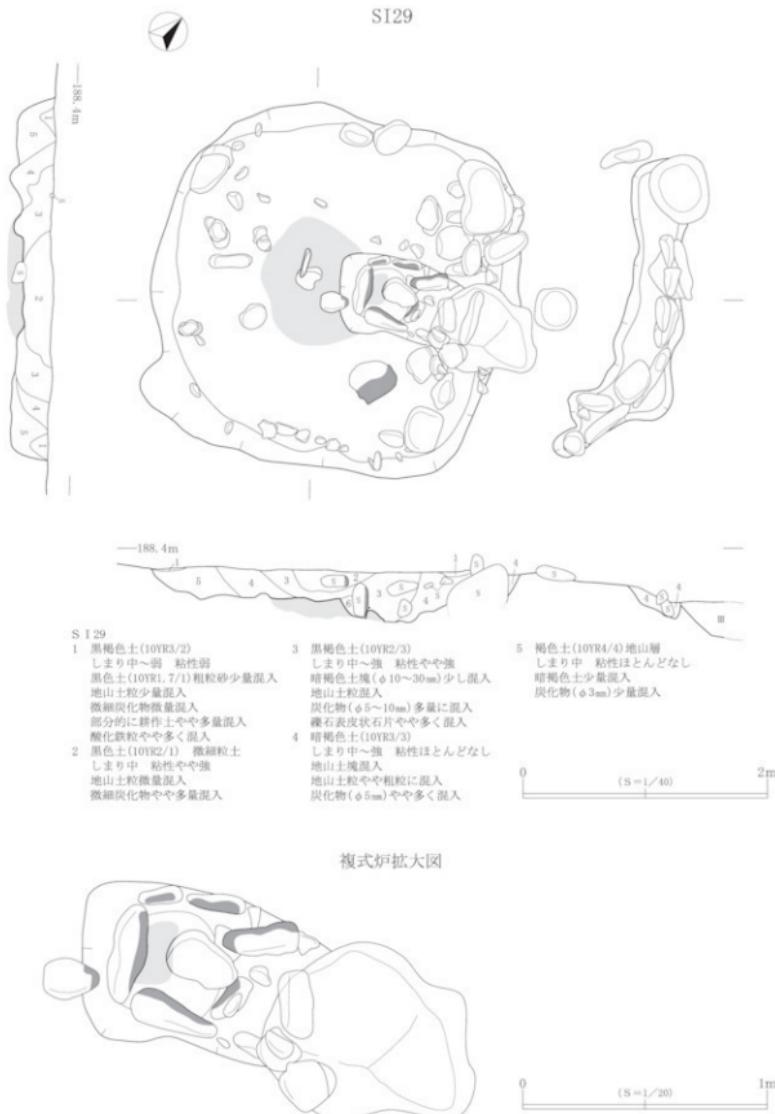
排國番号	同版番号	遺構番号	器種	石質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)
38-1	14	SN18	スクレイバー	珪質頁岩	42	25	9	6.8
38-2	14	SN230	石鏹	珪質頁岩	37	15	4	1.0
38-3	14	SKF23	石錐	玉髓	34	16	9	3.0
38-4	14	SKF23	スクレイバー	珪質頁岩	35	42	12	10.6
38-5	14	SK25	スクレイバー	珪質頁岩	156	55	26	151.4
38-6	14	SKF80	石核	珪質頁岩	129	71	53	417.0
39-1	14	SK209	鍛磨器類	安山岩	251	149	84	4100.0
39-2	14	SKF215	鍛磨器類	安山岩	158	157	101	2900.0
40-1	14	SKF215	鍛磨器類	安山岩	128	103	81	1400.0
40-2	14	SK232	鍛磨器類	安山岩	112	82	61	660.5
40-3	14	SKF274	鍛磨器類	安山岩	162	51	45	582.0

第8表 遺構外出土石器類一覧表

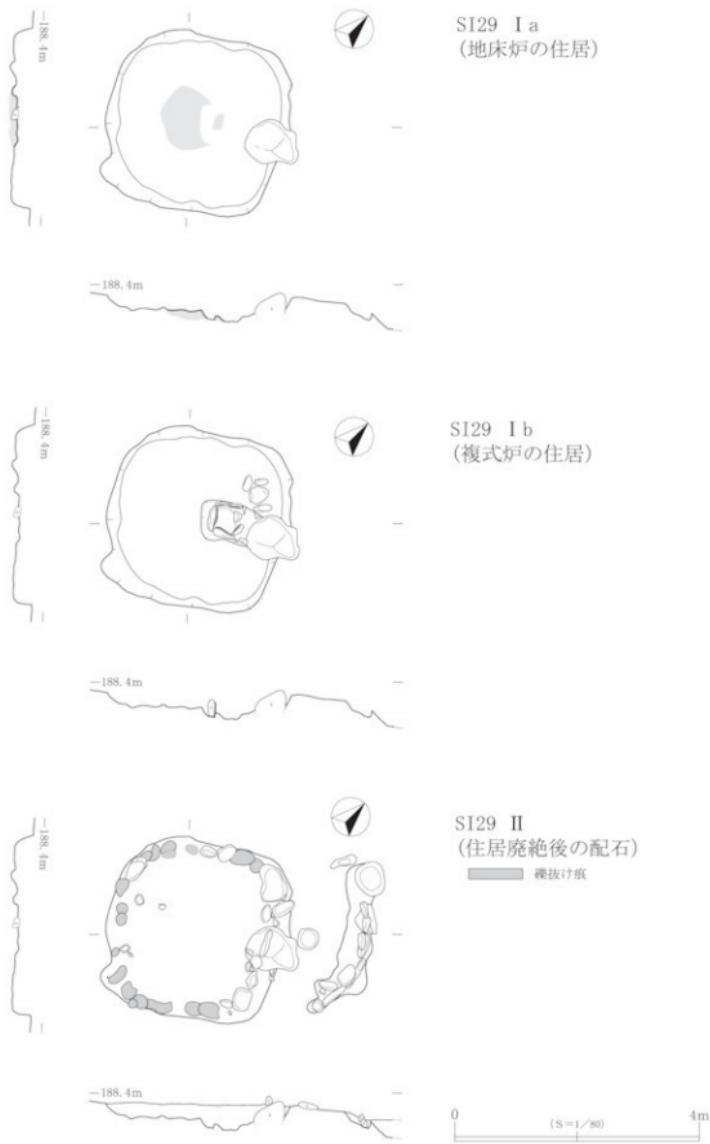
排國番号	同版番号	出土地点	器種	石質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)
42-1	16	HQ49	石鏹	珪質頁岩	28	12	5	1.2
42-2	16	基本土層	石鏹	珪質頁岩	26	14	3	0.6
42-3	16	表採	石鏹	珪質頁岩	25	16	4	1.0
42-4	16	HH41	石鏹	珪質頁岩	19	14	4	0.8
42-5	16	HH40	石匙	珪質頁岩	68	32	9	13.2
42-6	16	HC40	石匙	珪質頁岩	71	30	8	11.6
42-7	16	IB50	石匙	珪質頁岩	56	24	6	6.6
42-8	16	表採	石匙	珪質頁岩	76	36	17	26.4
42-9	16	表採	石匙	珪質頁岩	34	61	11	15.6
43-1	16	IA55	石毬	珪質頁岩	77	44	18	61.8
43-2	16	表採	スクレイバー	珪質頁岩	89	16	16	44.5
43-3	16	HG41	スクレイバー	珪質頁岩	60	42	15	33.2
43-4	16	IF45	スクレイバー	珪質頁岩	83	68	26	148.2
43-5	16	HN44	スクレイバー	珪質頁岩	66	103	22	127.6
43-6	16	拂土	スクレイバー	珪質頁岩	48	63	15	39.4
44-1	16	表採	スクレイバー	珪質頁岩	21	46	15	12.2
44-2	16	HQ48	スクレイバー	珪質頁岩	33	47	14	15.6
44-3	16	表採	スクレイバー	珪質頁岩	51	41	30	56.2
44-4	16	IJ49	スクレイバー	珪質頁岩	68	38	9	23.0
44-5	16	IB43	スクレイバー	珪質頁岩	90	22	20	22.4
44-6	16	HG42	スクレイバー	珪質頁岩	84	38	21	25.8
45-1	16	HJ41	二次加工ある剝片	珪質頁岩	58	32	10	13.2
45-2	16	HK45	二次加工ある剝片	珪質頁岩	32	41	15	19.8
45-3	16	HL44	二次加工ある剝片	珪質頁岩	54	22	9	9.2
46-1	16	IA44	鍛磨器類	安山岩	87	72	33	301.0
46-2	16	HJ43	鍛磨器類	安山岩	87	74	7	528.0
46-3	16	HP35	鍛磨器類	安山岩	96	85	43	361.5

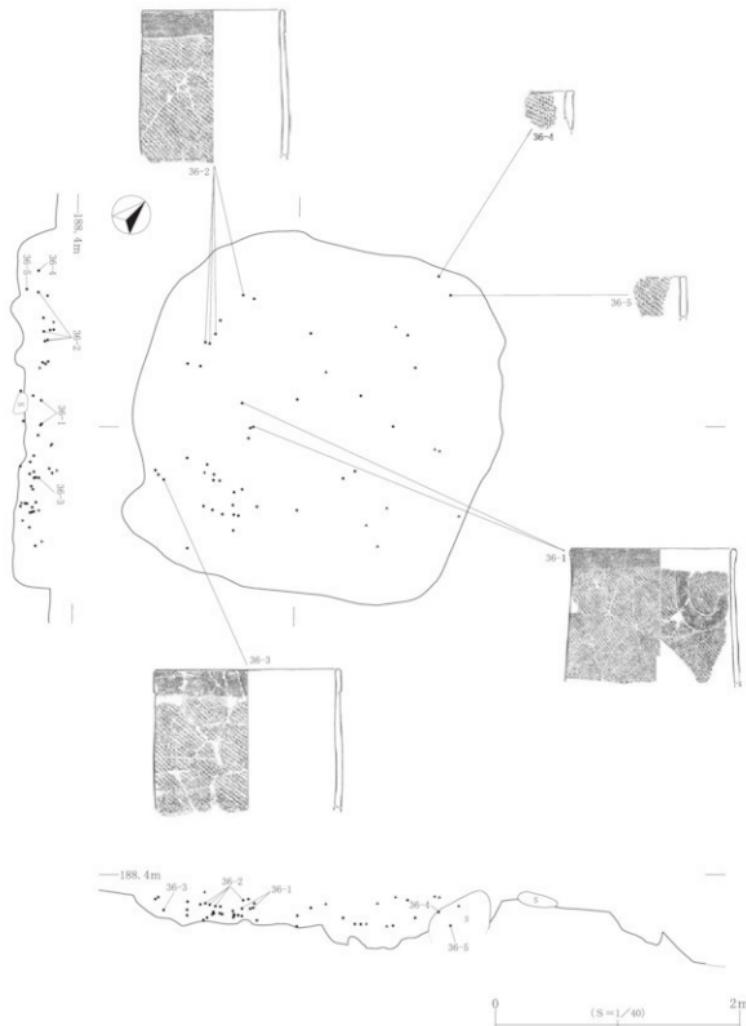


第6図 遺構配置図（縄文時代）



第7図 SI 29竪穴住居跡(1)

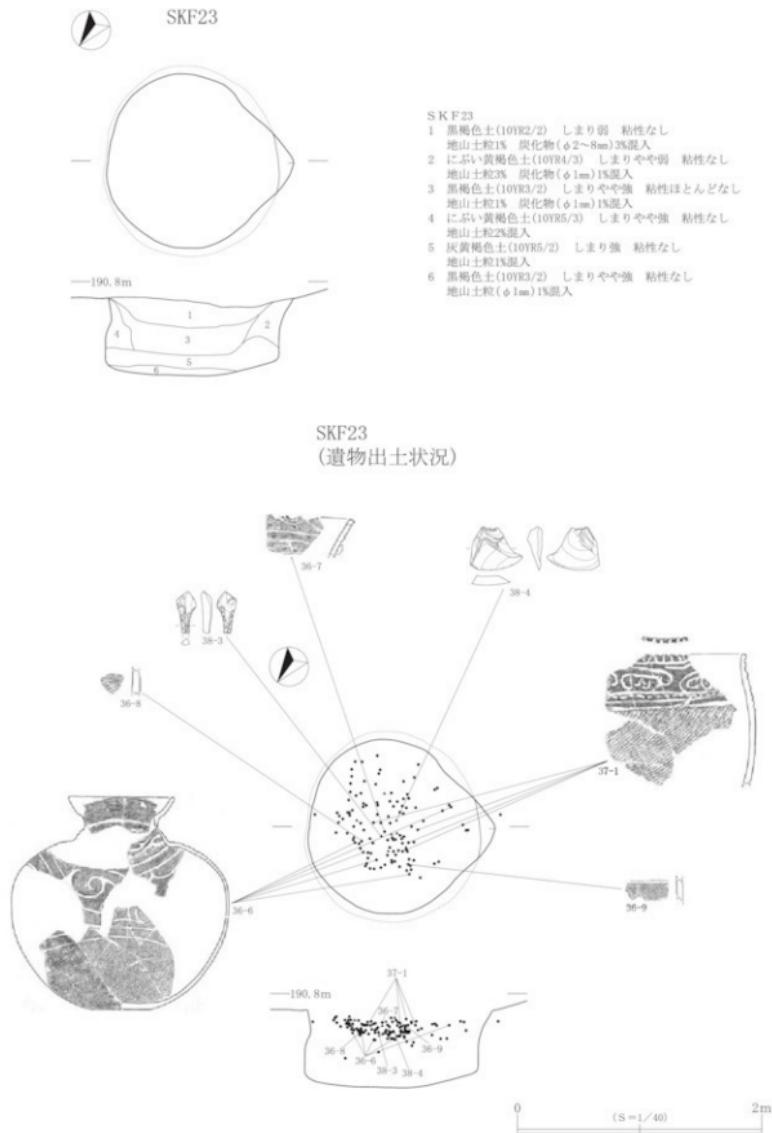


SI29
(遺物出土状況)

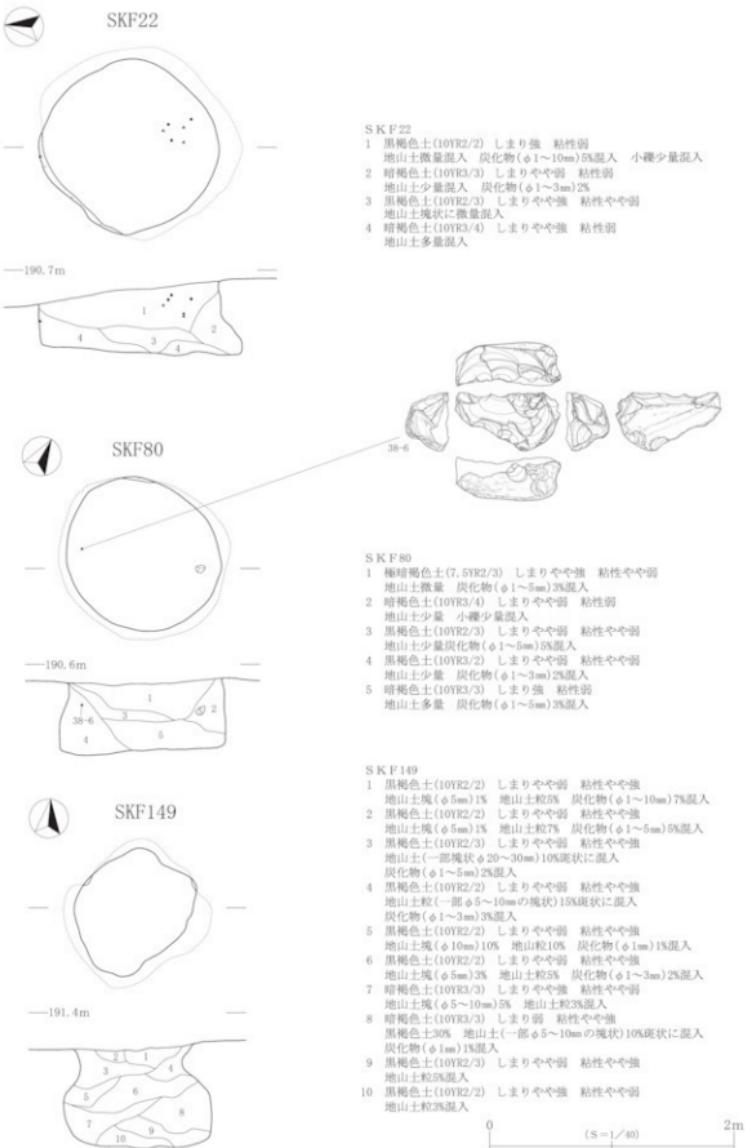
第9図 SI29竪穴住跡(3)



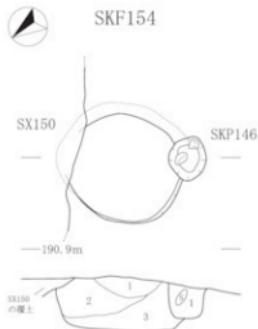
第10図 SI 29縦穴住居跡(4)



第11図 SKF23フラスコ状土坑

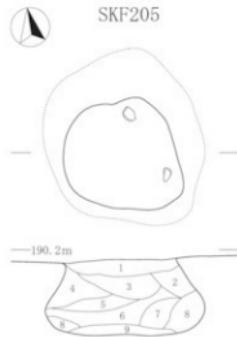


第12図 SKF22・80・149 フラスコ状土坑



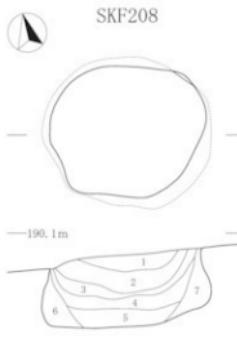
SK F 154

- 1 黒褐色土(10YR2/2) しまりやや強 粘性やや弱 地山土塊(φ5~20mm)5%混入
- 2 黒褐色土(10YR2/2) しまり強 粘性やや弱 地山土3%混入
- 3 單褐色土(10YR3/3) しまりやや強 粘性やや弱 地山土3% 地山土塊(φ5~10mm)5%混入



SK F 205

- 1 黒褐色土(10YR2/3) しまりやや弱 粘性やや弱 地山土(一部塊状5mm)5%炭化物(φ1~3mm)3% 小礫少量混入
- 2 黒褐色土(10YR2/3) しまり弱 粘性やや強 地山土4%炭化物(φ1~3mm)3% 小礫少量混入
- 3 單褐色土(10YR2/3) しまりやや弱 粘性やや強 單褐色土(10YR2/3)10% 地山土粒5% 炭化物(φ1~3mm)3%混入
- 4 黑褐色土(10YR2/2) しまりやや弱 粘性やや強 單褐色土(10YR2/3)20% 地山土塊(φ1~5mm)3% 地山土粒5%混入 炭化物(φ1~5mm)2%混入
- 5 單褐色土(10YR2/3) しまりやや弱 粘性やや強 黑褐色土(10YR2/3)10% 地山土粒5% 炭化物(φ1~3mm)1%混入
- 6 黑褐色土(10YR2/3) しまりやや弱 粘性やや弱 地山土粒5% 炭化物(φ1~3mm)2%混入
- 7 黑褐色土(10YR2/3) しまりやや強 粘性やや弱 地山上(一部斑状)10%混入 炭化物(φ1mm)1%混入
- 8 單褐色土(10YR4/4) しまり弱 粘性やや弱 單褐色土(10YR4/4)10% 地山土5% 地山土粒5%混入 炭化物(φ1~3mm)3%混入
- 9 單褐色土(10YR3/4) しまりやや弱 粘性やや弱 炭化物(φ1mm)1% 小礫少量混入

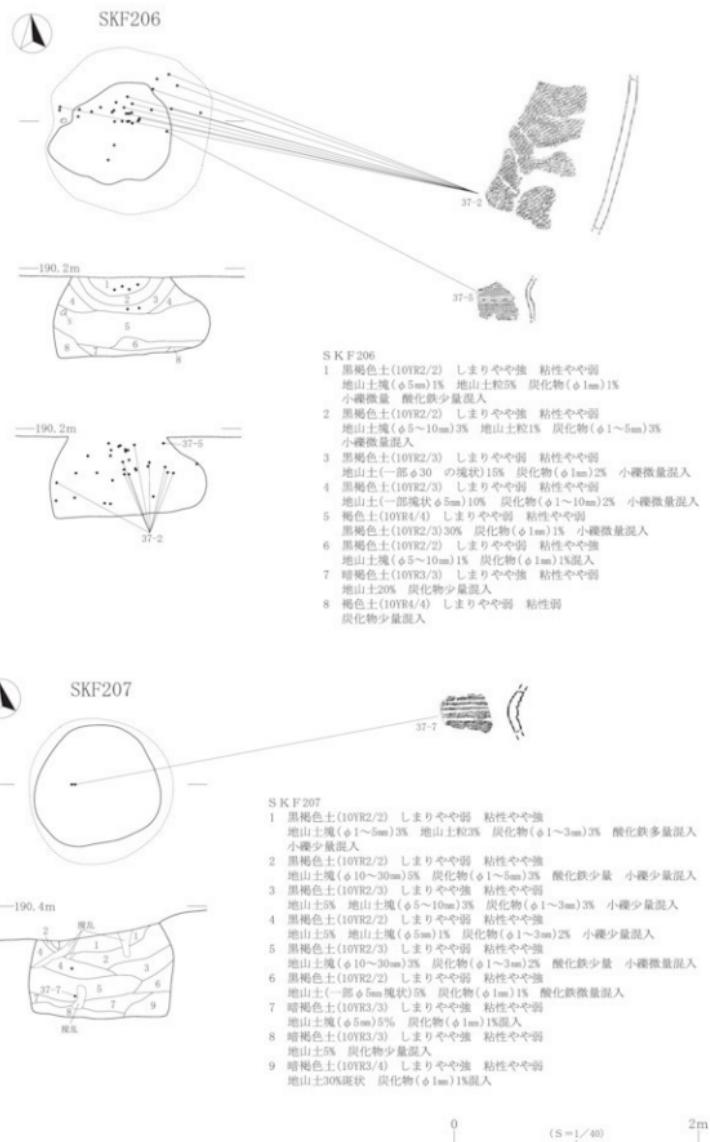


SK F 208

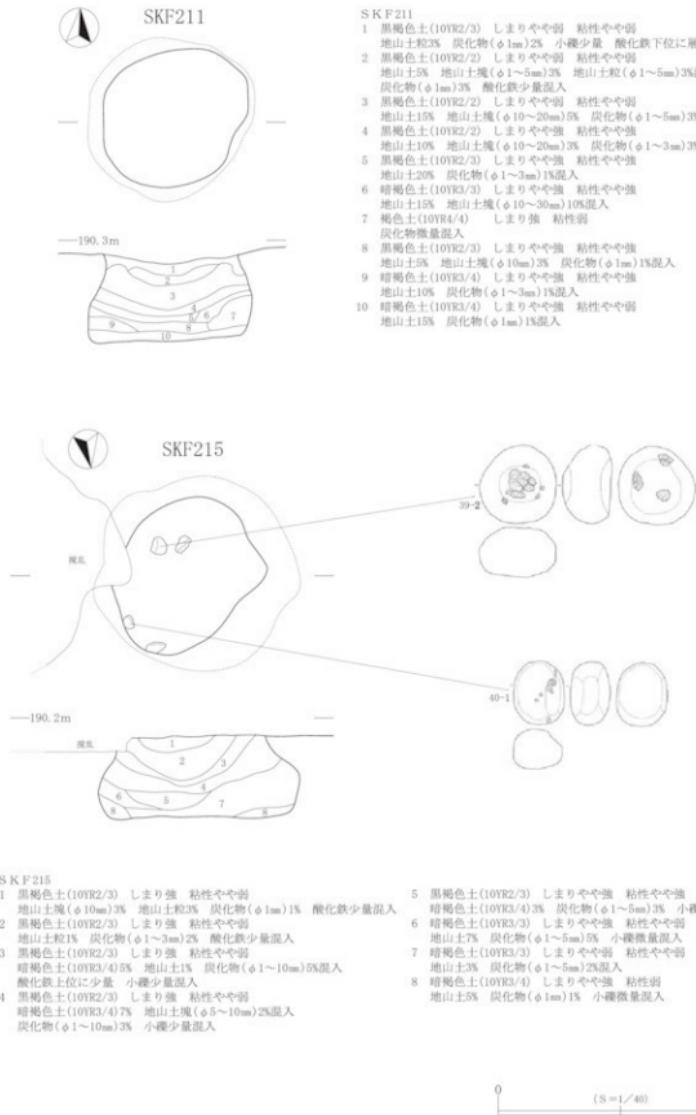
- 1 黒褐色土(10YR2/2) しまりやや強 粘性やや弱 黒褐色土(10YR2/3)15% 炭化物(φ1~5mm)3% 小礫少量混入
- 2 黒褐色土(10YR2/3) しまりやや強 粘性やや弱 單褐色土(10YR2/4)(一部塊状50mm)20% 小礫少量混入
- 3 黒褐色土(10YR2/3) しまりやや強 粘性やや弱 單褐色土(10YR2/4)15% 炭化物(φ1~10mm)1%混入
- 4 黑褐色土(10YR2/3) しまりやや強 粘性やや弱 單褐色土(10YR2/4)大きな塊状7% 炭化物(φ1~5mm)1%混入
- 5 單褐色土(10YR2/3) しまりやや強 粘性やや弱 地山粒(φ3~5mm)3% 炭化物(φ1mm)1%混入
- 6 黑褐色土(10YR2/3) しまりやや弱 粘性やや強 單褐色土(10YR2/4)30% 炭化物(φ1mm)1%混入
- 7 單褐色土(10YR2/4) しまり強 粘性弱 黑褐色土(10YR2/3)3% 炭化物(φ1mm)少量化入



第13図 SKF154・205・208 フラスコ状土坑



第14図 SKF206・207フラスコ状土坑



第15図 SKF211・215 フラスコ状土坑

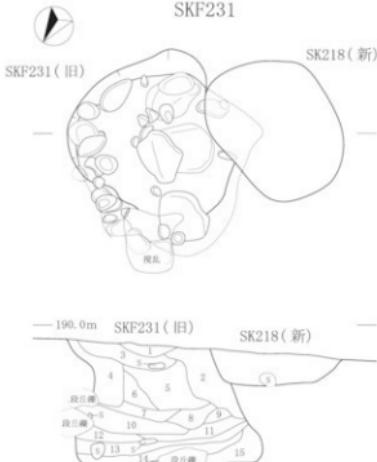
SKF219



SKF219

- 1 黒褐色土 (10YR2/2) しまりやや強 粘性やや弱
地山土粒少量 灰化物(φ1~3mm)3% 小礫少量混入
- 2 黒褐色土 (10YR2/2) しまりやや強 粘性やや弱
地山土(-一部φ5mmの塊状)5% 灰化物(φ1mm) 少量 小礫少量混入
- 3 黒褐色土 (10YR2/3) しまりやや弱 粘性やや弱
地山土(-一部塊状)40% 灰化物(φ1mm) 少量 小礫微量混入
- 4 灰褐色土 (10YR3/3) しまりやや強 粘性やや弱
地山土(5mm一部塊状) 灰化物(φ1~3mm)1% 小礫少量混入
- 5 黒褐色土 (10YR2/3) しまりやや弱 粘性やや強
地山土塊(φ5~10mm)2% 地山土粒3% 灰化物(φ1~5mm)2%混入
小礫少量混入
- 6 黒褐色土 (10YR2/3) しまりやや弱 粘性やや弱
地山土30% (一部塊状) 灰化物(φ1~3mm)3% 小礫微量混入
- 7 黒褐色土 (10YR2/2) しまりやや弱 粘性やや強
地山土10% 地山土壤(φ10~20mm)3% 灰化物(φ1~3mm) 少量混入
- 8 黒褐色土 (10YR2/3) しまりやや弱 粘性やや強
地山土(-一部φ10~30mmの塊状)40% 灰化物(φ1~5mm) 少量混入
- 9 黒褐色土 (10YR2/3) しまりやや強 粘性やや強
地山土3% 地山土壤(φ10mm)3% 灰化物(φ1~3mm) 少量混入

SKF231

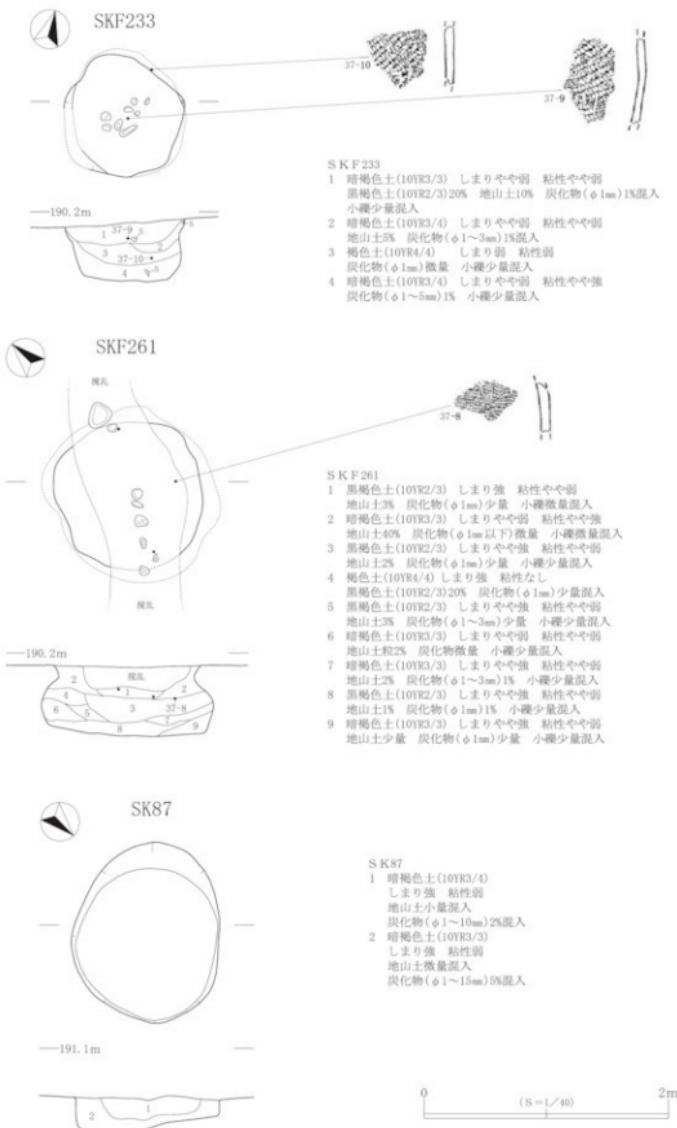


SKF231

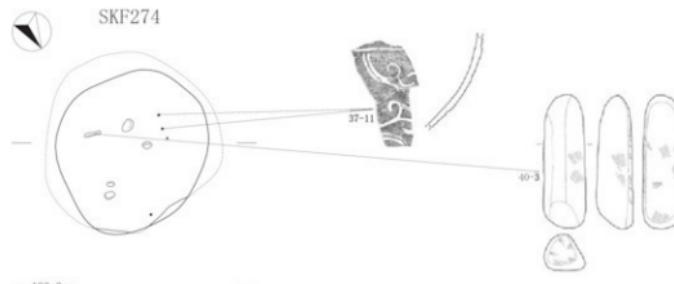
- 1 黒褐色土 (10YR2/3) しまりやや強 粘性やや弱
地山土2% 地山土壤(φ10mm)1% 灰化物少量 小礫微量混入
- 2 細色土 (10YR4/4) しまりやや弱 粘性やや弱
黒褐色土 (10YR2/3)30% 灰化物(φ1mm)微量 小礫微量混入
- 3 黒褐色土 (10YR2/2) しまりやや弱 粘性やや弱
地山土壤(φ10~20mm)3% 地山土壤3% 灰化物(φ1~5mm)2%混入
小礫微量混入
- 4 黒褐色土 (10YR2/3) しまりやや弱 粘性やや強
地山土壤(φ1mm) 微量 小礫微量混入
- 5 黑褐色土 (10YR2/3) しまりやや弱 粘性やや弱
地山土壤(φ5~10mm)1% 地山土壤3% 灰化物(φ1~5mm)2%混入
小礫微量混入
- 6 黑褐色土 (10YR2/3) しまりやや強 粘性やや弱
地山土壤(φ5~10mm)5% 地山土壤3% 灰化物(φ1mm)1%混入
小礫微量混入
- 7 黑褐色土 (10YR2/2) しまりやや弱 粘性やや強
地山土壤(φ5~10mm)3% 地山土壤3% 灰化物(φ1~3mm)2%混入
小礫微量混入
- 8 細色土 (10YR4/4) しまりやや強 粘性やや強
黑褐色土 (10YR2/2)30% 灰化物(φ1mm)1% 小礫微量混入
- 9 黑褐色土 (10YR2/3) しまりやや強 粘性やや強
地山土壤(φ1mm)2% 灰化物(φ1mm)1%混入
- 10 黑褐色土 (10YR2/3) しまりやや強 粘性やや強
地山土壤(φ10~20mm)2% 地山土壤3% 灰化物(φ1mm以下) 少量混入
- 11 黑褐色土 (10YR2/3) しまりやや強 粘性やや強
地山土壤(-一部φ20mmの塊状)7% 灰化物(φ1mm)1% 小礫微量混入
- 12 黑褐色土 (10YR2/3) しまりやや弱 粘性やや強
地山土壤(φ30mm)1% 地山土壤3% 灰化物(φ1mm)1% 小礫少量混入
- 13 黑褐色土 (10YR2/3) しまりやや弱 粘性やや弱
黑褐色土 (10YR2/2)20% 地山土壤3% 灰化物(φ1mm)微量混入
- 14 細色土 (10YR3/3) しまりやや強 粘性やや強
地山土壤(φ1mm)微量混入
- 15 細色土 (10YR3/4) しまりやや強 粘性やや弱
地山土壤20% 灰化物(φ1mm)1% 小礫微量混入

0 (S=1/40) 2m

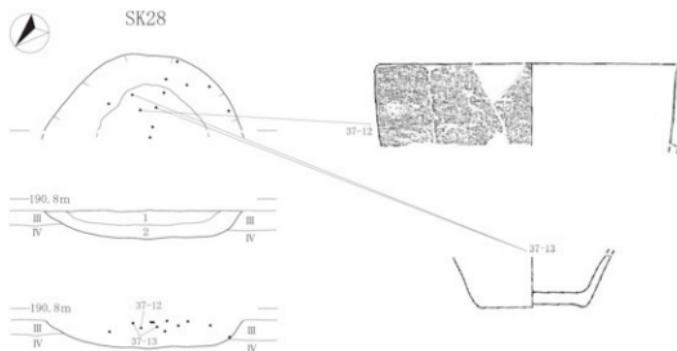
第16図 SKF219・231フラスコ状土坑



第17図 SKF233・261フラスコ状土坑 SK87土坑



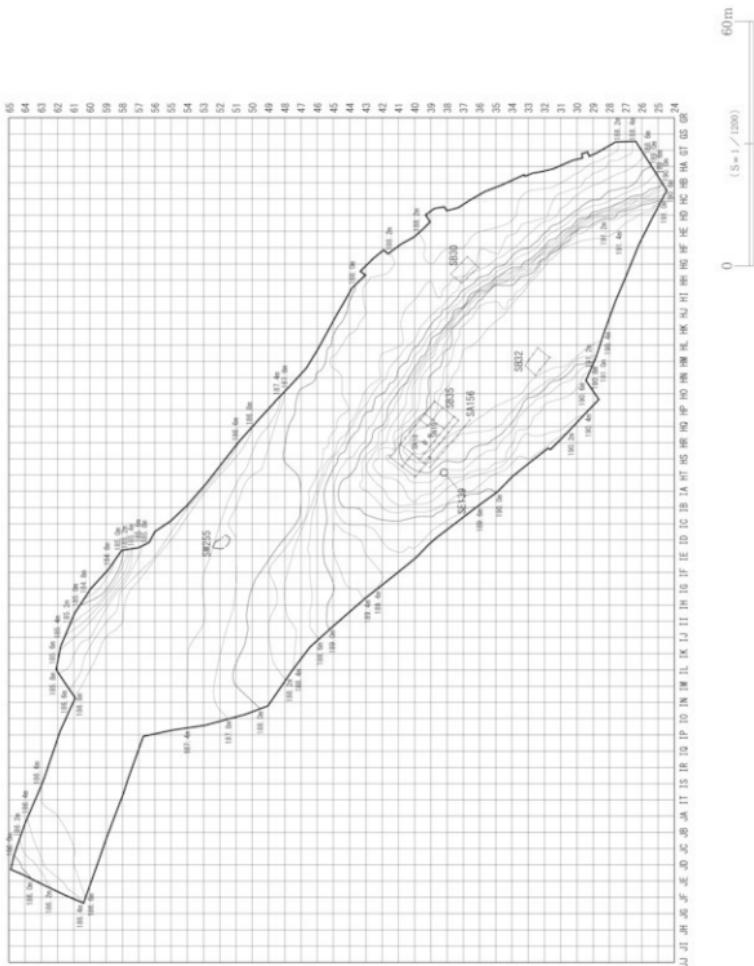
- SKF274
- 1 黒褐色土(10YR2/3) しまりやや強 粘性やや弱
地山土塊(φ5~10mm)2% 地山土粒(φ1mm以下)3%混入
炭化物(φ1~5mm)3% 小礫少散混入
 - 2 黒褐色土(10YR2/3) しまりやや強 粘性弱
地山土5% 地山土粒(φ1~3mm)1% 炭化物(φ1mm)微量
小礫少量混入
 - 3 黒褐色土(10YR2/3) しまりやや強 粘性弱
暗褐色土(10YR3/3)30% 地山土粒3% 炭化物(φ1~5mm)3%混入
小礫少量混入
 - 4 暗褐色土(10YR3/4) しまりやや強 粘性やや弱
地山土粒20% 炭化物(φ1~3mm)1% 小礫微量混入
 - 5 黒褐色土(10YR2/2) しまりやや強 粘性やや弱



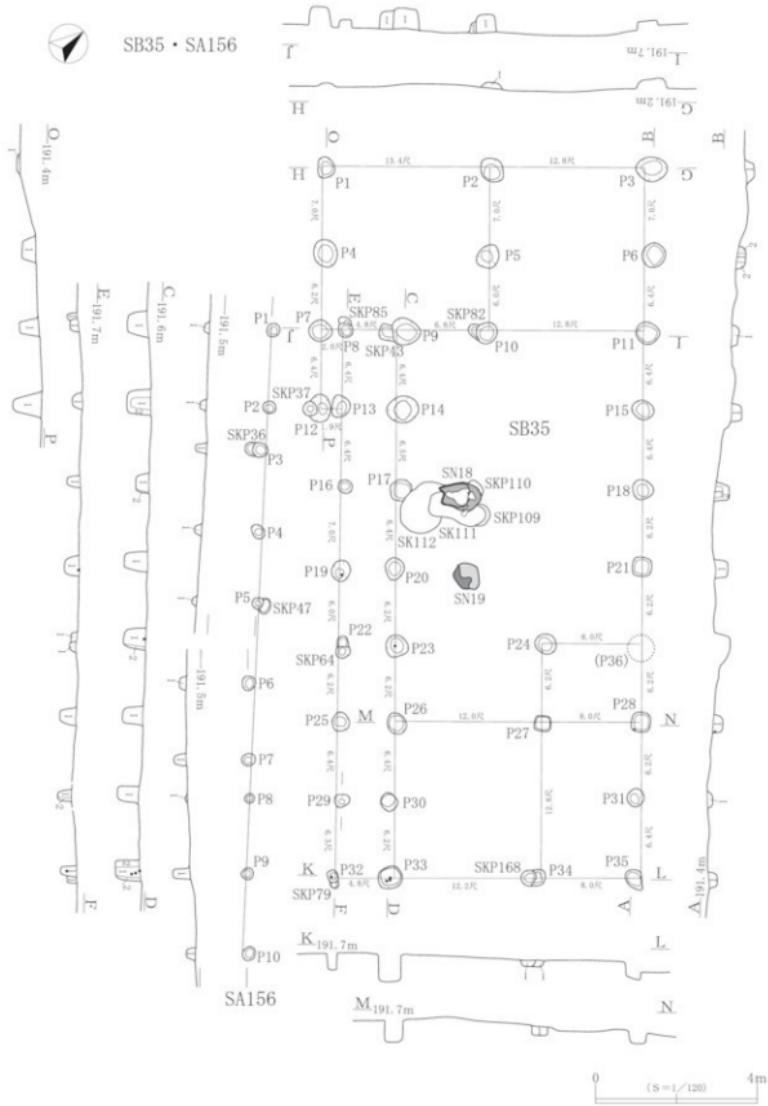
- SK28
- 1 黒褐色土(10YR2/3)
しまりやや強 粘性やや弱
暗褐色土(10YR3/4)30%混入
地山土塊(φ5~10mm)3% 地山土粒3%混入
炭化物(φ1~3mm)3%混入
 - 2 暗褐色土(10YR3/4)
しまりやや強 粘性やや強
地山土30% 地山土塊(φ5~30mm)混入
炭化物(φ1~5mm)3%混入



第18図 SKF274 フラスコ状土坑 SK28 土坑



第19図 遺構配置図（近世）



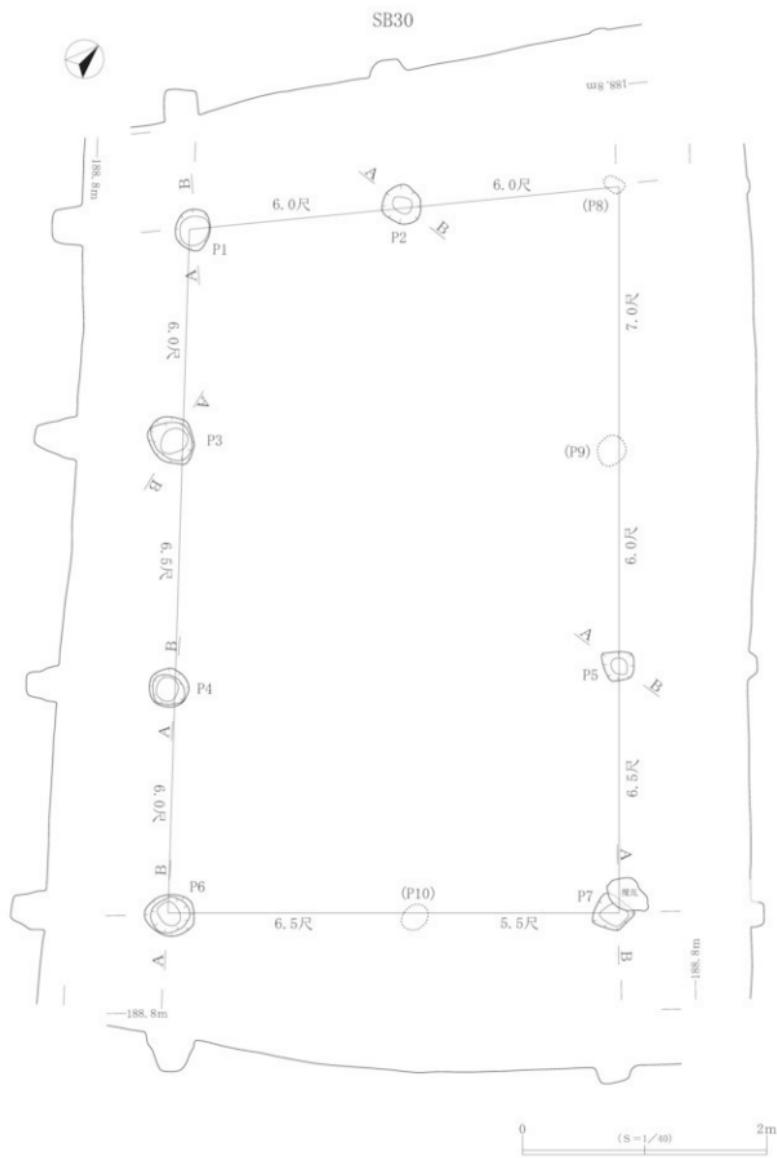
第20図 S B35掘立柱建物跡 S A156柱穴列

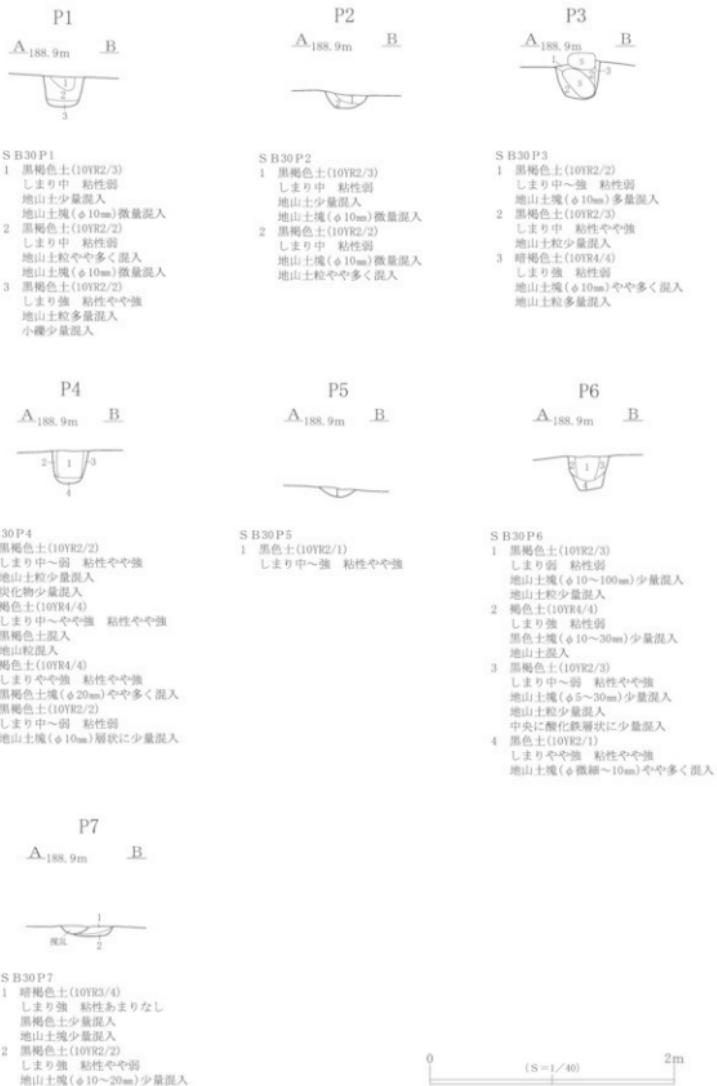
S B35

P 1 1	黒褐色土(10YR2/3)	しまり強 粘性弱 地山土少量混入 上部大半剖平
P 2 1	暗褐色土(10YR3/3)	しまりやや弱 粘性やや弱 地山土微量混入
P 3 1	黒褐色土(10YR3/2)	しまり強 粘性弱 地山土塊(φ 10~50mm)15% 地山土粒1%混入
P 4 1	黒褐色土(10YR2/3)	しまりやや弱 粘性やや強 地山土塊(φ 5~7mm)2% 地山土粒7%混入
P 5 1	黒褐色土～暗褐色土(10YR3/2~3/3)	しまりやや強 粘性やや弱 地山土塊(φ 2~6mm)2% 地山土粒1%混入
P 6 1	黒褐色土(10YR2/3)	しまり強 粘性やや弱 地山土塊(φ 4~6mm)7% 地山土粒1%混入 柱痕跡
2	にじ、黃褐色土(10YR4/3)	しまり強 粘性なし 地山土粒2%混入 根固め
P 7 1	黒褐色土(10YR3/2)	しまりやや強 粘性弱 地山土塊(φ 2~4mm)10% 地山土粒5%混入 腐化物(φ 1mm)1%混入
P 8 1	黒褐色土(10YR2/2)	しまりやや弱 粘性弱 地山土塊(φ 3~6mm)10% 地山土粒1%混入 腐化物(φ 1mm)1%混入
P 9 1	黒褐色土(10YR3/2)	しまりやや弱 粘性弱 地山土塊(φ 1mm)1% 地山土粒2%混入
P10 1	暗褐色土(10YR3/3)	しまりやや強 粘性弱 地山土塊(φ 1~2mm)5% 地山土粒2% 腐化物(φ 1mm)1%混入
P11 1	暗褐色土(10YR3/4)	しまりやや強 粘性弱 地山土塊(φ 2~3mm)2% 地山土粒7%混入
P12 1	黒褐色土(10YR3/2)	しまりやや弱 粘性弱 地山土塊(φ 10~20mm)30% 地山土粒2%混入
P13 1	暗褐色土(10YR3/3)	しまりやや強 粘性弱 地山土塊(φ 2~3mm)10% 地山土粒2% 腐化物(φ 1~2mm)1%混入
P14 1	黒褐色土(10YR2/3)	しまり弱～やや強 粘性弱 地山土塊(φ 10~15mm)1% 地山土粒1%混入 柱痕跡
2	にじ、黃褐色土(10YR4/3)	しまり強 粘性弱 地山土塊(φ 10mm)2%混入 根固め
P15 1	黒褐色土(10YR2/3)	しまりやや強 粘性強 地山土塊(φ 1~2mm)1% 地山土粒1%混入 織が多い
P16 1	暗褐色土(10YR3/3)	しまり強 粘性弱 地山土塊(φ 2mm)1% 地山土粒2%混入
P17 1	黒褐色土(10YR2/3)	しまり弱 粘性弱 地山土塊(φ 2~3mm)1%混入 地山土粒1%混入
2	黒褐色土～暗褐色土(10YR3/2~3/3)	しまりやや強 粘性弱 地山土塊(φ 10~20mm)10% 地山土粒1%混入
P18 1	黒褐色土(10YR2/3)	しまりやや強 粘性弱 地山土塊(φ 2~3mm)2% 地山土粒1% 腐化物(φ 1mm)1%混入
2	暗褐色土(10YR3/4)	しまりやや強 粘性弱 地山土塊(φ 10~30mm)10% 地山土粒5% 腐化物(φ 2mm)2%混入
P19 1	黒褐色土(10YR3/2)	しまりやや強 粘性弱 地山土塊(φ 1~2mm)5% 地山土粒5%混入
P20 1	黒褐色土(10YR2/3)	しまりやや弱 粘性弱 地山土塊(φ 1~3mm)5% 地山土粒2% 腐化物(φ 1~2mm)1%混入
P21 1	黒褐色土(10YR3/2)	しまりやや強 粘性強 地山土塊(φ 1~50mm)15% 地山土粒1% 腐化物(φ 1mm)1%混入
P22 1	黒褐色土(10YR3/2)	しまりやや弱 粘性弱 地山土塊(φ 2~4mm)5% 地山土粒2%混入
P23 1	暗褐色土(10YR3/2)	しまりやや弱 粘性弱 地山土塊(φ 1~2mm)2% 地山土粒2%混入
2	暗褐色土(10YR3/4)	しまり強 粘性弱 地山土塊(φ 20~30mm)20% 地山土粒2%混入
P24 1	黒褐色土(10YR2/2)	しまりやや強 粘性弱 地山土塊(φ 1~2mm)5% 地山土粒5%混入
P25 1	黒褐色土(10YR2/3)	しまりやや強 粘性弱 地山土塊(φ 1~2mm)5% 地山土粒1% 腐化物(φ 1~2mm)1%混入 織が多い
P26 1	黒褐色土(10YR2/3)	しまりやや弱 粘性弱 地山土塊(φ 2~4mm)3% 地山土粒1%混入
P27 1	黒褐色土(10YR3/1)	しまりやや弱 粘性弱 地山土塊(φ 5~7mm)10% 地山土粒5%混入
P28 1	黒褐色土(10YR2/2)	しまりやや弱 粘性弱 地山土塊(φ 1~5mm)5% 地山土粒2%混入
P29 1	黒褐色土(10YR2/3)	しまり強 粘性弱 地山土塊(φ 2~5mm)2% 地山土粒1%混入 柱痕跡
2	灰黃褐色土(10YR4/2)	しまりやや強 粘性弱 地山土塊(φ 2~3mm)2% 地山土粒20%混入 根固め
P30 1	黒褐色土(10YR2/3)	しまり弱 粘性弱 地山土塊(φ 2~5mm)5% 腐化物(φ 1mm)1%混入
P31 1	黑色土(10YR2/1)	しまりやや強 粘性弱 地山土塊(φ 2~10mm)7% 地山土粒2% 腐化物(φ 1mm)1%混入
2	灰黃褐色土(10YR4/2)	しまり強 粘性弱 地山土塊(φ 3~5mm)7% 地山土粒1%混入
P32 1	黑褐色土(10YR3/2)	しまりやや強 粘性弱 地山土塊(φ 2~20mm)5% 地山土粒2%混入
P33 1	黒褐色土(10YR2/2)	しまりやや弱 粘性弱 地山土塊(φ 1~3mm)5% 地山土粒7% 腐化物(φ 1mm)1%混入
2	暗褐色土(10YR3/3)	しまりやや弱 粘性弱 地山土塊(φ 2~3mm)25%混入
P34 1	暗褐色土(10YR3/2)	しまり弱 粘性弱 地山土塊3%混入 腐化物(φ 2mm)1%混入
P35 1	黒褐色土(10YR2/3)	しまりやや弱 粘性弱 地山土塊(φ 5~20mm)15% 地山土粒2%混入

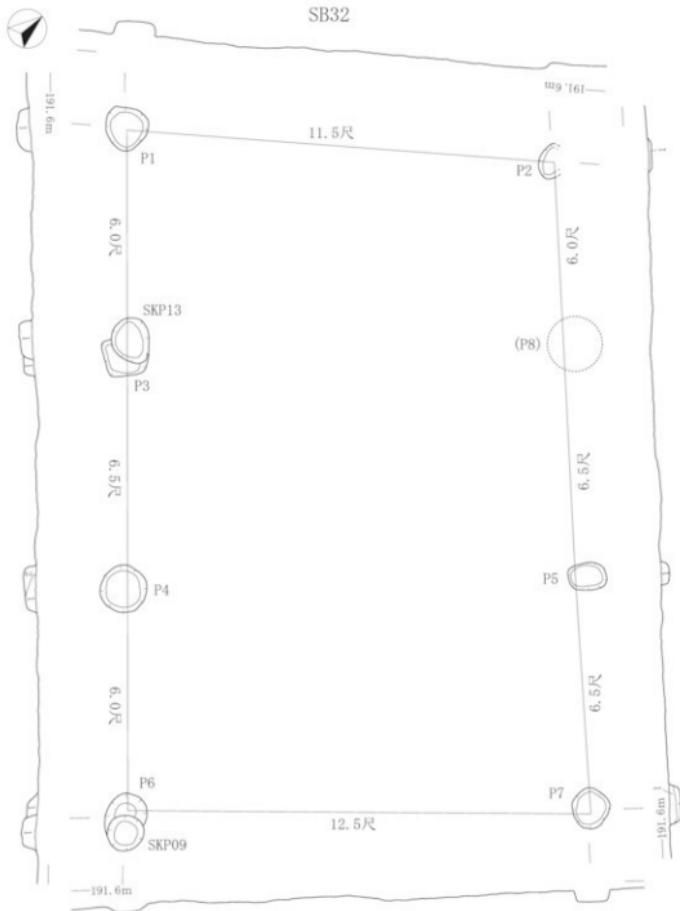
S A156

P 1 1	黒褐色土(10YR2/3)	しまりやや弱 粘性やや弱 地山土塊(φ 1mm)1% 地山土粒1%混入
P 2 1	黒褐色土(10YR3/2)	しまり弱 粘性弱 地山土塊(φ 1mm)1% 地山土粒2%混入
P 3 1	暗褐色土(10YR3/3)	しまり強 粘性弱 地山土塊(φ 1mm)1% 地山土粒1%混入
P 4 1	褐色土(10YR4/4)	しまり弱 粘性弱 地山土塊(φ 1mm)1% 地山土粒1%混入
P 5 1	黒褐色土(10YR3/2)	しまりやや強 粘性弱 地山土塊(φ 1~2mm)1% 地山土粒3% 腐化物(φ 1mm)混入
P 6 1	灰黃褐色土(10YR4/2)	しまり強 粘性やや弱 地山土塊(φ 1~2mm)1% 地山土粒1%混入
P 7 1	黒褐色土(10YR2/3)	しまりやや弱～やや強 粘性弱 地山土塊(φ 2~3mm)10% 地山土粒5%混入
P 8 1	灰黃褐色土(10YR4/2)	しまり強 粘性やや強 地山土塊(φ 1mm)10% 地山土粒10%混入
P 9 1	黒褐色土(10YR2/2)	しまりやや弱 粘性やや弱 地山土塊(φ 2~3mm)10% 地山土粒15%混入
P10 1	黒褐色土(10YR3/2)	しまり強 粘性弱地山土塊(φ 5~6mm)10% 地山土粒1%混入





第22図 S B30据立柱建物跡柱穴

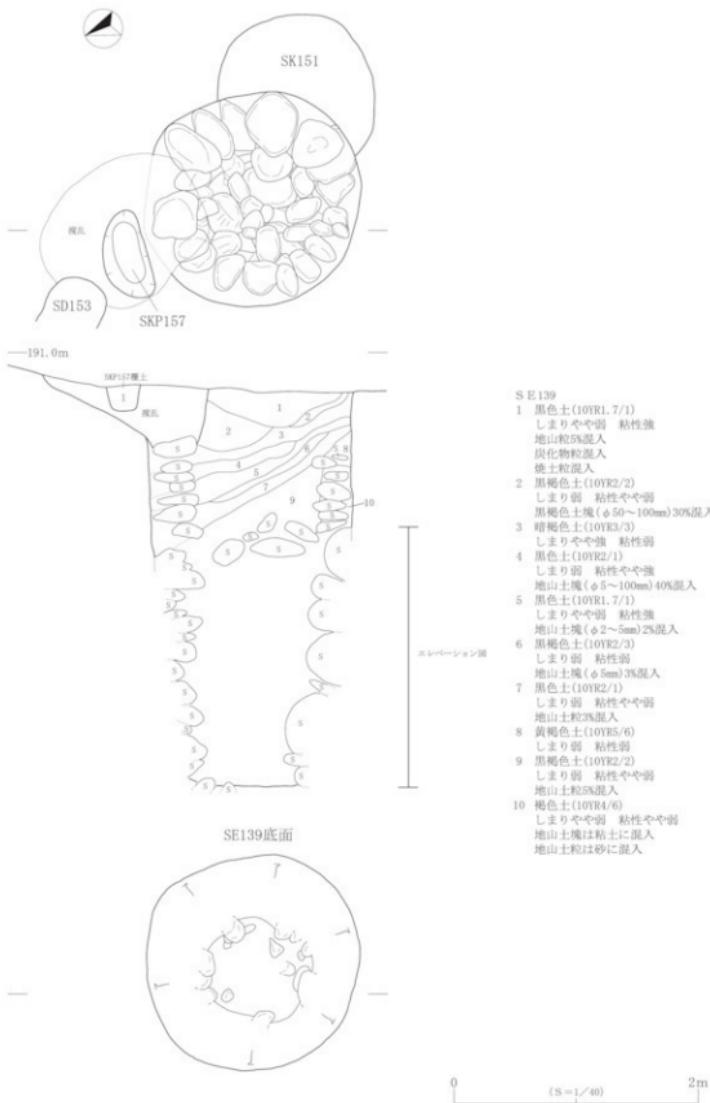


- S B32
- P1 1 黒褐色土(10YR2/2) しまりやや弱 粘性やや強地山土粒($\phi 1\sim 3mm$)3%混入
- P2 1 暗褐色土(10YR3/4) しまり弱 粘性なし 黑褐色土(10YR2/3)10%混入 酸化鉄1%混入
- P3 1 黑褐色土(10YR2/3) しまりやや弱 粘性やや強地山土塊($\phi 5\sim 10mm$)1%混入
- P4 1 暗褐色土(10YR3/3) しまり強 粘性弱 地山土粒5% 炭化物($\phi 1\sim 5mm$)1%混入
- 2 黑褐色土(10YR2/3) しまり強 粘性強 地山土粒($\phi 0.5\sim 1mm$)1%混入
- P5 1 暗褐色土(10YR3/4) しまり強 粘性なし 黑褐色土(10YR2/3)15% 炭化物($\phi 1mm$ 以下)微量混入
酸化鉄下面に層状に10%混入
- P6 1 暗褐色土(10YR2/3) しまりやや弱 粘性強 地山土30%混入
- P7 1 黑褐色土(10YR2/3) しまりやや弱 粘性やや強 地山土粒3%混入
- 2 暗褐色土(10YR3/3) しまり弱 粘性やや弱 地山土5%混入

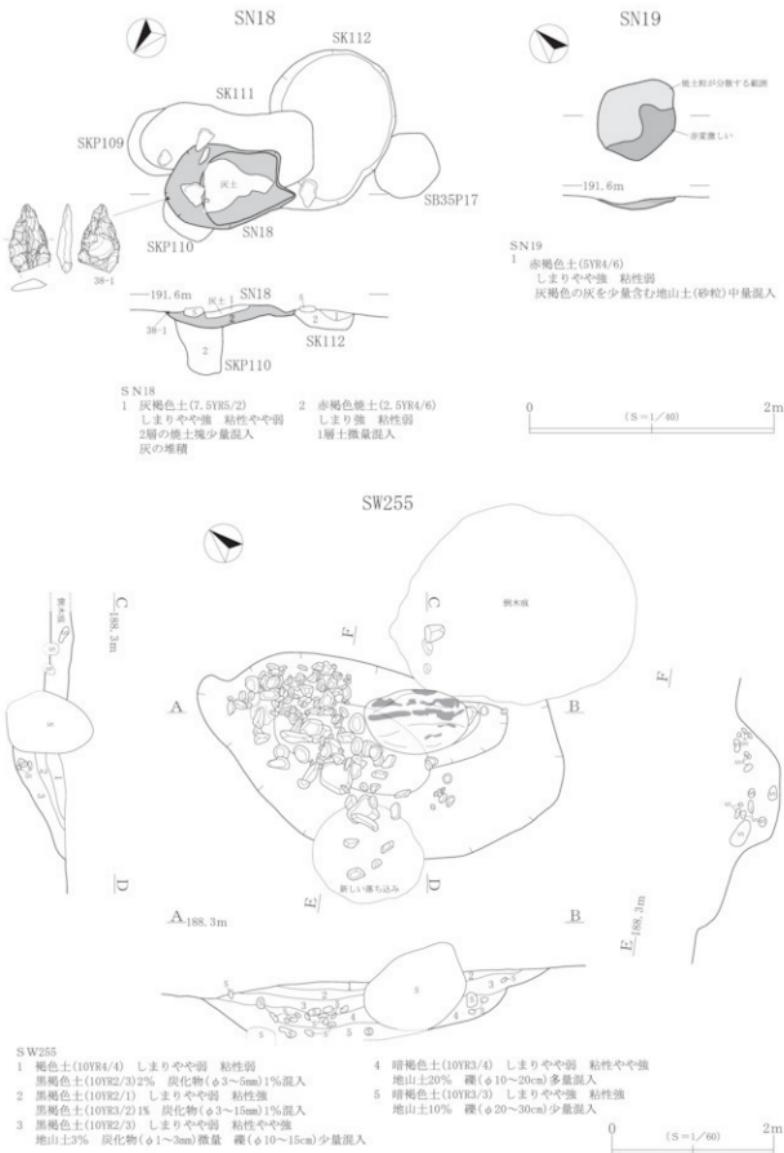
0 (S = 1/40) 2m

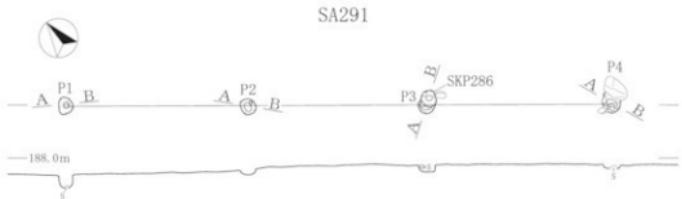
第23図 S B32掘立柱建物跡

SE139

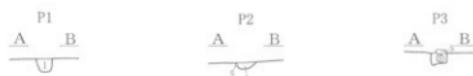


第24図 SE139井戸跡





S A291
 P1 1 黒褐色土(10YR3/1) しまり強 粘性弱
 地山土塊(φ2~4mm)2% 地山土粒3% 炭化物(φ1mm以下)微量混入
 P2 1 黒褐色土(10YR2/1) しまりやや弱 粘性やや強
 地山土粒5%混入
 P3 1 黒褐色土(10YR2/3) しまりやや強 粘性強
 地山土粒5%混入
 P4 1 黒褐色土(10YR2/2) しまりやや弱 粘性やや強
 地山土塊(φ1~2mm)7% 地山土粒2% 炭化物(φ1mm以下)1%混入
 段丘縫混入

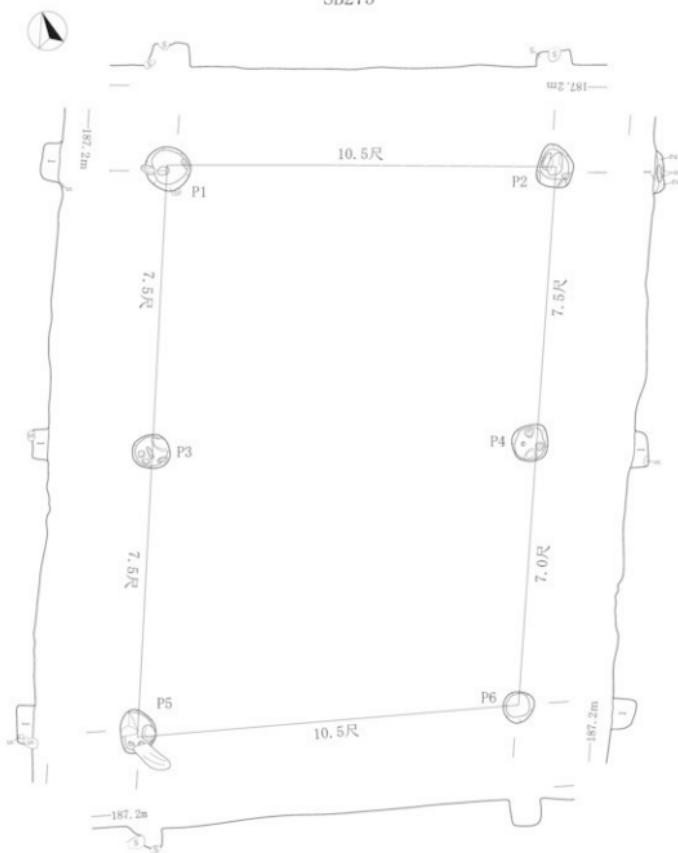


S A292
 P1 1 黒褐色土(10YR2/2) しまり強 粘性弱
 地山土塊1% 酸化鉄少量混入
 P2 1 黒褐色土(10YR2/3) しまりやや弱 粘性弱
 地山土塊(φ1~5mm)3% 地山土粒2% 炭化物(φ1mm以下)5%混入
 P3 1 黒褐色土(10YR3/1) しまり弱 粘性弱
 地山土塊(φ2mm)5% 地山土粒1% 酸化鉄少量混入



第26図 S A291・292柱穴列

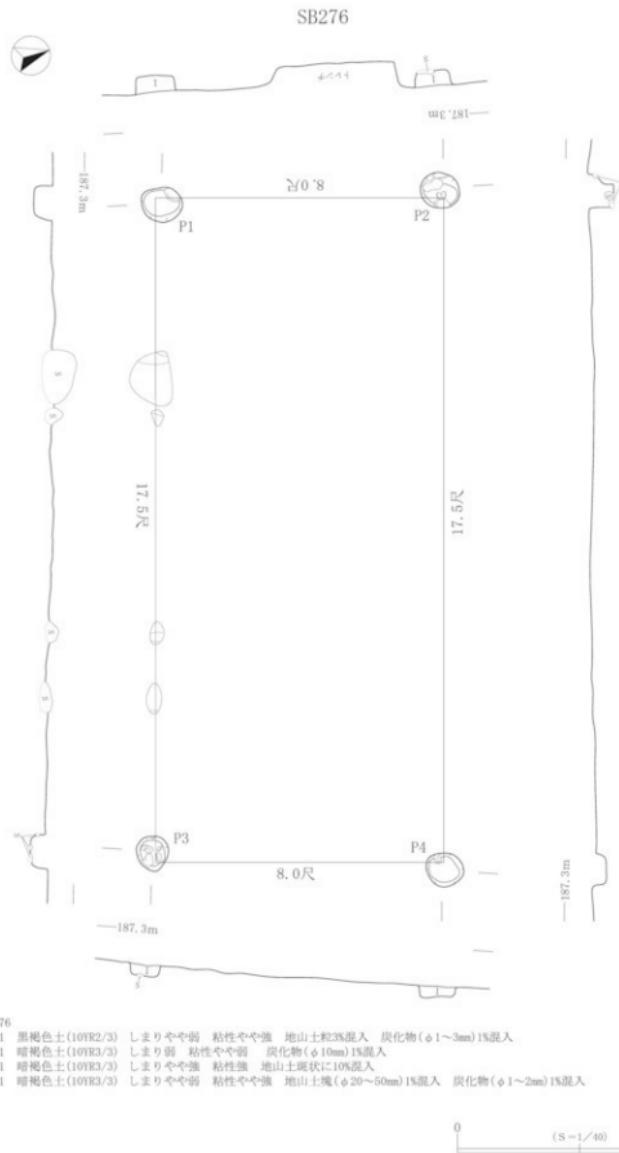
SB275



- S B275
 P1 1 黒褐色土(10YR2/2) しまり弱 粘性強 地山土塊(Φ40mm)1%混入 塩化物(Φ1~2mm)1%混入
 P2 1 黒褐色土(10YR2/3) しまりやや弱 粘性やや強 地山土粒5%混入
 2 棕色土(10YR4/3) しまりやや弱 粘性弱 黑褐色土(10YR2/3)3%底状に混入
 P3 1 黑褐色土(10YR2/3) しまりやや弱 粘性やや強 地山土粒3%混入
 P4 1 厚褐色土(10YR3/3) しまりやや弱 粘性やや弱 地山土10%混入 塩化物(Φ3mm)1%混入
 P5 1 黑褐色土(10YR2/3) しまりやや弱 粘性やや弱 地山土粒20%混入
 P6 1 黑褐色土(10YR2/3) しまり強 粘性強 地山土粒20%混入

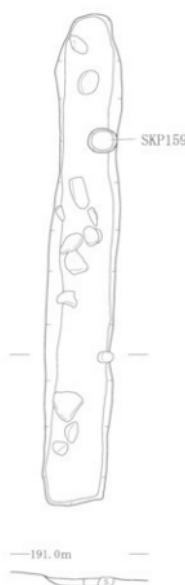


第27図 S B275掘立柱建物跡



第28図 SB276掘立柱建物跡

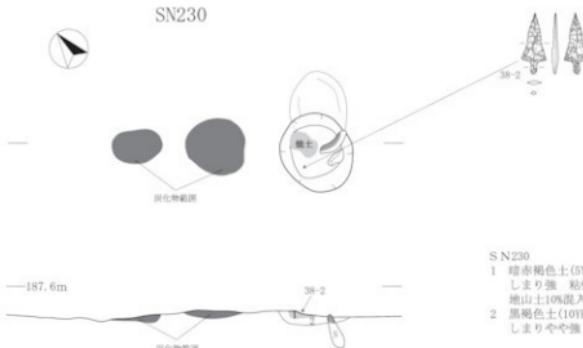
SD153



S D 153

- 1 黒褐色土(10YR3/2)
しまり強 粘性弱
地山上土微量混入
灰化物(φ1~5mm)2%に混入

SN230

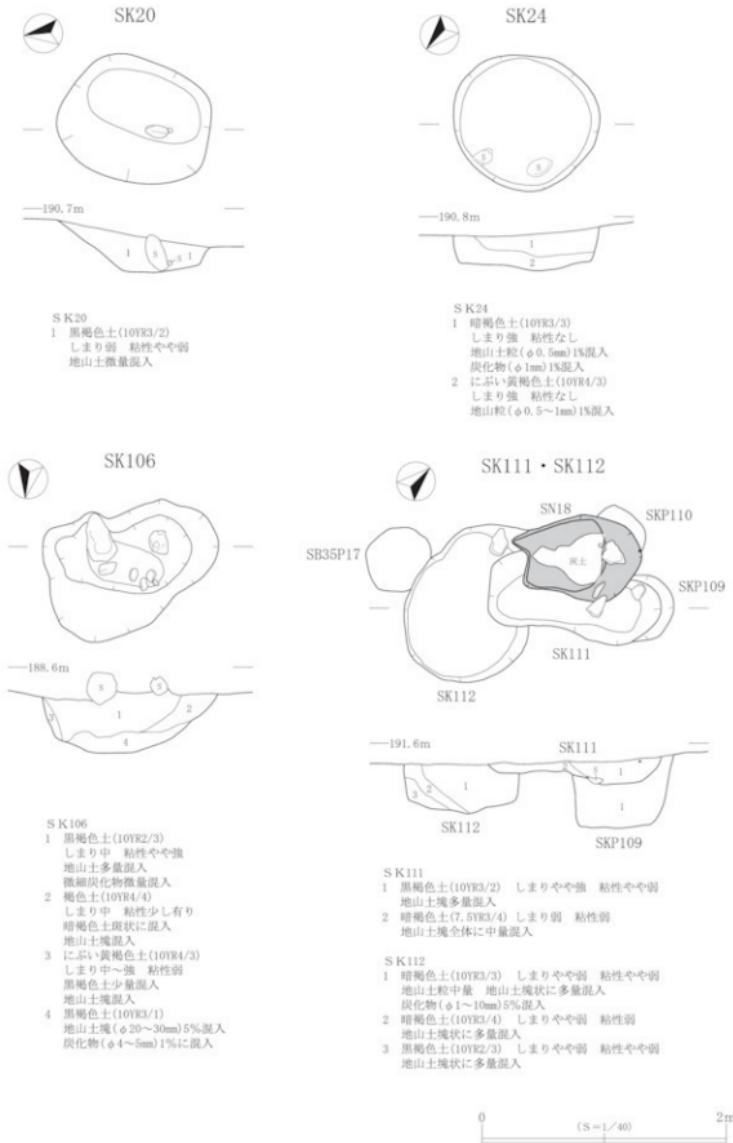


S N 230

- 1 暗赤褐色土(5YR3/6)
しまり強 粘性やや弱
地山上土10%混入
- 2 黒褐色土(10YR2/3)
しまりやや強 粘性やや強

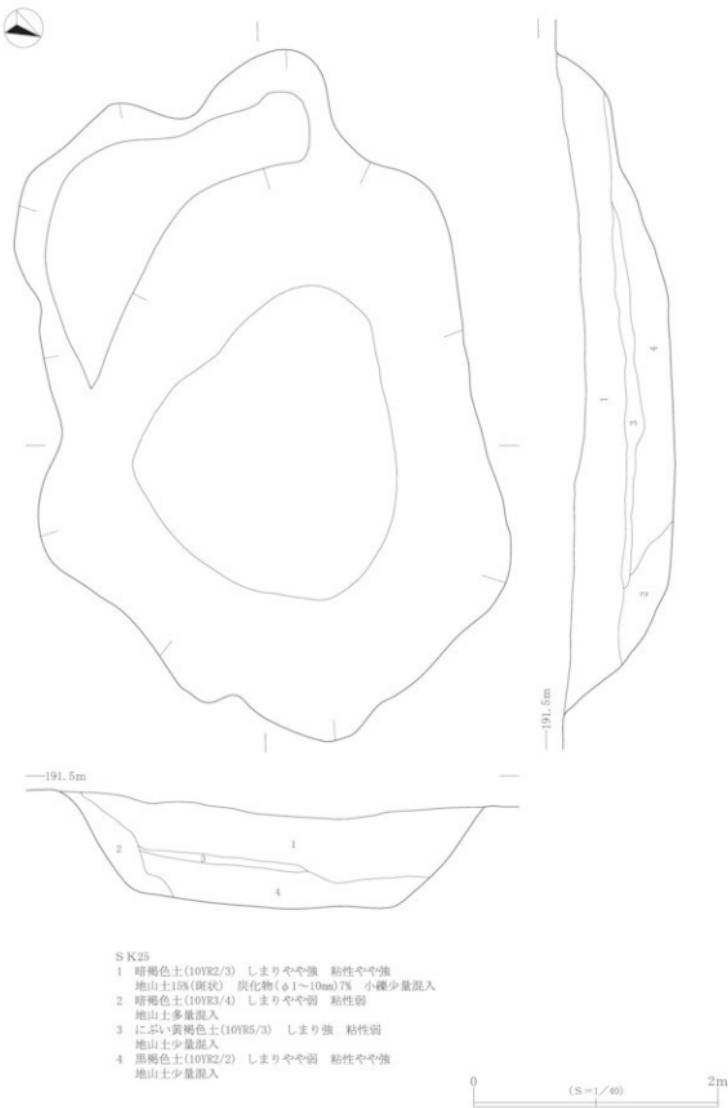


第29図 S D 153溝跡 S N 230焼土遺構

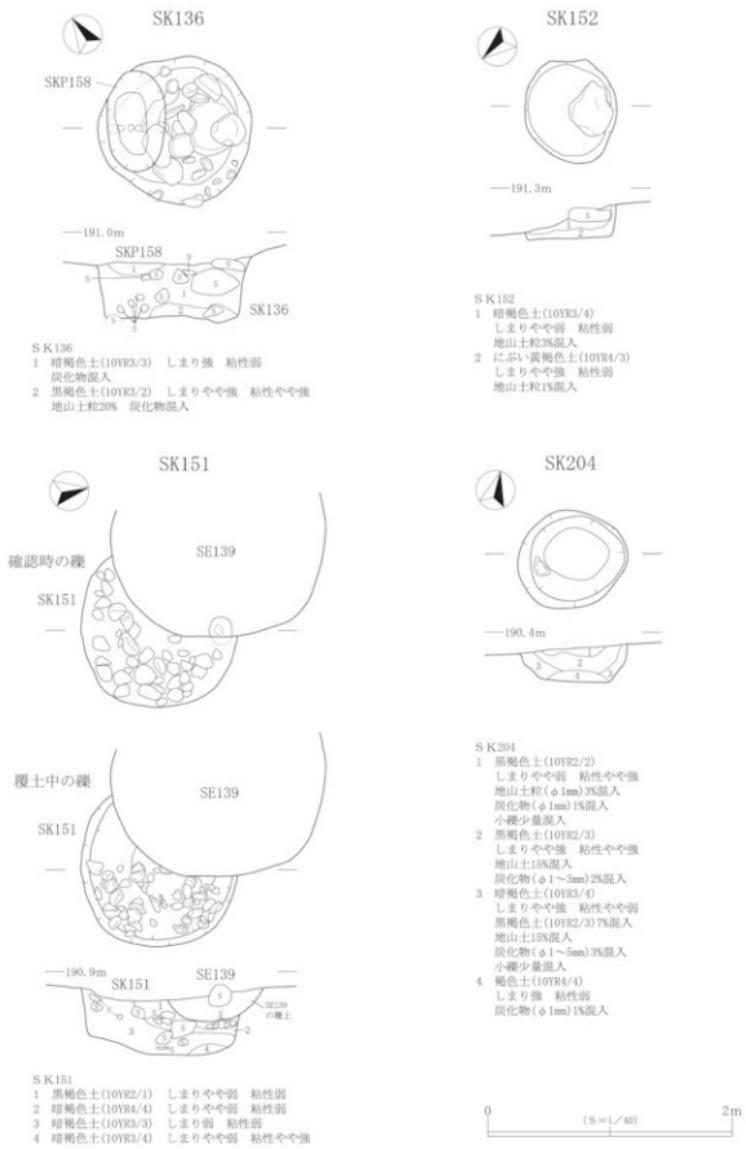


第30図 SK20・24・106・111・112土坑

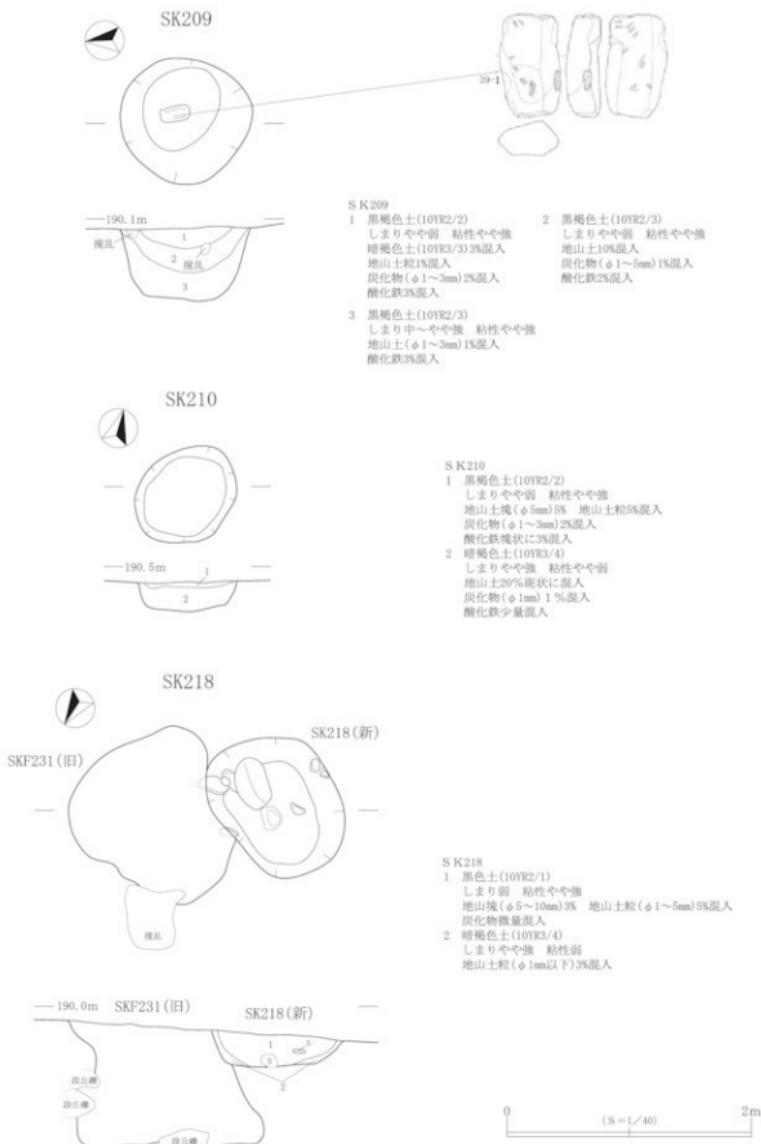
SK25



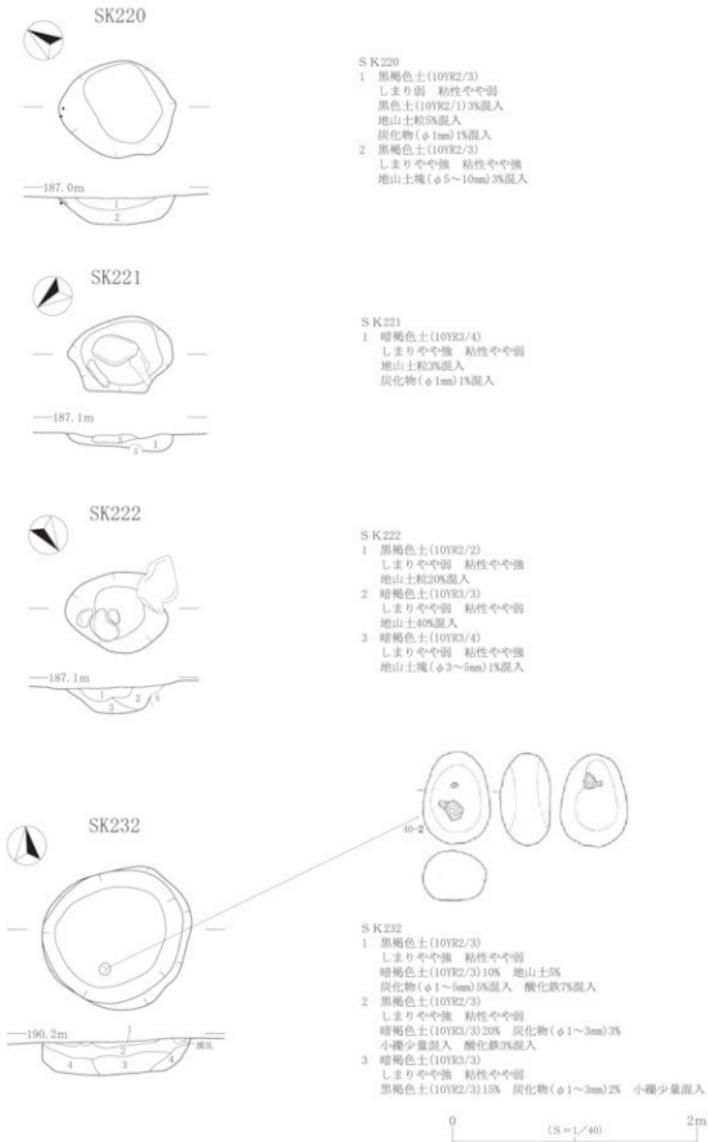
第31図 SK25土坑



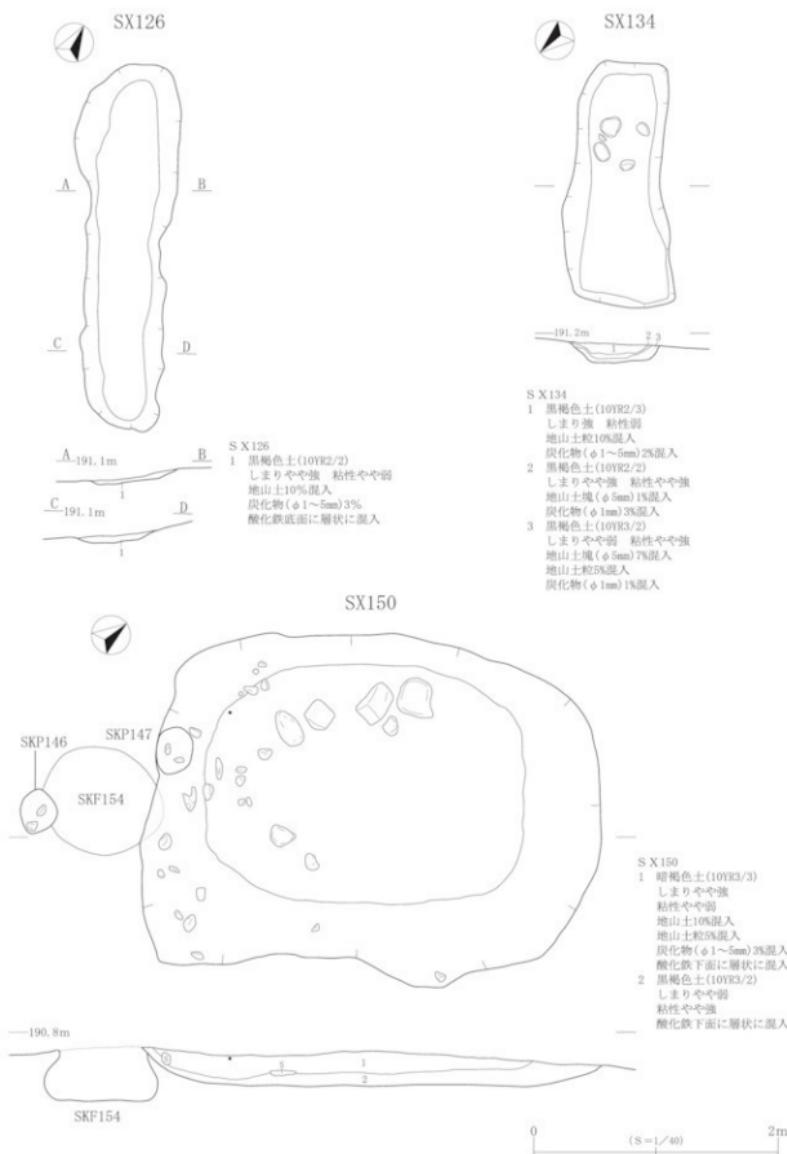
第32図 SK136・151・152・204土坑



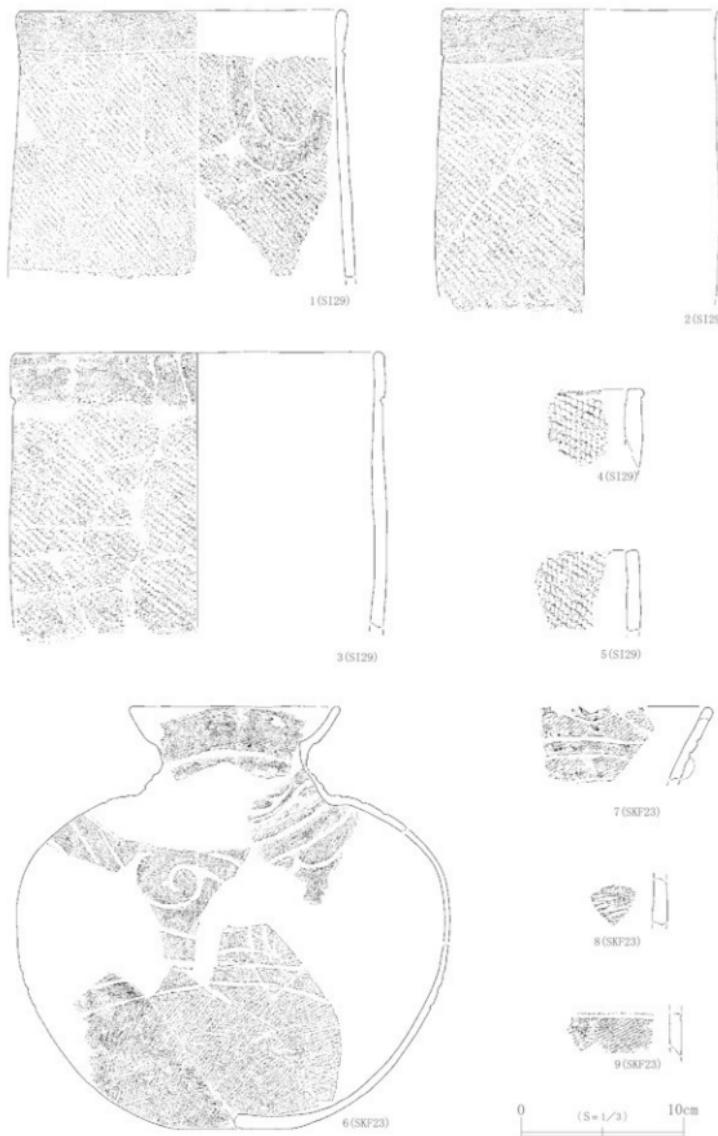
第33図 SK209・210・218土坑



第34図 S K220・221・222・232土坑



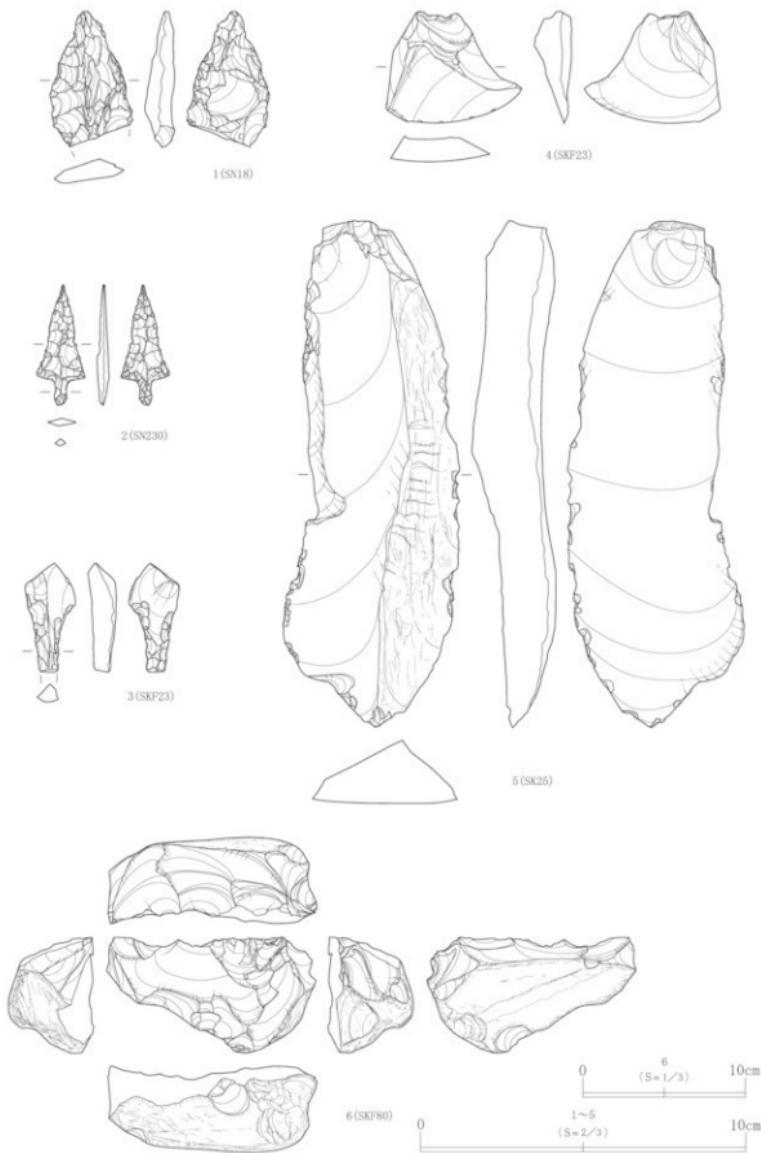
第35図 SX126・134・150性格不明遺構



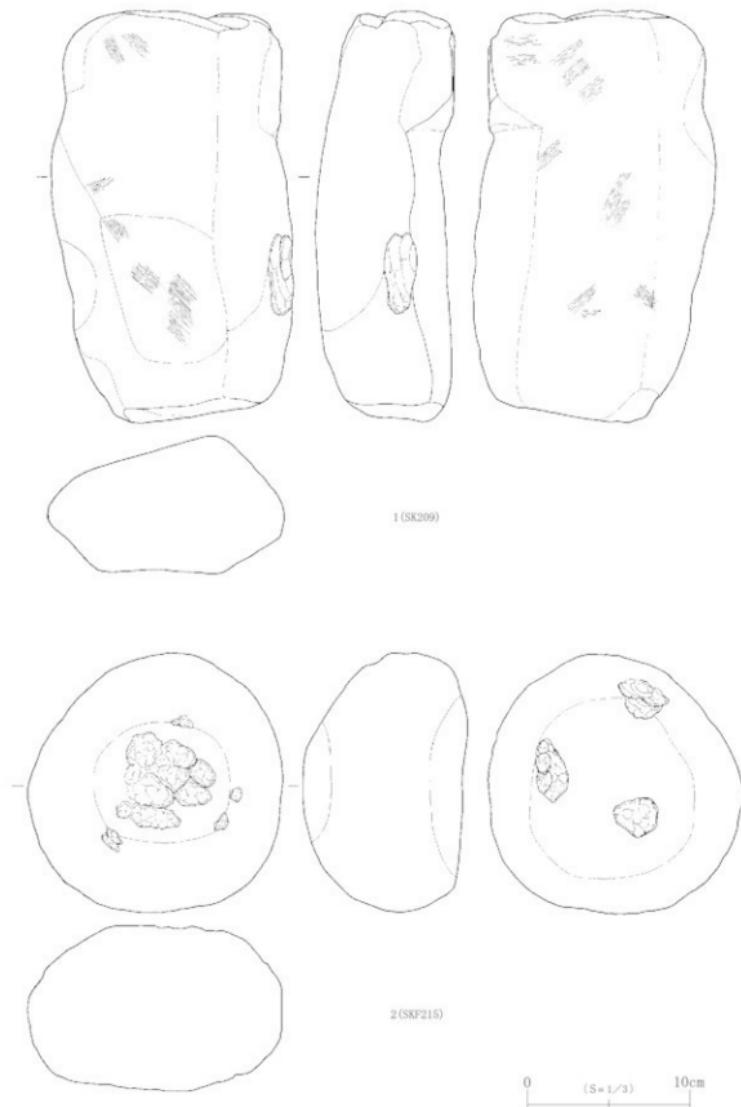
第36図 遺構内出土土器(1)



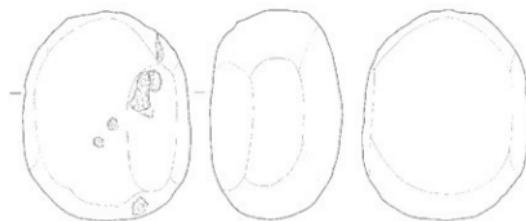
第37図 遺構内出土土器(2)



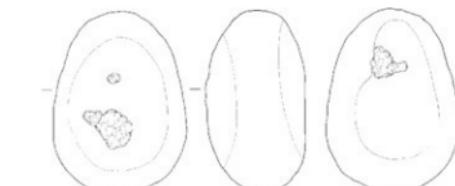
第38図 遺構内出土石器(1)



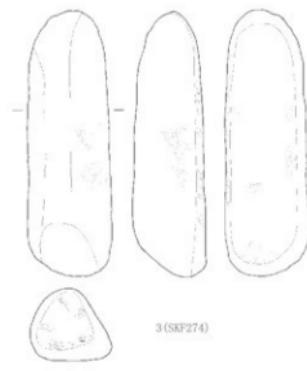
第39図 遺構内出土石器(2)



1 (SKF215)



2 (SKF232)



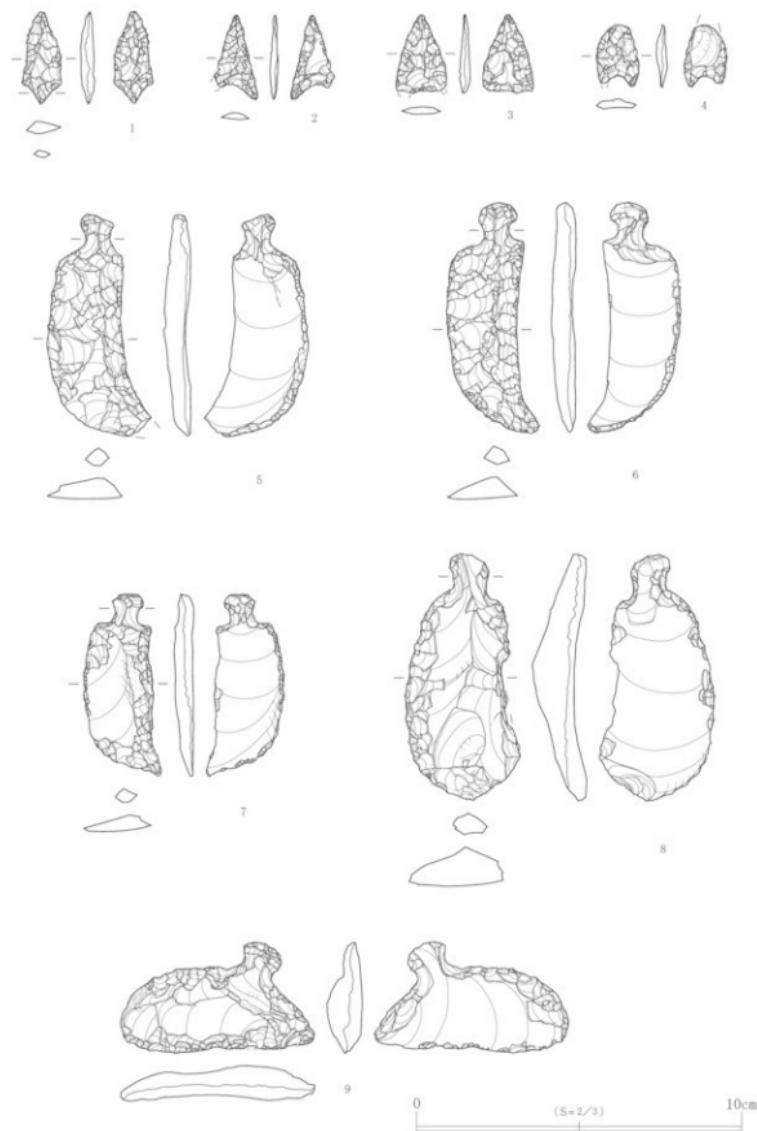
3 (SKF274)

0 (S=1/3) 10cm

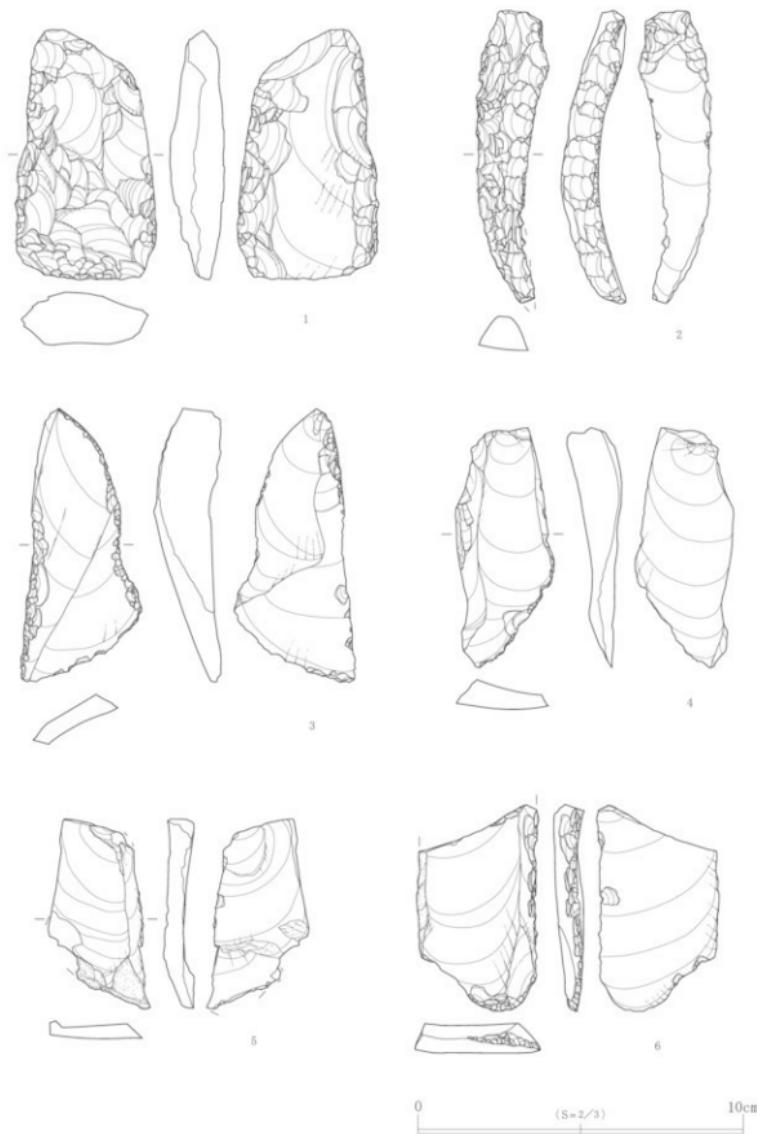
第40図 遺構内出土石器(3)



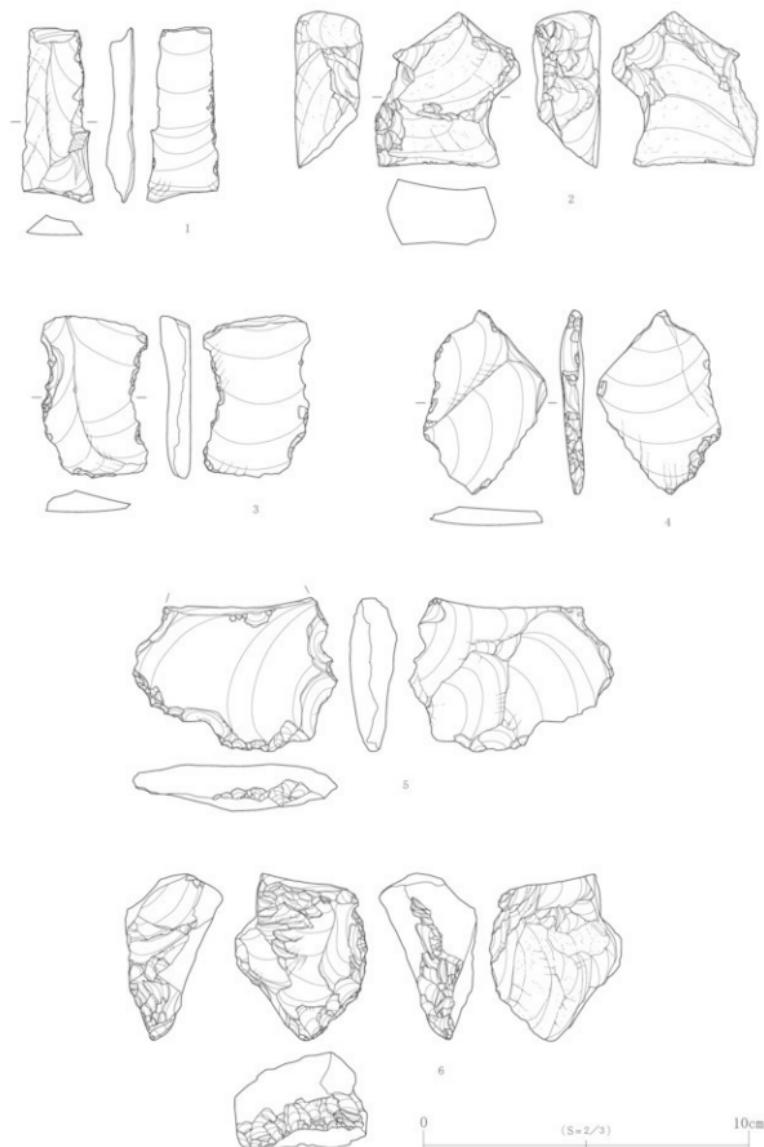
第41図 遺構外出土土器



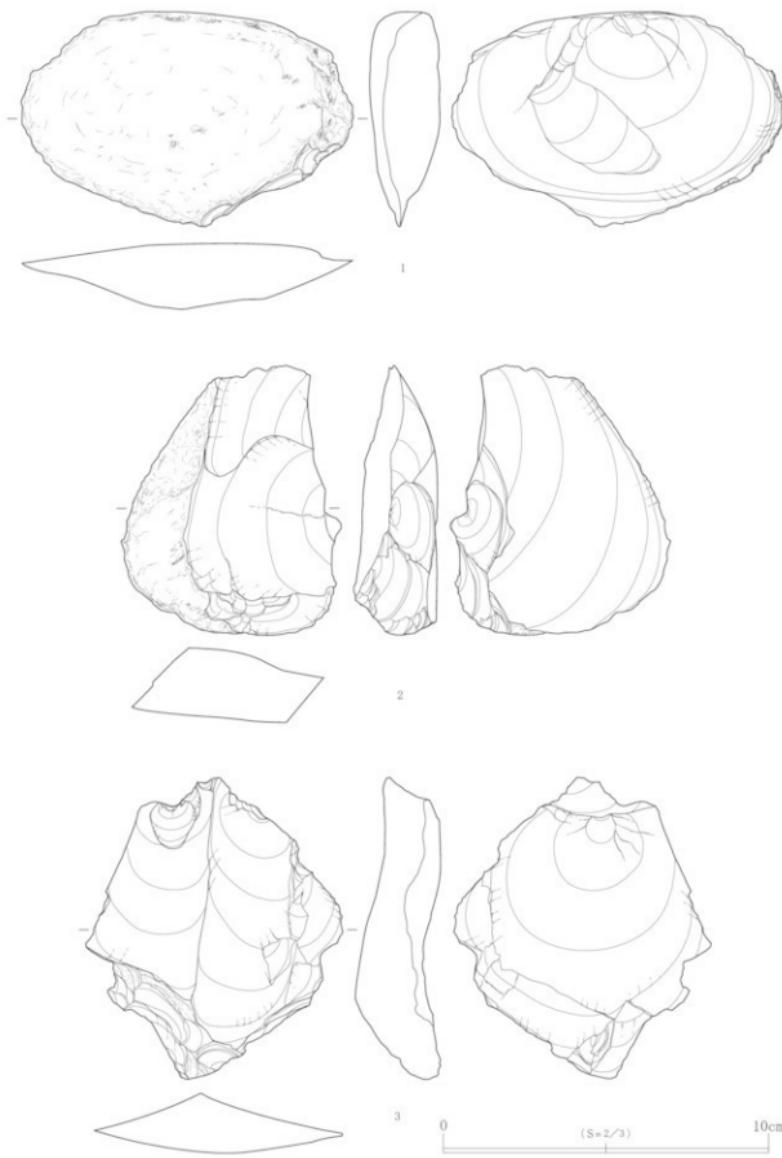
第42図 遺構外出土石器(1)



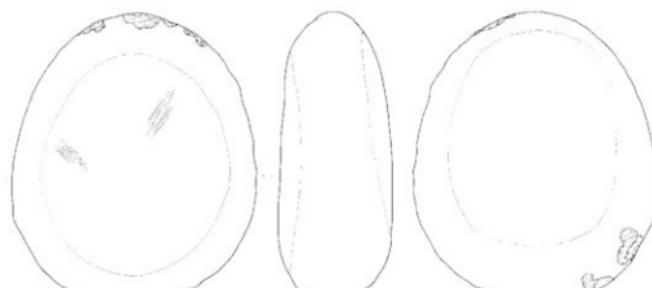
第43図 遺構外出土石器(2)



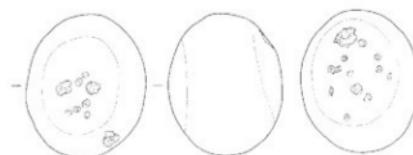
第44図 遺構外出土石器(3)



第45図 遺構外出土石器(4)



1



2



3

0 (S=1/3) 10cm

第46図 遺構外出土石器(5)

第5章 自然科学的分析

第1節 第1次調査分

パリノ・サーヴェイ株式会社

1 試料

試料は、出土遺物などから縄文時代中期末葉・縄文時代後期後葉～晩期前葉と推定される、遺構から出土した炭化物5点（試料番号1～5）である。ほとんどは炭化材であるが、SKF231出土炭化物（試料番号5）は肉眼で観察した範囲で組織がほとんど認められない。試料の詳細は、結果とともに第9表に示す。これら全点を対象に放射性炭素年代測定と樹種同定を実施する。

2 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

測定は株式会社加速器分析研究所の協力を得て、AMS法により行った。なお、放射性炭素の半減期はLibbyの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma）に相当する年代である。なお、曆年校正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.0 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、いずれの試料も北半球の大気圏における曆年校正曲線を用いる条件を与えて計算させている。なお、炭化材については、実体顕微鏡による観察で同定を実施する。

(2) 樹種同定

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

3 結果

(1) 放射性炭素年代測定

結果を第9・10表に示す。試料の測定年代（補正年代）は、SKF219出土炭化材（試料番号4）が4890BP、S129出土炭化材（試料番号1）が3940BP、SKF205出土炭化材（試料番号2）とSKF215出土炭化材（試料番号3）が3090～3010BP、SKF231出土炭化物（試料番号5）が2070BPの値を示す。既存の東北地方における縄文土器型式と放射性炭素年代との対応関係（キーリ・武藤, 1982）によれば、縄文時代前期の年代が6000～4600BP、中期の年代が4600～4000BP、後期の年代が4000～3250BP、晩期の年代が3250～2250BPとされている。今回の測定値は、SKF219出土炭化材（試料番号4）が縄文時代前期、S129出土炭化材（試料番号1）が縄文時代後期、SKF205出土炭化材（試料番号2）とSKF215出土炭化材（試料番号3）が縄文時代晩期に相当する値を示す。今後は、同一遺構・同一層準から出土した炭化物等の測定点数を増やすことにより、さらに詳細な年代資料が得られると思われる。

(2) 樹種同定

樹種同定結果を第9表に示す。SKF231出土炭化物（試料番号5）は、微細な炭粉と土壤が塊状に固化したものであり、木材組織が観察できないために樹種の同定には至らなかった。その他の炭化材は、全て広葉樹のクリに同定された。以下に、解剖学的特徴等を記す。

○クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圈部は2~4列、孔圈外で急激~やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高。

4 考察

炭化材が出土した遺構は、出土遺物などから試料番号1が縄文時代中期、試料番号2が縄文時代後期~晚期前葉の可能性が指摘されている。今回の年代測定結果では、試料番号4で上記の想定年代より古い値が得られたが、他はほぼ遺物などから想定される年代觀と矛盾しない年代値である。炭化材は樹種不明の1点を除く4点がクリに同定された。クリは現在の本地域周辺の落葉広葉樹林内に普通に見られる樹種であり、本遺跡周辺で入手可能な木材が利用されたことが推定される。また、クリは果実が重要な植物食糧となる種類であり、縄文時代には栽培されていたことも推定されている。そのため、本地域でもクリ材利用の背景には、クリの栽培が関係している可能性もある。しかし、現時点では、今後さらに資料を蓄積して検討すべき課題といえる。

《第5章第1節 参考文献》

キーリ・C.T./武藤康弘 「縄文時代の年代」 「縄文文化の研究Ⅰ 縄文人とその環境」 所収
雄山閣 1982(昭和57)年

第9表 第1次調査分 放射性炭素年代測定および樹種同定結果表

試料番号	遺構	出土位置	試料の質	種類	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code.No.
1	S I 29	底面付近	炭化材	クリ	3940±50	-23.55±0.83	3910±40	IAAA-42101
2	SKF205	底面	炭化材	クリ	3090±40	-22.52±0.72	3050±40	IAAA-42102
3	SKF215	底面付近	炭化材	クリ	3010±40	-27.93±0.69	3060±40	IAAA-42103
4	SKF219	底面付近	炭化材	クリ	4890±50	-28.29±0.70	4950±40	IAAA-42104
5	SKF231	底面付近	炭化材	不明	2070±40	-22.86±0.95	2030±40	IAAA-42105

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用。

2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。

第10表 第1次調査分 厳年較正結果表

試料番号	補正年代(BP)	曆年較正年代(cal)			相対比	Code No.
1	3938±46	cal BC 2,549 - cal BC 2,538	cal BP 4,499 - 4,488	0.054	IAAA-42101	
		cal BC 2,490 - cal BC 2,394	cal BP 4,440 - 4,344	0.678		
		cal BC 2,385 - cal BC 2,346	cal BP 4,335 - 4,296	0.268		
2	3093±43	cal BC 1,418 - cal BC 1,368	cal BP 3,368 - 3,318	0.545	IAAA-42102	
		cal BC 1,360 - cal BC 1,314	cal BP 3,310 - 3,264	0.455		
3	3009±43	cal BC 1,372 - cal BC 1,343	cal BP 3,322 - 3,293	0.158	IAAA-42103	
		cal BC 1,317 - cal BC 1,208	cal BP 3,267 - 3,158	0.788		
		cal BC 1,201 - cal BC 1,196	cal BP 3,151 - 3,146	0.029		
		cal BC 1,139 - cal BC 1,135	cal BP 3,089 - 3,085	0.025		
4	4892±45	cal BC 3,704 - cal BC 3,643	cal BP 5,654 - 5,593	1.000	IAAA-42104	
5	2066±41	cal BC 163 - cal BC 130	cal BP 2,113 - 2,080	0.252	IAAA-42105	
		cal BC 119 - cal BC 40	cal BP 2,069 - 1,990	0.748		

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.0 (Copyright 1986 - 2005 M Stuiver and PJ Reimer) を使用。
- 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。

第2節 第2次調査分

株式会社古環境研究所

1 試料

試料は、S B35P 4 (試料番号1)、S N18 (試料番号2)、S N230 (試料番号4)、S W255 (試料番号5) の炭化材4点とS E139 (試料番号3) の木材1点の計5点である。

2 放射性炭素年代測定

(1) 方法

試料に二次的に混入した有機物を取り除くために、まず蒸留水中で試料を細かく粉碎し、超音波洗浄および煮沸洗浄を行った。次に塩酸 (HCl) により炭酸塩を除去した後、水酸化ナトリウム (NaOH) により二次的に混入した有機酸を除去した。さらに塩酸 (HCl) で洗浄し、最後にアルカリによって中和した。こうして前処理を行った試料は、定温乾燥機内で80°Cで乾燥した。

乾燥後、試料中の炭素を燃焼して二酸化炭素に変え、これを真空ライン内で液体窒素、ドライアイス・メタノール、n-ペンタンを用いて精製し、高純度の二酸化炭素を回収した。こうして得られた二酸化炭素を鉄触媒による水素還元法でグラファイト粉末とし、アルミニウム製のターゲットホルダーに入れてプレス機で圧入しグラファイトターゲットを作製した。これらのターゲットをタンデトロン加速器質量分析計のイオン源にセットして測定を行った (AMS法)。なお放射性炭素年代測定にあたっては、米国のBeta Analytic Inc. の協力を得た。

(2) 結果

放射性炭素年代測定および暦年較正の結果を第11表に示す。

第11表 第2次調査分 放射性炭素年代測定結果および暦年較正結果表

試料番号	測定No. (Beta-)	^{14}C 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年BP)	曆年代 (西暦)
No. 1	205780	140±40	-23.0	170±40	交点 : cal AD 1680, 1770, 1800, : cal AD 1940, 1950 1 σ : cal AD 1660~1690 : cal AD 1730~1810 : cal AD 1920~1950 2 σ : cal AD 1650~1890 : cal AD 1910~1950
No. 2	205781	120±40	-26.5	100±40	交点 : cal AD 1710, 1720, 1880, : cal AD 1910, 1950 1 σ : cal AD 1680~1730 : cal AD 1810~1930 : cal AD 1950~1950 2 σ : cal AD 1670~1770 : cal AD 1800~1940 : cal AD 1950~1950
No. 3	205782	190±40	-24.6	200±40	交点 : cal AD 1670 1 σ : cal AD 1660~1680 : cal AD 1740~1800 : cal AD 1930~1950 2 σ : cal AD 1640~1690 : cal AD 1730~1810 : cal AD 1920~1950
No. 4	205783	1570±40	-24.7	1570±40	交点 : cal AD 460, 480, 520 1 σ : cal AD 430~540 2 σ : cal AD 410~580
No. 5	205784	700±40	-29.0	630±40	交点 : cal AD 1310, 1370, 1380 1 σ : cal AD 1300~1400 2 σ : cal AD 1290~1410

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在(AD1950年)から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は、国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた。

2) δ (デルタ) ^{13}C 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

^{13}C 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えて算出した年代。

4) 历年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中¹⁴C濃度の変動を較正することにより算出した年代（西暦）。calはcalibrationした年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の¹⁴Cの詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と¹⁴C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベースでは約19,000年BPまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年BP以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは、補正¹⁴C年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1σ（シグマ）(68%確率)と2σ(95%確率)は、補正¹⁴C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。

3 樹種同定

(1) 方法

木材は、カミソリを用いて試料の新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。また、炭化材については、試料を割折して新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

(2) 結果

同定結果は以下のようになった。SB35P4（試料番号1）が広葉樹、SN18（試料番号2）およびSE139（試料番号3）がカエデ属、SN230（試料番号4）がスギ、SW255（試料番号5）がサクラ属となった。

また、以下に同定の根拠となった特徴を記す。

○スギ *Cryptomeria japonica* D.Don スギ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。樹脂細胞が存在する。以上の形質よりスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強韌で、広く用いられる。

○サクラ属 *Prunus* バラ科

横断面：小型で丸い道管が、単独あるいは2～3個放射方向および斜め方向に複合して散在する散孔材である。道管の径は、早材部から晩材部にかけてゆるやかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は、同性に近い異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で1～4細胞幅である。

以上の形質よりサクラ属に同定される。サクラ属には、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、シウリザクラ、ウメ、モモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または低木である。

○カエデ属 Acer カエデ科

横断面：小型で丸い道管が、単独あるいは2～4個放射方向に複合して散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、内壁には微細な螺旋肥厚が存在する。放射組織は、平伏細胞からなる同性である。

接線断面：放射組織は、同性放射組織型で1～6細胞幅である。道管の内壁には微細な螺旋肥厚が存在する。

以上の形質よりカエデ属に同定される。カエデ属には、イタヤカエデ、ウリハダカエデ、ハウチワカエデ、テツカエデ、ウリカエデ、チドリノキなどがあるが、放射組織の形質からウリカエデ、チドリノキ以外のいずれかである。北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または小高木で、大きいものは高さ20m、径1mに達する。材は耐朽性および保存性は中庸で、建築、家具、器具、楽器、合板、彫刻、薪炭など広く用いられる。

○広葉樹 broad-leaved tree

横断面：道管が存在する。

放射断面：道管と放射組織が存在する。

接線断面：道管と放射組織が存在する。

以上の形質より広葉樹に同定される。なお本試料は、極めて小片であり、広範囲の観察が困難な為、広葉樹の同定にとどまる。

4 所見

深渡A遺跡で出土した木材と炭化材について、樹種同定ならびに放射性炭素年代測定を行った。さらに、年代値を同位体分別効果により補正し、曆年代校正を行った。

その結果、SB35P4出土の炭化材（試料番号1）は広葉樹であり、 170 ± 40 年BP（2σの曆年代でAD 1650～1890年、AD 1910～1950年）の年代値が得られた。また、SN18出土の炭化材（試料番号2）はカエデ属に同定され、年代値は 100 ± 40 年BP（同じくAD 1670～1770年、AD 1800～1940年、AD 1950年）、SE139出土の木材（試料番号3）もカエデ属で、 200 ± 40 年BP（同じくAD 1640～1690年、AD 1730～1810年、AD 1920～1950年）、SN230出土の炭化材（試料番号4）はスギで、年代値は 1570 ± 40 年BP（同じくAD 410～580年）、SW255出土の炭化材（試料番号5）はサクラ属で、年代値は 630 ± 40 年BP（同じくAD 1290～1410年）であった。

なお、スギは温帯に広く分布し、とくに中間域の積雪地帯で純林を形成する針葉樹である。サクラ属とカエデ属は温帯に分布し、斜面等に生育する落葉広葉樹である。以上のことから深渡A遺跡の木材および炭化材は、遺跡の周辺または近隣から流通によってもたらすことのできる樹種であったと考えられる。

《第5章第2節 参考文献》

- 佐伯浩・原田浩 「広葉樹材の細胞」 「木材の構造」 所収 文水堂出版 1985 (昭和60) 年
島地謙・伊東隆夫 「日本の遺跡出土木製品総覧」 雄山閣 1988 (昭和63) 年
山田昌久 「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成」 「植生史研究特別第1号」 所収
植生史研究会 1993 (平成5) 年
Stuiver, M., et. al., «INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, Radiocarbon, 40.» 1998 (平成10) 年
中村俊夫 「放射性炭素法」 「考古学のための年代測定学入門」 古今書院 1999 (平成11) 年

第6章　まとめ

深渡A遺跡の発掘調査では、2段に分かれる小又川左岸の段丘上9,700mの発掘調査を行い、縄文時代前期前葉からの人々の生活痕跡を確認することができた。ここでは、検出遺構と出土遺物を中心に時期毎にその内容を確認し、まとめとしたい。

○縄文時代前期前葉～後葉

段丘低位面の地山漸位層（IV層）において、前期の土器が出土している（第41図1～7）。出土した位置は調査区南側の小又川に接する段丘縁近く（HD37、HE37・38）、および高位段丘下の比較的広い空間（IA55・IK57・IH54・IG52）である。波状口縁で角押文列によって口縁部および胴部に幾何学的な文様を施すもの（1）、同じく波状口縁で口縁以下にO段多条原体の閉端の回転文（ループ文）を施すもの（2・3）、平縁で原体閉端回転文を施すもの（4）、原体結節部の回転文を施す胴部片（5）、竈状工具の先端による押引文で文様構成した胴部片（6）がある。いずれも胎土に纖維を含み、前期前葉に帰属する土器である。同じ地区から出土した竈状石器（第43図1）も裏面側に素材剥片の主要剥離面を残し、両側縁に調整を加えた早期中葉～前期前葉に特徴的な直刃斧状石器（トランシェ様石器）の系譜を引く石器であり、同じ時期と見てよい。遺構検出はなかったものの、これらは本遺跡周辺での最初の活動痕跡としてよい。この後、前期後葉には高位段丘下の広い面（IR61・62）に第41図7の土器が残されている。口縁部には絡繩体の側面圧痕文列を施し、胴部との境には竹管状工具による刺突列を施し、以下胴部には木目状燃糸文を施す円筒下層c式土器である。前期後葉の活動痕跡はこの1点のみであるが、前期前葉に開始した活動が断続的ながら後葉まで続いたことを示している。

○縄文時代中期末葉

この時期には、調査区の南側、小又川に面した低位段丘縁に1軒の堅穴住居が作られている。HG41・42区で見つかったSI29堅穴住居跡である。住居は第4章第2節で述べたように住居から配石遺構への変遷が認められる。住居は当初床面中央に地床炉が作られるが、その後に複式炉に作り替えられ、さらに住居が廃絶した後に複式炉のある東壁を中心に石が追加されて組まれ、また、住居外にも弧状に石を組んで全体が配石遺構に作り替えられている。住居内からは第36図1～5の土器が出土している。1～3は口縁部に無文帯をもち胴部に縄文を施す深鉢形土器であり、器形および口縁胴部の施文において強い齊一性をもつ。口縁から逆J字のモチーフが施された1の土器の特徴から、これらは大木10式の新しい段階に比定することができよう。ところで、SI29堅穴住居跡と同様に、複式炉をもつ住居から配石へと変遷した遺構に、本遺跡に隣接する深渡遺跡検出のSI2001堅穴住居跡がある。SI2001は、出土した土器から大木10式の古い段階と推定され、小又川左岸の本遺跡周辺において、複式炉住居から配石遺構へと作り替える行為が連続した時間の中で行われていたことを示している。秋田県内において大木10式期を中心とする中期後葉は堅穴住居跡が数多く検出される時期であり、集落としても一般に複数の住居跡が環状の配置でまとまる例が多い。しかし、小又川流域に

おける本遺跡あるいは深渡遺跡では、単独の住居で立地しその後に配石遺構に作り替えられるという、特徴的なあり方を示す。領域内での集団のあり方、あるいはその存続の仕方に違いを示すものとして特筆すべき事実である。

○縄文時代晚期前葉

調査区南側の高位段丘面縁辺部では、フ拉斯コ状土坑16基を検出した。土坑内からは第36図6～9、および第37図1～11の上器が出土しており、概ね晚期前葉の大洞B式に比定される。土坑はその形態から第一義的に貯蔵穴として作られたものと判断されるが、第36図6のように全面を朱で飾った精製の壺形土器が納められたSKF23の例から、墓坑に転用された例があったことが示されている。晚期前葉のフ拉斯コ状土坑は深渡遺跡でも住居1軒を伴って検出されている。おそらくは、小又川に沿った段丘面のうち標高189～190m前後の比較的高い面の縁辺が、晚期の小規模な集団により堅果類等の採集および貯蔵の場として点在したのではないか、と推察する。堅果類の貯蔵は1年を越しては継続しない。開口部が崩落し貯蔵穴として機能を失う構築後1年を経た貯蔵穴は墓坑に再利用する、小又川左岸の晚期前葉には、こうした土坑の使用がなされていたものではないか、と推定する。

○近世

高位段丘面では、梁行3間×桁行9間の直家形式のSB35掘立柱建物跡を中心に、石組の井戸跡(SE139)や2間×3間の掘立柱建物跡(SB32)が立地する。低位面においてもSB30掘立柱建物跡・SW255炭窯遺構があり、これらは全体でひとつの居住・作業空間を構成していたものと考えられる。ことに、中心となるSB35建物跡は、馬屋と推定される出入り口の土間部分、屋敷を横断する通路の役割も果たしたと推測される出入り口から広間への土間(いわゆる上線)を備えた、規模の大きな建物である。広間は3つの間取りに仕切られ、居間の隅に小さな寝室を作る広間隅寝室三間取り形式である。居間に位置するSN18・19の焼土は、圍炉裏のような役割を担っていたと想定できる。また、SN18の下部にSKP109・110の柱穴が位置し、土間部分が南東側に約2間分広かつたときの柱穴と推測される。ほかに、南西側的一面庇から約2m離れた地点にはSA156が位置し、本遺構に付随する廻りと判断する。このような間取り形式は、東北北部においては近世初期から発生するといわれ、近世期全般に及ぶ間取り形式の発展過程においても、その基本的配置はあまり変わらないようである(草野1995)。本遺跡には近世期、当地の地主的存在だったといわれる「齊藤家」が居住したことが伝えられている。今回、検出されたSB35建物跡の間取りの大きさ、そして、廻や井戸を建物近くに配する特徴、さらに他の作業施設や建物跡を含めた構成等を考慮すると、村役級の屋敷跡の存在を考えることが適当であり、この「齊藤家」との関係が強く想定される。

《第6章 参考文献》

- 石井寛 「東北地方における礫石附帯施設を有する住居址とその評価－中期最終末期以降を対象として－」『縄文時代』第14号所収 縄文時代文化研究会 2003(平成15)年
- 塙原正典 「配石遺構(考古学ライブラリー49)」 ニュー・サイエンス社 1987(昭和62)年
- 坂口隆 「縄文時代貯蔵穴の研究」 未完成考古学叢書⑤ 株式会社アム・プロポーション 2003(平成15)年
- 五十嵐典彦編 「秋田の民家」 秋田県企画調整部企画調整課 1982(昭和57)年
- 草野和夫 「近世民家の成立過程」 中央公論美術出版 1995(平成7)年



1 遺跡全景（東→）



2 遺跡全景（南→）



1 S I 29竪穴住居跡 現況（南西→）



2 S I 29竪穴住居跡 複式炉・石組 現況（北東→）



1 S I 29竪穴住居跡
断面（南西→）



2 S I 29竪穴住居跡
現況（南東→）



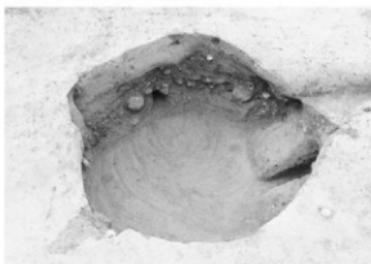
3 S I 29竪穴住居跡
完掘（南東→）



1 調査区中央部 SKF フラスコ状土坑群 完掘 (南東→)



2 SKF 22 フラスコ状土坑 断面 (西→)



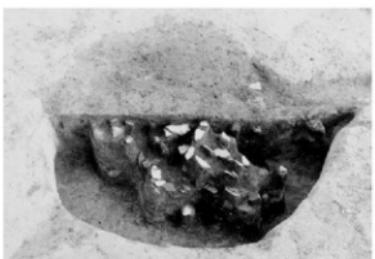
3 SKF 22 フラスコ状土坑 完掘 (西→)



4 SKF 23 フラスコ状土坑 断面 (北西→)



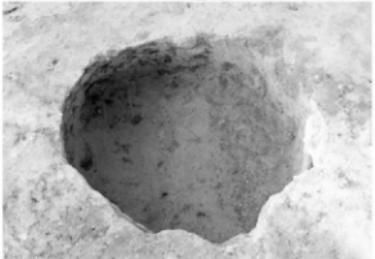
5 SKF 23 フラスコ状土坑 完掘 (北西→)



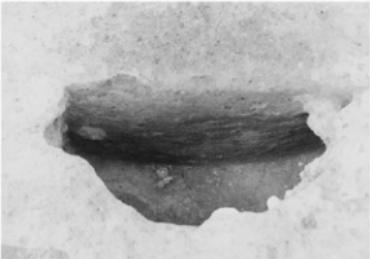
1 SKF23 フラスコ状土坑
遺物出土状況（北西→）



2 SKF80 フラスコ状土坑 断面（南東→）



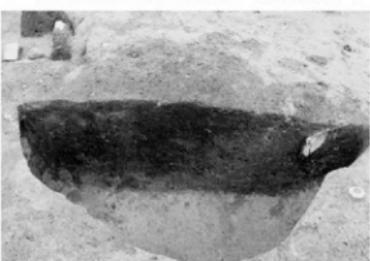
3 SKF80 フラスコ状土坑 完掘（南東→）



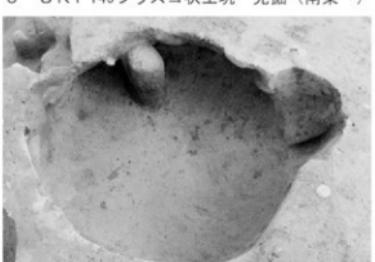
4 SKF149 フラスコ状土坑 断面（南東→）



5 SKF149 フラスコ状土坑 完掘（南東→）



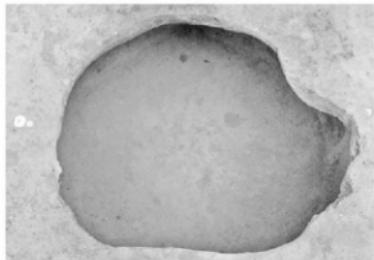
6 SKF154 フラスコ状土坑 断面（北西→）



7 SKF154 フラスコ状土坑 完掘（北西→）



8 SKF205 フラスコ状土坑 断面（南→）



1 SKF 205 フラスコ状土坑 完掘（北西→）



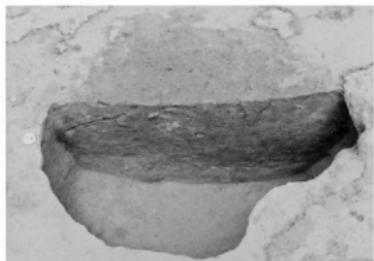
2 SKF 206 フラスコ状土坑 断面（南→）



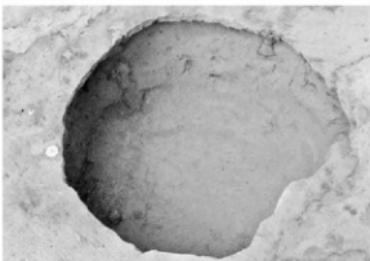
3 SKF 206 フラスコ状土坑 現況（南→）



4 SKF 206 フラスコ状土坑 完掘（南→）



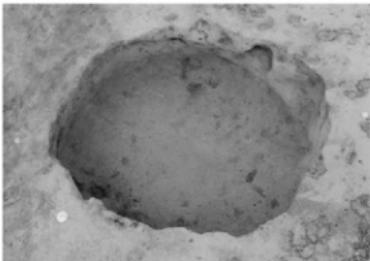
5 SKF 207 フラスコ状土坑 断面（南→）



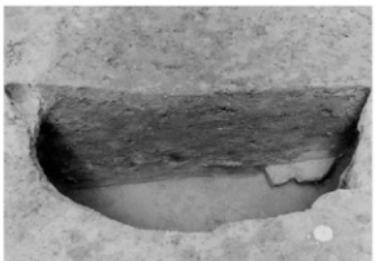
6 SKF 207 フラスコ状土坑 完掘（南→）



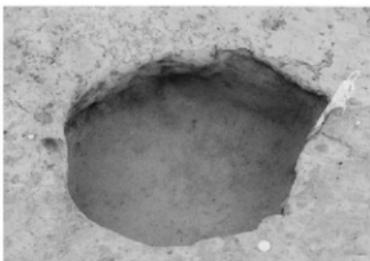
7 SKF 208 フラスコ状土坑 断面（南西→）



8 SKF 208 フラスコ状土坑 完掘（南西→）



1 SKF211 フラスコ状土坑 断面（南→）



2 SKF211 フラスコ状土坑 完掘（南→）



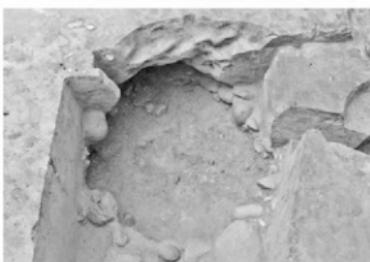
3 SKF215 フラスコ状土坑 断面（北→）



4 SKF215 フラスコ状土坑 完掘（北→）



5 SKF219 フラスコ状土坑 断面（北東→）



6 SKF219 フラスコ状土坑 完掘（北東→）



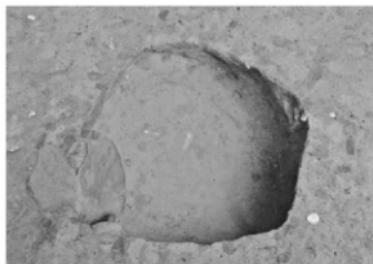
7 SKF231 フラスコ状土坑 断面（北西→）



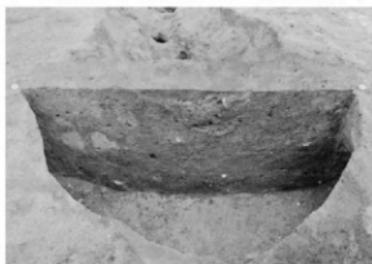
8 SKF231 フラスコ状土坑 完掘（北西→）



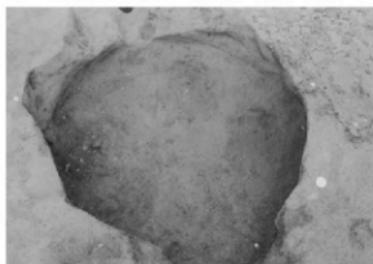
1 SKF233 フラスコ状土坑 断面（南東→）



2 SKF233 フラスコ状土坑 完掘（南東→）



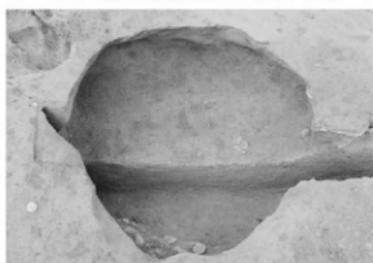
3 SKF261 フラスコ状土坑 断面（南西→）



4 SKF261 フラスコ状土坑 完掘（南西→）



5 SKF274 フラスコ状土坑 断面（北東→）



6 SKF274 フラスコ状土坑 完掘（北東→）



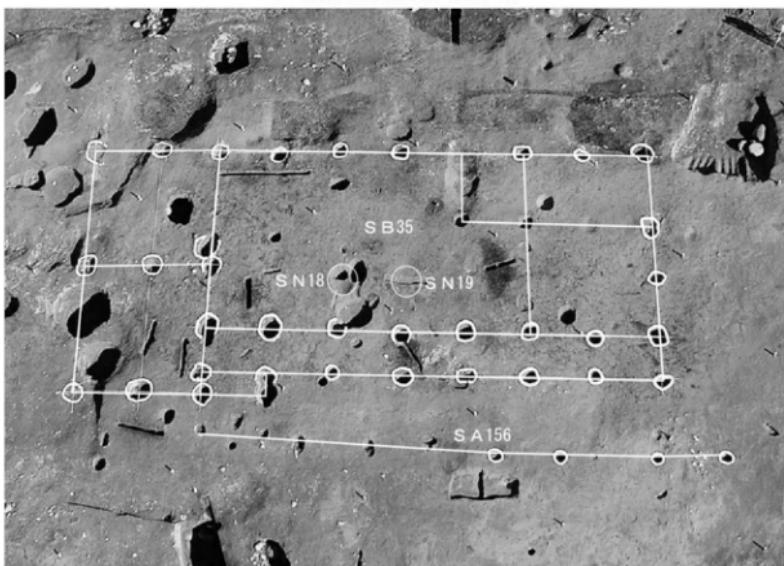
7 SK87 土坑 断面（北東→）



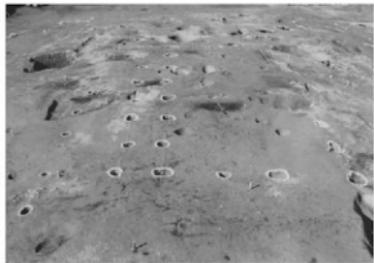
8 SK87 土坑 完掘（北東→）



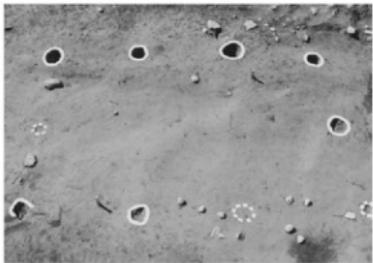
1 調査区南東部全景（南西→）



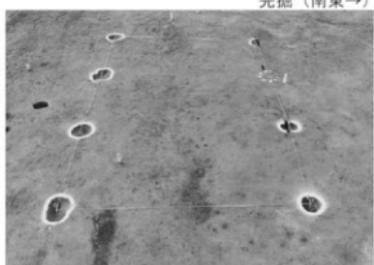
2 S B35掘立柱建物跡・S A156柱穴列 完掘（南西→）



1 S B35掘立柱建物跡・S A156柱穴列
完掘（南東→）



2 S B30掘立柱建物跡 完掘（北東→）



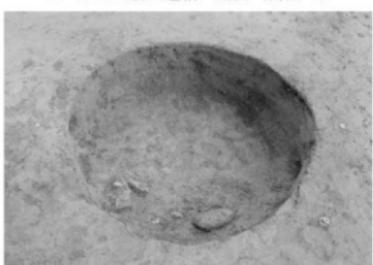
3 S B32掘立柱建物跡 完掘（南東→）



4 S N18焼土遺構 断面（南西→）



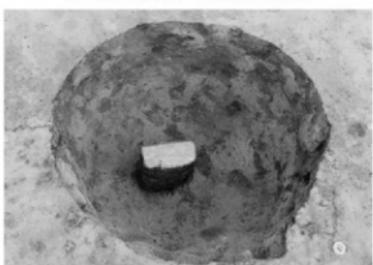
5 SK24土坑 断面（北西→）



6 SK24土坑 完掘（北西→）



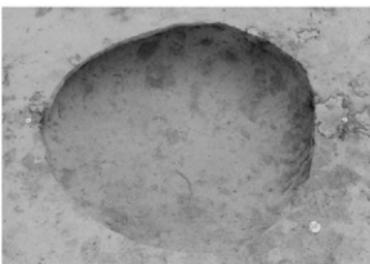
7 SK209土坑 断面（西→）



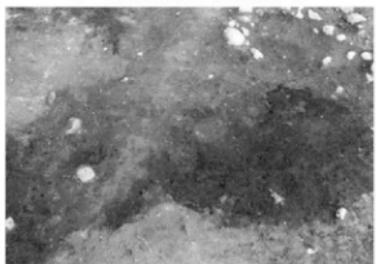
8 SK209土坑 完掘（西→）



1 SK232土坑 断面（西→）



2 SK232土坑 完掘（西→）



3 SE139井戸跡 確認（西→）



4 SE139井戸跡 断面（西→）



5 SE139井戸跡 完掘（西→）



6 SE139井戸跡 現況（西→）



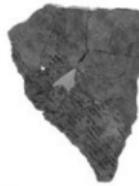
7 SW255炭窯 確認（北西→）



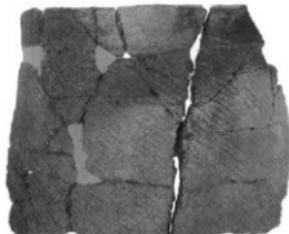
8 SW255炭窯 断面（南西→）



36-1 (SKF29)



36-2 (SKF29)



36-3 (SKF29)



36-4 (SKF29)



36-5 (SKF29)



36-7 (SKF23)



36-8 (SKF23)



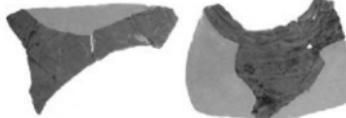
36-6 (SKF23 口縁部・胴部)



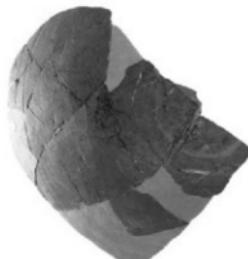
36-9 (SKF23)



37-3 (SKF23)

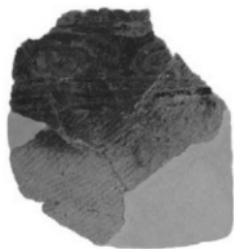


36-6 (SKF23 脇部～底部①)

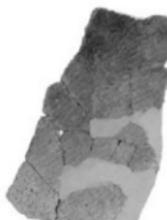


36-6 (SKF23 脇部～底部②)

遺構内出土土器(1)



37-1 (SKF23)



37-2 (SKF206)



37-5 (SKF206)



37-6 (SKF206)



37-9 (SKF233)



37-10 (SKF233)



37-4 (SKF215)



37-7 (SKF207)



37-8 (SKF261)



37-11 (SKF274)



37-12 (SKF28)



37-13 (SKF28)

遺構内出土土器(2)



38-1 (SN18)



38-2 (SN230)



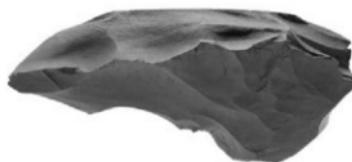
38-3 (SKF23)



38-4 (SKF23)



38-5 (SK25)



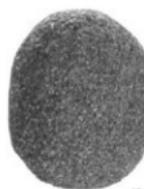
38-6 (SKF80)



39-1 (SK209)



39-2 (SKF215)



40-1 (SKF215)



40-2 (SK232)



40-3 (SKF274)

遺構内出土石器



41-1



41-2



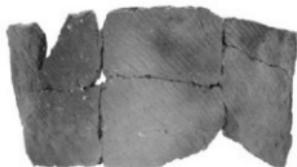
41-3



41-4



41-6



41-5



41-7



41-8



41-9



41-12

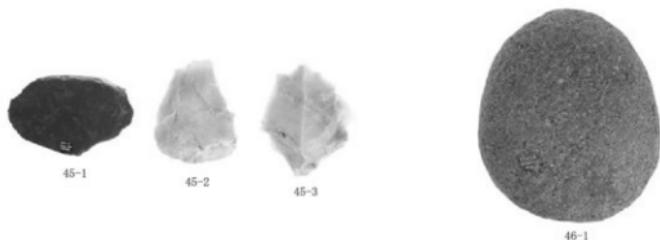
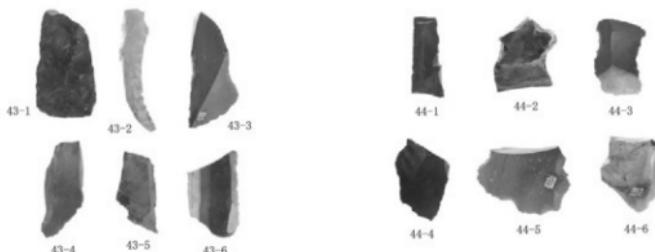


41-10



41-11

遺構外出土土器



遺構外出土石器

報告書抄録

ふりがな	ふかわたり いせき						
書名	深渡A遺跡						
副書名	森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次	XVII						
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書						
シリーズ番号	第408集						
編著者名	小林克・菅原一彦・三浦俊成・石川和良						
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター						
所在地	〒014-0802 秋田県大仙市払田字牛嶋20番地 TEL 0187-69-3331						
発行機関	秋田県教育委員会						
所在地	〒010-8580 秋田県秋田市山王三丁目1番1号 TEL 018-860-5193						
発行年月日	西暦2006年3月						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
ふかわたり いせき 深渡 A 遺跡	あきた けん 秋田県 かたあきた し 北秋田市 もりよしだ 森吉字 ふかわたり 深渡 いののまえ 家ノ前 45外	05323 旧コード		40° 2' 48" 140° 31' 25"	第1次 20030916 3 20031107 第2次 20040511 3 20040709	第1次 5,000m ² 第2次 4,700m ² 計9,700m ²	森吉山ダム 建設事業に 係る発掘調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
深渡 A 遺跡	集落跡 貯藏域 墓域 (縄文 時代)	縄文時代 近世	竪穴住居跡	1	縄文土器 石器	以下の3期に及ぶ生活 痕跡を確認した。	
			フ拉斯コ状土坑	16			
			土坑	2			
			柱穴列	1	銭貨	①縄文時代中期末葉頃 における小規模な集 落跡	
			掘立柱建物跡	3	陶磁器	②縄文時代晚期前葉頃 における食料貯藏域 および墓域	
	集落跡 (近世)	井戸跡	1		③近世前期頃における 小規模な集落跡		
		焼土遺構	2		※縄文時代前期前葉～ 後葉にかけては遺物 出土のみ		
		炭窯	1				
		柱穴列	2				
		掘立柱建物跡	2				
	溝跡	1					
	焼土遺構	1					
	土坑	17					
	性格不明遺構	3					

秋田県文化財調査報告書第408集

深渡 A遺跡

—森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XVI—

印刷・発行 平成18年3月

編 集 秋田県埋蔵文化財センター

〒014-0802 秋田県大仙市払田字牛嶋20番地

電話 (0187) 69-3331

FAX (0187) 69-3330

発 行 秋田県教育委員会

〒010-8580 秋田県秋田市山王三丁目1番1号

電話 (018) 860-5193

印 刷 株式会社 ウエーブ